日本語と日本人

司馬遼太郎 対談集



中公文庫

著者紹介

司馬遼太郎（しばりょうたろう）

一九二三年、大阪生れ。作家。『梟の城』で昭和三十四年下期直木賞を受賞。主な著書に『竜馬がゆく』『坂の上の雲』『空海の風景』『韃靼疾風録』ほか多数。一九九六年二月十二日歿。

井上ひさし（いのうえ）

一九三四年、山形県生れ。作家。『手鎖心中』で昭和四十七年上期直木賞を受賞。主な著書に『吉里吉里人』『道元の冒険』『戯作者銘々伝』『家庭口論』ほか多数。

大野晋（おおのすすむ）

一九一九年、東京生れ。学習院大学名誉教授（国語学）。主な著書に『日本語の世界1　日本語の成立』『日本語の起源』『源氏物語』など多数。

徳川宗賢（とくがわむねまさ）

一九三〇年、東京生れ。現在、学習院大学文学部教授（言語学、国語学）。主な著書に『日本語の世界8　言葉・西と東』『日本言語地図』（共編）など多数。

多田道太郎（ただみちたろう）

一九二四年、京都生れ。京都大学名誉教授。主な著書に『しぐさの日本文化』『遊びと日本人』『管理社会の影』『日本語の作法』など多数。

赤尾兜子（あかおとうし）

一九二五年、兵庫県生れ。俳人。一九六二年、現代俳句協会賞を受賞。主な句集に『蛇』『歳華集』など、『赤尾兜子全句集』『飆』がある。一九八一年歿。

松原正毅（まつばらまさたけ）

一九四二年、広島県生れ。現在、国立民族学博物館教授、総合研究大学院大学教授。専攻、社会人類学。主な著書に『遊牧の世界』など多数。

中公文庫

日本語と日本人

対談集

司馬遼太郎



中央公論社

表紙・扉　白井晟一

目次

世界に目ざめて30年 ——新日本人を語る	井上ひさし 好子	7
日本語の起源の秘密を追う	大野　晋	61
日本の母語は各地の方言	徳川宗賢	95
しぐさ言葉を生む日本文化	多田道太郎	135
空海・芭蕉・子規を語る	赤尾兜子	165
稲作文化と言葉	松原正毅	209

司馬遼太郎対談集

日本語と日本人

世界に目ざめて30年——新日本人を語る

井上ひさし
好子
司馬遼太郎

平清盛が奉行した寺

井上　京都の町なかから、ちょっと来ただけなのに、山深いところですねえ。関東平野でいえば、筑波山の麓みたいな感じを想像していたのですが……。こういう深いところだとは、ぜんぜん思いませんでした。

司馬　京都は、変な都市ですね。一足郊外に出ると、木曾路にもないような山深いところがあって、そういうところがあるからこそ、千年以上も都会が続いたのかもしれません。

井上　私たち、京都に来ましても、鞍馬山を越えて、なんていう発想はほとんどありませんでしょう……。

司馬　じゃあ、案内人として、ちょっと説明をしますけど。（笑）ここはもともとは、山伏の宿坊だったようです。この百メートルほど向こうに大悲山峰定寺というのがあって、修験のお寺なんですね。シャクナゲがここにまであるでしょう。

　山門から四百段ばかり登った山の頂上に、清水寺のものよりもっと古風な舞台が崖にひっかかっていて、そこが本堂になっているんですね。

井上　私は他人から「恐怖症貴族」とばかにされるぐらい、いろんなものが恐くて仕方がないの

ですけど、なかでも高所が一番苦手なんです。

司馬　で、飛行機ぎらい。

井上　ええ。

司馬　飛行機も山寺も十把ひとからげで高所。（笑）

井上　ずいぶん高いんでしょう。

司馬　明日でもご案内しようと思ってたんですが、どうも高くて残念です。まあ、棟札が出てきたから本当だろうと思うんですけれど、平清盛が、まだぺいぺいのころに奉行したといわれてましてね。

山伏のお寺の本山というと、真言系統は宇治の醍醐三宝院、天台系統は京都の聖護院ですが、峰定寺は聖護院の末寺なんです。私は新聞記者をやっていたんですが、昭和二十二年から二十八年ぐらいまででしたか、京都勤務だったんです。お寺が受け持ちなんですよ。まだ私は二十代でしたけど、きょうは本願寺、次は知恩院といった具合で、京都中のお寺を回って、とうとうここまで来たんです。

そうしたら、ご住職というのが山形県の方でしてね。なんか発心して聖護院に来て庭掃除をされた。それで末寺であるここに来られて、山男のようにして、この山をお守していたんですね。その時、ああお坊さんというのは、本来、こうやって草を抜いたり、山を番したり、建物番をしたりしているものなのだなって思いましたですね。

井上　お経が読めるとか読めないとかではないんですね。

司馬　そうなんです。坊さんとしての士官学校出のお坊さんじゃなくて、志願の、ほんとの兵隊のお坊さん。その時分でも珍しいくらいの志願の。

井上　じつは私も山形なんです。

司馬　そうですか。その山守の坊さんが亡くなって、いま息子さんの代になっていますけどね。それも聖護院の鉢叩きという寒行の最中に、路傍で倒れたんです。その時、息子さんは京都でガードマンかなんかやっていたんですが、それでこの山寺に戻って、山守の坊さんになった。おやじさんもそうでしたが、観光客をあまり寄せつけない。で、この小さな宿とは縁戚関係にあるんですが……。

井上　この宿も客を寄せつけない、ということはないんでしょう？（笑）

司馬　ところで井上さんは、子供のとき十三詣りというのがありましたか。

井上　ありませんでした。もっとも、家柄のいい家の子どもにはそういうことがあったのかもしれませんが。

司馬　あれ、関東にはないのかな。

井上好子　あります。十三の厄年……。

司馬　京都ですとね、嵐山に虚空蔵菩薩というのが祀ってあって、そこにお詣りをするんです。実に簡便なものでして、虚空蔵さんの橋を渡る時に、振り返ってはいけないといった程度の「行」

があるわけです。

しかし私は大阪で、母親の実家が奈良だったものですから、大峰山なんです。これは十三歳の子供には、ちょっとしんどい登山になるんですけどね。

頂上にたどりつくと、行者がいまして、ああ、子供が来たっていうんで、ロープでからだを縛っちゃうんです。それで奇岩怪石の突端から、ずうっと逆落としにするんですよ。で「親孝行するか」とか「勉強するか」。(笑)

だれでも急いで「うん」って言います。(笑)そんなんで、山伏が、なにか不思議な感じの連中だと思うようになって……。

井上　……。

妖怪変化は電気をこわがる？

司馬　これも山伏のお寺なんですが、志明院というのがあるんです。ここへ来る時通った貴船(きふね)の、道路は違うんですが、ちょっと横のほうで、雲ヶ畑というところにあるんですけど。京都の植物園前のバス停から三里ほどかな、北に行ったところ。深山幽谷でしてね。

ここに最初に来たころ、やはりそのお寺にも行きまして、泊めてもらったんですよ。お化けが出るというもんですからね。お化けといっても幽霊でなくて妖怪変化(へんげ)のほうです。夜中になると、

ガタガタッと障子が鳴ったりね。

そこのお坊さんが、こわがらない人でしてね。どこかおかしいんじゃないかと思うくらい呑気な人で、やかましくてしようがないっていうんですよ。その人の自説はね、王朝時代に物の怪がいっぱい京都の辻や館に出ていたけど、いまはいない。愛宕を追われ、貴船を追われたヤツが、ここだけに生き残って、集まっているんだという、それで喜んでいるんですね。

井上好子　先生がお泊まりになったとき、ほんとに出ましたか。

司馬　全番組に出たわけじゃありませんけど。で、泊めてもらって十年ほどして、なんかの折に随筆に書いたことがあるんです。そうしたら巻紙で手紙が来ましてね。書いてくれて有り難う。(笑)ところが、このごろ出ないんだ。なぜかというと寺に電気がついた。ヤツらは電気をこわがるんだ。で、いなくなっちゃったと……。

京都というところはね、都の翳りの部分の人文も当然ながら深くて、一歩周辺に出ると、おかしなところがありますよ。

井上　いま司馬先生のお話をうかがっていて思ったんですが、山形に似たところありますね。山伏なんかが、いそうな山の形ですね。朝日岳とか小国、あのへんの感じと、よく似ているような気がします。

司馬　湯殿山とか羽黒山、月山とか山形の山伏の国ですね。

井上　ええ。山の形が非常に圧縮されているというか。急傾斜の山が目白押しになっていて、入

ってみると複雑で。風もないのに木の幹が揺れたり枝がざわざわと鳴ったり、木の葉が雨のように降ってきたり、向こうを走って行く足音が聞こえたり。そういう怪しい異変が起こりそうな気配が、ここにも、山形の朝日岳付近の山にもありますね。

司馬　そうですねえ、行場は共通性があるんですね。

井上　司馬先生がオーストラリアからお帰りになるとき空港までお見送りしましたが、あのときは、こたえました。何か独り取り残されたようで。そのうちに女房も帰りまして……。

司馬　秋風落莫？（笑）

井上　そうですね。それで毎日、映画見ていたわけです。そんな私をちょっと見かねたのか、ある人が、キャンベラ大学にドーイ博士という有名な遺伝学の先生がいるから会ってみないかっていうんです。『子供の科学』かなんかで、前にチラッと読んだ記憶があって、すぐお目にかかりました。

　このドーイ先生は、なんで有名かといいますと、トマトの細胞とハツカネズミの細胞をくっつけちゃったわけです。

司馬　ほう……。

井上　くっつけるぐらいなら私らでもできますけど（笑）、植物の細胞と動物の細胞とを融合させ、その上、そのまま生かしちゃったわけですね。

司馬　ほう……。

井上　それで私は、その先生になぜこういう研究やるんですかっていったら、植物を動物にできれば、空気中から窒素が直接に採れる。そうすると、トマトなりなんなり育てる時に、窒素肥料がいらなくなるわけです。私流にすこし大袈裟に言うと、ネズミの頭の上にトマトをならせようというようなことを考えてるわけですね。

だけどその先生は私が日本に帰ってくるのと前後して研究をやめちゃったらしい。ひとに聞いたら、やっぱりそういう研究っていうのは、原爆と同じみたいなことらしいですね。極端なこと言うと、その研究を進めれば、複製人間だってなんだってできるわけです。科学者が、自分の研究テーマをただ好きだからという理由でどんどん深めてゆく。それはそれでよいことなのでしょうが、資本や組織は黙ってはいない。それが組織なり資本なりに取り込まれちゃうと、たいへんなことになる。自分にとっては、生命と等しいぐらい大切な研究テーマだけれど、もうこれ以上研究を進めると個人的な領域をこえてしまう。そう考えてやめてしまったらしい。

司馬　なるほどねえ。

井上　それは私の、オーストラリアでの収穫の中の一つでしたね。自分の研究テーマに対して客観的で冷静な見通しをきちっとつけている。そういう態度に感銘を受けました。

司馬　それはキャンベラ大学の先生なんですか。

井上　ええ。

司馬　研究をおやめになったんですか。それとも大学もおやめになってしまったんですか。

井上　研究をさっぱりとやめちゃったわけです。大学には一介の遺伝学の先生として残る、とおっしゃっているそうです。

司馬　面白いですねえ。

井上　そこへいくと私なぞ全く覚悟ができていないな、と痛感しました。外国にいて日本のほうを向いてキョロキョロしている。里を恋しがっている見習山伏といったところでした。初心者の山伏……。

司馬　ハハハハ、山伏になった……。

井上　もっというと山から逃げ出した野伏ですね。

司馬　行場に行ってるみたいなものですね。

井上好子　それで帰ってきた時、ゆったり見えたっていいますか……。（笑）

厳しすぎる日本人の生活

司馬　それ、いい話ですよ、奥さんが聞かせてくださったんですけどね。帰ってきた当座は、八か月ぐらいでしたか、井上さんは非常に大人物になったという感じだったんですって。

井上好子　ほんとに。

司馬　ちょっとしたことでも怒らないし、ゆったりしておられてね。もっとも、奥さんの説には、

私は賛成しがたいんですがね。あれはぼけていたんだという結論ね。(笑)いまとなれば、すっかり元の、怒りっぽい井上さんに戻ってらっしゃるというのは、どうでしょう。

井上　向こうでお目にかかった時、申し上げたかもしれませんけど、三年いりゃ三年かかるっていうんですね、ボケが直るまで。一日いれば一日の回復期間が要るらしいのです。やっぱりその理論は当てはまるんですね。

それからもう一つは、日本人の生活はいろんな点で厳しすぎる。狭いが、すばらしい国ですけど、あまり何にもなさすぎる。それでみんな一生懸命働いて頑張っている。ところが、製品の売り方が下手で、おまけに交際下手、いつもシッポを出し、そのシッポを踏んづけられて、ヒイヒイ言ってる。とってもかわいそうだなって気がして帰ってきたわけです。羽田降りると、ちょうど七月の中旬でしたか、肌にジワーッとくるわけですね、湿気が。空は汚いし、こういうところで、みんな一生懸命生きているんだという、非常にセンチメンタルな気持ちになってきたわけですね。

それで、こういうところで、いろいろゴタゴタ言ってもしようがない。ここはおれの生きる場所だっていう、なんかそんな覚悟を空港でしたわけです。その効き目がある間は何でもそれはしようがない、という感じになってたんですね。ところがだんだんそれを忘れて、いま、なんかあるとワアーッと怒り出す。

司馬　なんといいますか、人間が一千町歩に一人というような過疎の大陸にいますとね、きっと

大きくなるんじゃないかということでしょうね。

中国なんかでも、あるじゃないですか。中国侵略時代の兵隊さんが、行軍していましてね。向こうのほうに、点みたいなのがあるなと思って、一時間ほどかかってそこに行ったら、人間だったとかね。それがじいっと空を見てた。そういうの、あるでしょう。

井上　ありますねえ。

司馬　辺縁性の強い韓国でさえあるのかなあ。道端で、じいっと一日中、道行く人を見ている。あれ、われわれの国にはあまりないですね。

井上　ないですね。ただ私らがオーストラリアに行くと、ああなっちゃいますね。キャンベラの商店街の真ん中に野外のカフェがある。こっちは暇だから、朝から夜の十時ごろまで、そこに座って人通りを眺め、本を読み、また往来を眺めている。そして、オーストラリア人はどうしてこんなにあくせく動きまわっているのだろうなどと考えていました。

司馬　アハハハ……オーストラリアの人からみれば、相当の人物が来たと思うんじゃないでしょうか。

井上　いや、そうでもないでしょう。なに言っても通じない人って、思っていたんじゃないでしょうかね。(笑)

司馬　それでもって、向こうの人とけんかもしなきゃならない。大変ですね。(笑)

井上　いや、言葉が喋れないからけんかになりません。向こうのDPE屋さんは仕事が遅くて仕

上げがそうきれいではないので、ときどき、けんか口調になりますが、こっちは言葉を探してから喋るので、あの人は考え深い人だ、なんてほめられたことがあります。

司馬　ひとりぼっちで向こうで過ごされていたとき、住民調査みたいな人が来て、あなたナニ人かというのを、調査票に書き込めと言われたのに、井上さんはえらく腹を立てたそうですね、それで書き込まずにおいて、回収に来た人がナニ人かって質問したら、北方蒙古人とアイヌ人の混血だっていった。(笑)あれ、おかしかったなあ。

井上　去年の七月一日が四年に一度の国勢調査日だったんです。そのとき調査票を見ると「あなたの人種は?」という欄があった。たしか、①アングロサクソン ②ラテン ③スラブ ④その他……となっていて該当するところへ○印をつけてください、と印刷してあった。この調査票を見たときは腹が立ちましたね。

司馬　ハッハッハ……おれは何ものかっていうことを、改めて考えたんですね。

井上　ひどいんです。黄色人種や黒色人種はすべて「その他」ですから。

司馬　「その他」ですか。オーストラリアには、人種というか民族というか、それは二十ほどしかないんだとおっしゃっていましたね。

井上　そうです。私がいちばん腹立てたのは、「アボリジナル」っていう項目がないことなんです。オーストラリアには最初、アボリジナルという原住民がいた。その原住民のいるところへアングロサクソンが割り込んできたのですから、礼儀としても「アボリジナル」という項目はあっ

てしかるべきだと思うのです。それに、いまでも何万というアボリジナルが生きているのですから。オーストラリアの白豪主義の正体を見た、という気がしました。

そこで調査に来た人に一生懸命に文句を言うんですけど、向こうは、わからないんですね。(笑)どこに書くかわからないから、私がなんか言ってるんだろうと思うわけです。だから、「あなたは『その他』のところへ印をつけなさい」と教えるんですね。ついに私が怒り出したので、びっくりしてました。(笑)

司馬　しかし、日本人と言わずに、とっさに北方蒙古人とは……。なぜ北方蒙古人なんですかね。おまけにアイヌ人の混血だっていったら、向こうは腰抜かさんばかりにして、のけぞったでしょうね。(笑)それは、井上さんが日本列島の東北部に生まれたから、そういうふうに考えたわけですか。

井上　そうですね。やはり、北を大事にしたわけで。(笑)

司馬　なるほどねえ。ルーツの話じゃないけど、オーストラリアにまで来ても、井上さんは日本人としてよりも、東北人として存在しているというのは、なかなかけなげで。

井上好子　そういわれれば、ほんと……。(笑)

司馬　そうでしょう。私など大阪ですから、中学卒業するまで、東北出身の人を見たのは、ただ一人しかいないんです。幾何の先生がそうだったんです。たいへんな尊敬でしたよ。関西というところは、複雑な形で東京に対するコンプレックスがあります。東京は、われわれよりも一段も

二段も上の町なんだ、とは思うのですが、しかし東北と東京は棒組みになっていまして。

井上　はア、そうでしょうか。

司馬　ひとつところのように見える。すくなくともイメージとして、東京を作っているのは東北人というふうに中学の時は、みんなそう思っていましたよ。だから、この中学には、東京出身の先生は一人もいないけれども、秋田県出身の先生はいらっしゃるから同じだということなんです。東北への憧れっていうのは、ずうっといまでも、ありますけどね。

井上　東北人と一般化しちゃうと、私の言ってることは、実情と合わないところが出てくると思うんですけど、私と、それから私と同じ世代の東北の子供っていうのは、やっぱり東京というのは、長州と薩摩っていう感じですね。

司馬　ははあ、初めて聞く話です。(笑)

井上　ええ。『少年倶楽部』をひろげると、とにかく大将っていうのは、全部西日本にグアーッといて、それで東北では、わりと岩手県に多いんですね。米内光政とかなんとか中将とか、それが全部、海軍なんですね。

司馬　そうなんですねえ。斎藤実とかね、一時期、内閣の四、五人が盛岡中学出身で占めたこともありました。

井上　そう、そう。原敬とか、盛中ですね。だから陸軍に間に合わなかったんだろうという気がする。(笑)それで山形県になりますと、こんどは空軍が多いんですね。そうすると、なんか日本

の兵制の進み具合に間に合ったところへ、遅ればせに東北人が入っていくという感じがある。どうしても軍隊っていうと陸軍であると思い込んでいましたが、その陸軍というのは、どうも長州だという、向こうに対してコンプレックスがありましたね。長州人が東京を作ったんだ、という……。

司馬　なるほど、遠景として見たうえでは正確な観察かもしれません。

おだてられる東北人

井上　だから、いまだもって萩なんか行くと、失礼なことを仕出かしてしまいます。「これ百五十年前の昔です」なんていわれると、わざわざ下駄で踏んづけて帰ってきたりする。(笑)山口県に対しては、同じ山の字がつく山形でも、かなり反感を持っていますね。

それから兵隊さんというと、東北がいいとかいわれて、こんどは戦後、高度成長期になってくると、工員は東北人にかぎる、とおだてられる。そりゃ、ほかも全部そうなんですけれど、とりわけ被害意識が多くて、いつも東北は中央にしゃぶりつくされておるという感じがするわけです。

司馬　私は、弘前の旧制高校を受けに行ったことがあります。数学がゼロで遠くへ行けば、自分よりボンクラがいるかもしれないという錯覚があって。しかし日本には、すみずみにまで秀才がいましてね。(笑)いくら遠くから行ったって、そりゃだめなんですね。(笑)

井上好子　そりゃそうですよ。（笑）

司馬　それは別として私は、時々ひとにも言って、感激を幾度も新たにするんですけど、白河の関を越えたのは三十二、三歳の時なんですよ。受験の時は、日本海回りで行ったんで越えてないんです。で、その時に、どのように表していいのかなあ。非常に大げさな比較が頭に湧いてきましてね。東北の健児が大阪に来たのは、北畠顕家に連れられて、それはだまされてですけど、足利尊氏と戦うためにですよね。いわゆる阿倍野の戦いで、はるばると来て、敗けて三人だけ帰ったというのがありましたね。それと思い合わせて、へんに感動したことがあるんです。

ただ、その時、ひと言多かったことがありましてね。

富沢有為男さんを訪ねていったわけです。福島の、太平洋岸のほうにいらっしゃいましてね。それで、自分にとって東北は、アメリカより遠い感じがした、って言ったら、「あの野郎、ひどいこと言やがった」（笑）私には複雑な気持ちがあるのに、それだけで要約しちゃったものですから。

井上　私もやっぱり高校卒えて上京したとき、駅のアナウンスで「白河アー」っての聞いて身のひきしまる思いがしました。

夜中で何も見えませんでしたけど、やっぱり窓から首出して、おれは白河以北一山百文の地から、白河以南一個百両の地へいま出て行くのだぞという、すごい感動がありましたね。

司馬　ありましたか。これはね、私よりも、二十歳くらい年上の人なんですけど、弘前高校出て

京都大学にいくために南下してきた人が、仙台に来た時に、竹やぶをみて、ああ南方に来た。(笑)竹は南方植物ですから。

この人は、おばあさんひとりで育てられて、師範学校を出て教師を何年間かやり、これで大学まで大丈夫というまで、お金を貯めて弘前高校へ入ったんです。それで寮の委員長なんかしたんですが、太宰治やほかの人に、その金をどんどん貸したりして、結局、高等学校の段階でなくなってしまったんです。

で、京大の中国文学科に入ったすぐその日に、鈴木豹軒さんの研究室に行って、これこれの事情で金がなくなったから、なんとかならないでしょうか……。豹軒先生は感じ入ってしまう。上方における奥州人のトクなところです。それで伏見の造り酒屋で家庭教師を求めているところがあるから、きみ、住み込みで見てやってくれとなったんです。で、教えてる子が学校に入ったからお払い箱になるところだったんですが、彼があんまり一生懸命やったんで、造り酒屋さんが、その子が卒業するまでおってくれ。卒業したら娘をもらってくれ。さらには造り酒屋が集まって、大阪に女学校一つ建てたんで校長になってくれ。初めから校長なんです。(笑)人徳ひとつで一生を送ったような。(笑)

井上　それはいいお話ですね。

司馬　東京の友人にいわせると、あなたは、いつも東北の人っていうと、みんな人が好いと思っているけど、そんなものじゃないんだ……まあ、そんなことは、私もおとなですからわかってい

る。煮ても焼いても食えない東北も、また遠景としていい。(笑)

この話の主人公は、鹿内賢三さんという人ですが、先年亡くなりました。太宰治のほかに、石上玄一郎さんとも弘前で一緒だった人で、石上さんと鹿内さん、ときどき会合するときに私も仲間に——二十年前のことですけれど——入れてくれた、疑似東北人として……。

井上　もどきですね。

司馬　津軽もどき。(笑)

保険会社みたいな大地主

井上　東北が「暗い」とよく言われますね。私は、それに反対なんです。初めて白河を過ぎ、夜明け方汽車で関東平野をずうっと上って行った時の印象のほうが、かえって暗い感じがしました。むろん、その時の天候のせいもありますけれども。昔話や民話にしても、からっと仕上がった、機知に富んだものが多いような気がします。

司馬　私は岩手県に最初に行った時、ひどく明るい感じを持ちました。あそこは大雑把に言えば、高原でしょう。

井上　大部分が山と高原ですね。

司馬　空が近くて大きくて、ちょうど真夏でしたから、入道雲が出ていまして……。

井上　宮沢賢治の童話に、いまおっしゃったような透明な感覚の風景がよく出てきます。

司馬　しかし、東北の「暗さ」と言われる一つは、大正時代の小作争議とかいうような問題があるからだと思うんです。

つまり、西日本には東北のような大地主がいませんでしょう、山林持ちは別として。西日本というのは、米原から九州まで、まあ沖縄も入れてもいいです。だいたい土地が非常に細分化し集約化されていて、それが近畿地方の特徴だと思います。それは瀬戸内海沿岸全部に通用するんで、十五、六町歩もあればいい地主だと思います。造り酒屋なんかで、時として例外はありますが。しかし、岐阜に行くと、もう万葉のころのアヅマですから、農地解放までは大地主がたくさんいた。

井上　ええ。アヅマは野蛮人の住むところ。

司馬　私の知人で岐阜県の人がいますが、六百町歩なんです。そんなこと私に身近な、例えば奈良県、大阪府では考えられない。五町歩もあれば、じゅうぶん子供たちを東京の大学に出せるだけの経済力があったように思う。

ですから、ある事情でなったというか、職業としての小作はいても、階級づけられた小作というのは、きわめて少なかった。自分で作った物を都市に運んで行けば、その日に金になる。だから現金生活ができますでしょう。その点で、大地主の成立というのは、なかったわけです。

岐阜県というのは、木曽川の氾濫（はんらん）がありますね。それで大地主を生んだ。必要とした。流れた

田んぼは地主に売ってしまって、オレごと小作になるっていうので、六百町歩になる。その代わり大地主は、不作になった時は食わさなきゃならない。つまり、一種の保険会社みたいなもので……。

東北も似たようなものでしょう、飢饉がくるとか。

井上　二千町歩、年貢米四万俵の日本一の大地主がいましたからね。酒田の本間家のことです。江戸時代の本間家というのは、土地の買収法と農民の管理とがじつに巧みで百姓一揆がほとんどなかった。これは大地主＝保険会社という司馬説にぴたりとあてはまると思いますが。

司馬　それが結局、大正時代になって噴火したんだろうと思います。

井上　そうですね。

司馬　プロレタリア文学などで、われわれはよく聞かされたことですが、大地主というのが存在したから、陰惨な東北があったわけでしょう。戦後の農地解放で、いまは別の東北があるんです。

井上　それから東北人には、変な言い方になりますけど、とことんダメになっちゃうと、かえって明るいというところがあります、もう失うものはなにもないという感じの。そんな気がするんです。

司馬　それはすごい話ですね。

井上好子　主人の性格をみてると、そうですよ。徹底的にダメになっちゃった時に、突如として楽観的になっているみたい……。

井上　盛岡中学出の秀才で、ある中間小説誌の編集部にいる人がいるんです。彼は、締切り前はたいへんに楽観的なんです。私もそうで、二人ともにこにこしている。(笑)今回は五十枚でいきましょう、いや七十枚ぐらい書きますとか、二人で太平楽を並べている。ところが、ぼつぼつ他の原稿が集まってくるころになると、二人とも、ひどく悲観的になる。

どうにもならないデッドラインていうのは、中間小説誌の場合はその月の十日の朝なんです。ところが、たまたま、いろいろ重なって原稿が手につかず、十日過ぎたりなんかしますと、二人とも、すごく陽気になってくるんです。もう、どうにでもしてくれって。彼はうちに来て、会社にいなくなっちゃうし、ぼくも電話に出ないしっていうんで、編集部としては、ほとほと困ってるんですけど、二人はなんか意気揚々として、なんとかなりますなんてビールを飲んで将棋を指したりしている。(笑)そういうところはありますね、多少。

井上好子　大変にありますね。

井上　最後の最後になりますと、もう、ここから下はない、というふうになってくるんです。

司馬　最強の状態ですね。

井上好子　ものの考え方を絶望のほうに絶望のほうに持っていっちゃう。

井上　早く持っていって、そこから立ち直ろうという考え方があります。はいつくばって、上を見ようっていう……。

井上好子　それ、いつかあなたに聞いたことがありますけど、寒い寒いって言ってるうちに、知

らないうちに春が来るとか、変なこと、その時言ってました。（笑）

司馬　知らないうちに春は来ます、自分の努力とかかわりなく。（笑）

井上　だから、その春の来るまで待ちましょう。この辛さをやりすごせば、そのうち事情はよくなるだろう。私の体験では、東北出身の編集者っていうのは、最後は絶対に怒らないですね。（笑）敗者とともに自滅しちゃう。最後はこっち側に立っちゃうんです。

司馬　へーえ。

井上　そこへ行くと関西のほうの出身の人は厳しいですね。締切りが遅れるにつれて厳しい態度になる……。

司馬　その感じは、分からないでもないです。つまり関西というのは、室町時代でも圧倒的な貨幣経済でしょう。貨幣経済だけが、合理主義を生むんです。

たとえば、商取引で、その品物は約束のものよりは悪いから、オレは買わない。規格に合わない、目方が足りないからと突き返す。三角だと思ったけど、これは四角じゃないかということで、取引をご破算にする。

合理主義というのは、哲学者が生んだものではなくて、貨幣経済が密度高く行われることによって生まれたんで、それはヨーロッパでも中国でもそうです。

井上　民主主義と同じですね。

司馬　多少そうかもしれません。日本では辛うじて、京都で室町時代から貨幣経済が稠密（ちゅうみつ）に行わ

れたと思うんです。その京都の余波を受けたのは、大阪ぐらいのものです。それ以外は、厳密には明治以後だと思うんです。それまでは米穀経済ですから、物々交換ですね。

こんなこと言うと東京の人たちが怒って、江戸は日本の首都で三百年の伝統があって、ちゃんと金本位制だった、と言うでしょうが。関西は銀本位ですからね。それはそれで、江戸とその周辺の機業地を除く多くの関東では、貨幣経済は比較的薄くおこなわれたと思います。それの極端になかったのが東北で、十日という契約日がなんであるか、その重大さが分かりにくい。(笑)お前の命よりも大事な日なんだ。お前はたとえ死のうとも十日は回らなきゃいけないというのが、貨幣経済が生んだ合理主義でしょう。合理主義っていうのは命を顧みません。お前が死のうと生きようと、十日は十日だというところがあるでしょう。それが、東北だと分かりにくくなってしまう。(笑)

井上　それは確かにありますね。できた作品が勝負だとかいろいろ二人でなんか言ってるうちに、まあ、やがて好転はするんですけど。(笑)

司馬　その場合の好転というのは、いいことばですね。

福島と宮城は東北じゃない？

井上　私が関西に初めて来たのは、司馬さんが東北へ行かれたと同じように、三十歳過ぎてから

でした。当時テレビの仕事をしておりまして、大阪に所用があったんです。さっき、関東平野が暗いと申しましたけど、こんどは大阪に近づくにつれ、どんどん明るくなっていくんですね。それでさらに西へ、瀬戸内海とかあっちへ行くと、それはもう明るい。萩に行った時は、快晴だったせいもありましたけど。それと、主観的なものですね。日本の近代をつくった、東北からすれば、ヤツらって感じ（笑）がするんですけど、そのヤツらのいるところは、やっぱり明るいという感じがしました。

司馬　井上さんは、萩がお好きなんでしょう。

井上　好きっていうか、そう簡単に言えないものがありまして。九割は反感。一割は、山形と同じ日本海側という仲間意識……。

司馬　「白河以北一山百文」——あれは〝官軍〟のなかでも長州人が言ったことなんですね。官軍として長州人が東北へ攻め込みますでしょう。彼らからすれば、東北っていうのは、外国だと思ってたんじゃないでしょうか。

それともうひとつは、長州人は新撰組にやられてたでしょう。それが長州人には、東北のヤツにやられている感じなんです。

京都に黒谷（くろだに）という浄土宗一派の本山がありますね。いまでも、そのままの姿で残っています。石垣があって、門が一つでその門以外からは入れない。だから、お城と同じなんです。浄土宗は徳川家のお宗旨ですから、京都で一旦緩急あったら、所司代の兵士は知恩院か黒谷に籠って、取

りあえずは防ぐということが、意図的にあったんでしょうね。知恩院も城郭造りです。それで幕末に会津藩が黒谷を本陣として、京都の警視総監をやった。しかし、荒仕事というのは、筋目の紳士たちである会津藩士にはいやなんです。そういうものは請負でやらせろという、今日のテレビ会社みたいなところあるんです。ですから、社員はやらなくて（笑）……。

井上　下請けに出す。（笑）

司馬　その請負が、新撰組です。だけど、長州人にとっては、会津人に仲間を殺されたとなるわけです。

井上　なるほど。

司馬　新撰組は、事あれば必ず、会津中将様御支配の新撰組だ、というような、まあ、自分の結社を国家学的に系譜づけで威を持たせるわけです。浪人じゃないんだぞと。彼らはなんといっても三多摩の人達ですからね。いまから思えば、考えられないほどの無知な人達でしょう。それが京都を支配する場合に、なにか背景が必要だということがあって、会津中将を持ち出す。ですから、会津中将は一人も人を殺したことはないのに、長州人にしたら、会津中将が返り血浴びているような存在になるわけです。それで「一山百文」。作用と反作用みたいなとこがあるんですね。

井上　ありますね。しかし山形県出身者としての私の感覚で言うと、会津は東北じゃないんです。

司馬　ははあ、えらいことになってきたな。

井上　福島県と宮城県というのは東北じゃないんです。私の感覚では、奥羽山脈とつながりの少ないところは準東北で、山形、秋田、岩手、青森って感じなんです、東北は。

ですから、白河を越えると関東だという行政論は別にして、東北の中で本家争いすると（笑）福島県はそうではない。岩手県もあぶないものだ。（笑）ズーズー弁というのは、東北ではなく福島弁なんです。若水ヤエ子とか、伴淳さんとか、伴淳さんは米沢の出ですけれども、意識して福島弁を使っているわけです。だからズーズー弁というのは私らから言わせると、自分の在所言葉について悪口言われているとは感じない。

司馬　ははあ。

井上　それでいて、新潟県を東北に入れてしまうからすこしおかしいのですが、これはなぜか新潟県に東北電力が入っているからで。（笑）だから、田中角栄さんに対して、東北の人たちは割合、好意的ですね。（笑）というわけで、東北内部でもいろいろと本家争いがあるわけなんです。（笑）

司馬　私らの年代は、国定教科書の「ハナ・ハト・マメ」の最後なんだそうです。次ぐらいから「サイタサイタ」になるんです。「ハナ・ハト・マメ」の時代の教科書は、修身のにも国語のにも挿し絵が付いてましたけど、色付きの「サイタサイタ」とちがって、白黒なんです。りっぱな絵ですよ、今から思えば。

その絵は、文部省と関係のある画家が描かれたらしいんですが、農村風景といえば、全部東北のものでした。村の一本杉ってのが、あったりしましてね。そんなもの、関西の村にはないんで

す、吉野に行かないと。つまり、杉が育つ条件というのは、山に行かないとないわけで、一本杉なんて平地にはないのにと思ったりしたんです。家の形も、わら屋根の形も東北なんです。初めて東北に行ったときに、ああ、おれの教科書（笑）のとおりという感じがしました。

井上　そうですか。やはり、日本国家は東北には農業という役割を与えたんですね。

司馬　それから農耕してるっていう絵なんかでも、馬を使っているんです。関西は牛で農耕するんです。東はウマ圏で、西はウシ圏――。牛が一度も教科書に出てこない。だから大変な差別ですよ。国定教科書のうえでは、西日本はないに等しい。（笑）

井上　私の時代の修身の教科書には、乃木希典（まれすけ）はお母さんから水をかけられたとか、いろいろ出てきます。

司馬　あっ、また長州が出てきた。（笑）

井上好子　枕元に生首置いて寝かしたとか……。

高い教養、低い経済意識

司馬　私は、錯覚かもしれませんけど、乃木希典を自分なりに正確に見たいと思って『殉死』を書いたんですけど、あんな観念的な人はめずらしくて、長州人というのは打算が一つの特徴でしょう。それは北前船の基地が下関でしたから。いま綿を出せば上方ではいくらで、出羽ではいく

らで、津軽ではいくらでと常に計算する。そういう下関の土意識が、ずっと全長州に広まる。

私は新撰組のことを書こうと思った時に、なるべく手前みそでやりたいと思って、一生懸命調べたんですけど、しかし子母沢寛さんの『新選組始末記』を重要参考書にする以外に出てこないんです。子母沢さんが『始末記』をお書きになる時は、稗田という隊士の生き残りもいたんです。子母沢さんは、そのころ新撰組の戦場だった京都に、読売新聞の記者の合間でやられてたもんですから、土曜日の夜汽車で来て、日曜日の夜汽車で帰られるんです。その時代で調べられたから、とても超えられないんです。

その子母沢さんに、『新選組始末記』を参考にしますとことわりに行ったんです。鵠沼の子母沢さんの家は、質素なわりにひどく明るい、いいおうちでしたね。冠木門なんかありまして、表札に本名の梅谷松太郎と出ていました。

それで子母沢さんといろんなお話しているうちに、あの方は大変な長州ぎらい。(笑)なんといっても彰義隊の生き残りのおじいさまに育てられた方でしょう。「いったい長州ってなんでしょう。あれ商売人ですかね」って。(笑)私は西日本に住んでいますから、この場合は、会津人でも岩手県を弁護するようなもので(笑)長州人を弁護したんです。

あそこは商品経済の交域にあったところだから、そして長州藩は現金収入があったんだから、どうしてもそういう感覚になる。江戸の旗本以下は、あまりにも貨幣経済と関係がなかった。米穀経済だけだったから、ダメだったんだと。子母沢さんは、聞いてなかったです。早くその話、

終わってという顔でした。幕臣イデオロギーというのは、非常に高度の教養と、それから非常に低い経済意識のもとに成立したものでしょう。

井上　そうですね。

司馬　東北だって似たようなものです。当時の日本の教養水準からいえば、会津だって米沢だって、仙台だって盛岡だって、各藩の人たちは、ものすごい教養です。そのくせに実地が分からない。お米がいくらしてるとかが。

つまり百姓から収奪することは知ってるけど、そして百姓のほうはなんとか収奪されまいという知恵はあるけれど、新しく起こってきた田沼経済、田沼意次（おきつぐ）の貨幣経済というのは分からずじまいだったでしょう。その違いがいまの地方差の問題ではないでしょうか。

井上　白河藩がですね、これ釈迦に説法じみるところありますけども、同時にそれで伺いたいところもあるんですけども、松平定信になって、財政の立て直しに、木を植えろとか、織物をやらせるとか、ガラスを藩士にやらせるとか、いろんなことをやるついでに、農村に女性を輸入しました。あんまり農村がひどいんでお嫁さんの来手が、いまと同じようにないんですね。

それで定信が、これはとにかく、ほかから女性を輸入してこなきゃいけないと、さんざん考えて、東北のほうだったら、白河のほうがまだしもましだから嫁の来手があるはずだと、伊達（だて）藩とかですね、そっちから女の人をよんで、それで地元の百姓と結婚させようというふうに、最初思うんですけども、どうも踏み切れない。いっそ房州あたりの漁師の娘がいいんじゃないか。それ

も乗り切れない。

結局、越後から呼ぶんです。山の中の村や凶作の村から何百人か呼んできて、自分のとこの百姓と結婚させ、金を三両ぐらいずつ貸して、所帯を持たせるわけです。松平定信っていう人には、なにか中央の感覚があるんですね。なぜ仙台とか米沢藩とかあっちから呼ばないで越後にしたか、あるいはなぜ南からにしなかったのか。非常に正解という感じと同時に、なぜそのころから、そういう感覚があったのかっていうのが、不思議なんです。

司馬　なるほどね。

井上　出稼ぎが越後が多いからっていうせいもあるでしょうけど、その目の付けどころというのが、今とちょっと似てるような気がするんです。私は、その越後というところが、なにかまだ田中角栄さんのこととか、いろいろひっかかって、とても面白いと思うんです。

司馬　それは一つの、また違う大きな文化圏ではないでしょうか。東北でも西日本でもなくて、越後というもんでしょう。

井上　はあ。

中国の農民は日本人ほど働いたか

司馬　私は小作問題を知りたくて、越後に行ったことあるんです。大正末の、ちょうど私が生ま

れたころ、越後の木佐木村というところで、百科事典にでも載ってそうな大事件がありました。その争議の副委員長クラスの人が、八十いくつかで生き残っていらっしゃるんで行ったんです。で、小作争議の話聞いたり、小作とはなんぞという話聞いたりしたんですけど、それは物に書こうとかいうんじゃなくて、近代日本が分かりにくいんで行ったんです。

その時もう一つ分かったことは、越後の北とか南とかいろいろある蒲原郡というのは、全部水の中なんですね。本来海なんです。せき止められているから真水になっていますが。だから田植えなんかでも、ノドまで一日中つかってやる。田植えの季節というのは、ちょっと肌寒いでしょう。こごえちゃいますから、一時間もやるとあぜにはい上がって、手あぶり火鉢で、手だけをあぶっては、またノドまで水につかって田植えする。

泥もどこからかもらってきて客土するんですけどね。稲なんていうのは、なんかヒョロヒョロッとした長いのができて、先っぽにそれこそ十ほど実がなる程度の農耕をやってたわけです。それを昭和三十年までやってた。その年に、アメリカ式土木機械が導入され、排水をして、そして乾いた土地に新しい土壌ができたわけです。中国に、農業は大寨に学べというスローガンがありますが、そんなもの北蒲原郡に学べ。中国は、北蒲原郡に見学にくるべきだと、思うくらいです。

中国のかつての農民は日本人のかつての農民ほど働いたかどうか。これはかつての中国農民をけなして言っているんじゃなくて、日本の弥生式時代の農民の苦労からみれば、歴史のちがいで、解放までの中国の農民はちょっと辛酸の度合いがちがったのではないかと思います。

とにかく東北よりひどいそんなところが、昭和三十年以降やっと乾いた土地になり、農地化した。むろん投下した資本は国家資本です。われわれの税金です。だけど、実際にオレの土地が乾いたという感激は、東京の納税者が味わったのでなく、越後人が味わったわけで、味わう権利もあった。ほどなく高度成長になってそれが工業化するでしょう。そして坪いくらになった。一町歩五円が坪五万円になるわけで、田中角栄が出るはずなんです。彼は、ほんとに歴史の所産だと思います。

井上　そうですね。それで新潟県にも東北電力が入っているというので、五分の嫉妬心と五分の仲間意識を持つようになる。（笑）

井上好子　この間、奈良に行ったんですけど、あのへんの農家は大和造りなんかでとても裕福って感じがしました。確か、県民所得では、日本でも低いほうという統計がありますけど、東北の農家って、貧しいというイメージがありますよね。

司馬　裕福なことは確かだと思います。大和盆地の場合、さっき言ったように、一晩荷車で運べば大阪の中央市場に野菜を売れる。だから換金性のある作物を作ればいいということがあります。それに、ほとんどの理由は、江戸の三百年間ていうものは天領だったからでしょう。

天領、つまり幕府直轄領というのは、模範政治をやらなきゃいけない。徳川幕府というのはえらいですね。苛斂誅求（かれんちゅうきゅう）したことがない。徳川家というのは、別に国王ではない。大名の最大なるものでしょう。で、大名連合の盟主ですね。だから自分の直轄領でめしを食っているわけです。

他の大名領から取り立てて、幕府を経営しているわけじゃない。

井上　そうですね。

司馬　だから江戸幕府というのは、日本国政府という反面、財政的には徳川家の政所なんです。直轄領はどのくらいあったかというのは、よく分からない。非常に小さく見積もる人は二百何十万石と言い、大きく見積もる人は八百万石、普通は四百何万石と言います。

その四百何万石だとして、それは天領の税金だけ。四公六民というか、四割だけ税金を取る。紀州藩なんていうのは、八公二民までいった時あるんです。百姓は生きてるだけです。それに比べると天領は、楽したもんです。東京都外では三多摩は天領ですけど、これは近くだからです。他のところは、東北なんかほとんどなくて、取れ高のいいとこばっかり天領にしてある。それと室町以来の都市、京都、大坂、博多、堺、それから奈良、宇治山田、みんな天領でしょう。だから牛肉でいえば、ロースみたいなところばっかりです。ロースみたいなところのうえに税金が安いから、大和は個人個人が蓄財できたわけです。それであんないいおうちができた。徳川さまのおかげです。

井上好子　そうなんですか。

東北には薄情だった徳川さま

司馬　徳川さまのおかげを、東北は全く被らなかったということが、東北の悲惨さです。しかし考えてみると、江戸期に徳川さまのおかげを多く被った大坂や奈良県、九州の大分県あたりなどが、戊辰以後、徳川さまに薄情で、薄くしかおかげを被らなかった東北が親徳川として最後の抵抗をしたというのは、人情論としてみれば、いい感じですね。ともかくも、徳川さまもまた、白河以北は、やっぱり百文だと思ってあまり手を出さなかったところがあるわけ。

井上　そうですね。東北地方にはたしかに天領が極端に少ない。山形には三か所ぐらいでしょうか。それも諸藩預という形になっていますね。結局、定信は嫁は一段低いところからもらえっていうの実行したわけですね。

司馬　明治政府だって最初は、つまり東京帝国大学は一つしかなくて、それのための予備門が一つだけあって、だけどこれじゃいけないというんで、だんだん八つ高等学校をつくったでしょう。ところが大正に、第一次大戦で日本が成り金になって、民のかまどが潤ったから、最高学府に行く人も多いだろうと、地名の高等学校できましたね。

井上　東北は山形と弘前だけです。

司馬　その東北というのは、日本の五分の一よりも多い面積を占めている。新潟県一つで四国一つでしょう。それが、地名の高等学校を二つしかつくらなかったというのは、ひどいです。

井上　いろいろな専門学校みたいなのは、つくってますね。

司馬　秋田鉱専とかね。

井上　米沢工専、盛岡高農とか。

司馬　お前は働けといわんばかりです。（笑）

井上　実学ですね。

司馬　東北人は元来、テクノクラートや実学に向かなくて、第一義的なプランナーか、哲学者か、数学者とか、工学部じゃなくて理学部、経済学部じゃなくて文学部に合うんでしょう。秋田鉱専とか米沢高等工業なんかは西日本にまかせて、もっと旧制高校をつくっとけばよかったかもしれませんですね。

だけど私は盛岡に行きました時に、これは偉大なる県だと思ったんですよ。盛岡高農という技術学校から人生いかに生くべきかという宮沢賢治を出している。（笑）とにかく風土的に第一義のことを考えやすくできている感じですね。

瀬戸内海岸に生まれた私なんかは、画家でいえばカラーリストみたいなもので、造型の骨幹みたいなものよりも、カラーのほうによろめいちゃうとこがあります。

井上　山形県を例にとりますと、雪がごそっと降る。月山の東に十二メートルも降ったという記録があります。一方、夏は全国で一番暑いわけです。山形市には四十度という記録もある。両方とも日本新記録ですけど、そういう両極端を見てるっていう感じがあります。言ってみれば天国と地獄とか、右と左とか、雪と泥とかそういう振幅の大きさというのがあって、確かに非常に理想主義者みたいな人もいますし、一方にはたいへんな現実主義者もいるでしょうが、とにかくほ

どはよくないんです。

司馬　真ん中がないんですね。秋田鉱専とか、米沢高等工業は必要ないんですね。

井上　そうです。

司馬　東京大学へ行けばいいんですね。

井上　でなければ、哲学大学と尋常高等小学校とがセットになっていればよかった。(笑)

司馬　どちらか……。

井上　ですね。春と秋というのは、ものすごい短いわけです。中道は非常に少ないんです。あっという間に冬から梅雨になり、あっという間に夏から冬になる。だから、わりと共産党の代議士が多かったり、社会党の議員がいたりする。一方では、絶対自民党が強かったり、間がなかなかいないんです。だから今度の選挙で、いわゆる中道派に対してどれだけ票が入るかっていうのは、おそらく疑問がありますね。どっちかについてしまいます。

最後は笑いとばす東北人

司馬　政治はある程度酩酊ですから、アルコール度の強い政党のほうに行くんでしょう、わが東北人たちは酒に強いんですから。(笑)

井上さんの文学から東北本来の明るさをさぐり出そうとするのは、間違いでしょうか。ふつ

う、東北とか出羽とかは、色彩でいえば寒色のようなイメージとして普通いわれていますけど、井上さんのは、どうも暖色で……。

井上　女色に絶望して暖色（男色）に身を寄せております。（笑）

司馬　それはいかにも井上さんだ。（笑）それと井上さんは戯作者とご自分のことをいうでしょう。上方の人間は、私らの世代からもう日常語でなくなりましたけど「あいつはゲサクなやつや」て言うんです、変人奇人に対して。

戯作の精神というのは暖色でしょうね。そしてサロンを愉しむ精神でね。ひょっとしたら、これはほんとうの東北の精神と重なるのでしょうか。

井上　最後はなにもかも笑い飛ばしてしまわないと、救われないというところは多少あるような気がしますね。真面目なうちはまだ余裕がある。太宰治にしろ、宮沢賢治にしろ、そんな印象を受けますが……。

オーストラリアでびっくりしたのは、宮沢賢治のものすごいファンがいるわけです。日本で良いと言われてる人の作品をいろいろ読むんだけども、ほんとに一〇〇パーセントわかったような気がするのは、宮沢賢治だという声が多いんです。司馬さんもご存じのキャンベラ大学のパルバースさんが、宮沢賢治の研究家で、彼の日本語学科の学生がその影響を受けたということもありますが。

司馬　そうですか。

井上　川端さん……名前出しちゃいけないですけど、英語に翻訳されてるもの読んで、どうして日本人は文学を真面目にとりすぎるんだろうというんですね。安部公房、大江健三郎、そして宮沢賢治、この三人がオーストラリア国立大学の学生に人気のある日本文学者のビッグ・スリーでした。

で、そのパルバースさんが司馬さんの作品を読んで、びっくりしてました。司馬さんの作品にはとても明るいところがありますね。今日は疲れて死にそうだ。でも司馬遼太郎の作品を読んだら、すこし元気が出てきた。ひとつ明日もがんばって生きていこうか。そういうところが、宮沢賢治にも少し色合いが違いますけどあるんですね。

司馬　だんだんわかってきました。

井上　とくに「銀河鉄道の夜」などは、向こうの人にも非常によくわかるんです。糸の切れた凧(たこ)みたいに、宇宙のどこかへ飛んで行く。地上の人たちも、なんとかうまく生きて行くだろうし、こっちも、どこか宇宙の別なところで、なんとか生きていってみよう。日常からフッと離脱して別世界を目指すことが東北の人にはできるような気がするんです。

司馬　つまり東北人には、江戸体制で、藩でがんじがらめになっているけれども、おれは古代以来の住民だというところがあるでしょう。南部氏なども、室町初頭はいまの山梨県にいた。海賊のようにやってきて、いまの岩手県と青森県の一部を支配してしまう。やがて江戸期の藩になる。そういうことで、税金を取るけれども、本来おれたちは住民なんだという、ヨーロッパ人みたい

なところがありますね。ヨーロッパ人が住民で暮らしてたら、王がやってきて、税金を取る。そこでいろんな折衝があって、まア取ってもいい、そのかわり王様、あんたは遠慮するところは遠慮しろよというところがあるでしょう。それを東北人は、言わなかっただけでね。

井上　土地に縛りつけられているだけに、縛りつけられている分だけ魂を天外へ発射する力がある。宮沢賢治にしても、岩手県を「イーハトーヴ」なんて言いかえるわけですから。彼が東京の人だったら、おそらくイギリスに行っちゃったと思うんです。

司馬　そして住民だけが、世界性がある。国家が出てきたり、それ以前の藩が出てきたりしても、それはそれなりのものという認識の仕方なんです。

井上　それはある種の約束事みたいなものにすぎない……。

司馬　そうです。

井上　自分の代じゃ駄目だけど、孫の代には、どうせ殿様どっかに行っちゃうだろうとか……。

司馬　つまり、そういう世界性がありますね。

井上　東北人を賞めすぎるっていう感じがしないでもないですけど、ひどい暮らしを強いられてきたということは、世界各地の「ひどい暮らしを強いられている」人たちと、容易に通底するところがあるかもしれませんね。

　ところで山形県は、果物はミカンが出来ないぐらいで、一番日本で果物が豊富な県なんです。いまごろ行くと、ものすごく明るくてきれいなんです。桜桃がぴかぴか光ってるし、ブドウはち

ょっと青くなりかけてますしね。しかし風光だけの明るさじゃなくて、いや、もうケセラセラだという、ひとつ向こうの壁を越えたところの、妙なしらけた明るさというのがあるような気がしますね。

司馬　しらけた明るさというのは、わかる感じがします。特に岩手県で感じますね。津軽は鬱蒼たる樹木があって、もののなりが、よさそうですが……。

井上　話が前に戻りますけども、司馬さんのその直感は正しいと思います。いま流行っているコマーシャルに「かあちゃん、英語、どこで習ったの」「イワテケン」というのがありますが、これが「ヤマガタケン」や「アキタケン」や「アオモリケン」では受けたかどうか。たまたま千昌夫という人が岩手県の人なんで、岩手県て言っちゃったんだろうと思うんですけど。

たとえば中尊寺とか、遠野物語とか、小岩井牧場とか、岩手県というところは非常に開かれているんですね。

司馬　そういえば、岩手県というのは、小岩井牧場があるだけでキャラクターの一面が出ますね。つまりああいう理想主義というか、いきなり建国の理想が残っていたころのアメリカとくっつくような……。

井上　そうです。

米内光政はモダンな人

司馬　原敬がそうですね。暗殺されたとき、いまの若い人でも、あれだけの縞は着こなせないようなワイシャツを着ていました。それが、血染めになっている。だけど政治家でいえば、米内光政のモダニズムというのは、原敬でもかなわない。あんなハイカラな人というのは空前絶後です。

井上　そのハイカラな色合いというのは、やっぱり岩手県の産物だと思いますね。

司馬　私は、軍隊に二年間いましたので、兵隊の大臣とか、兵隊の大将とかというのは、大したことないと、軍人を過小評価するところがあります。しかし、米内光政だけは、会ったことはありませんけど、ちょっと違うなという感じがあるんです。ということを今日出海さんに言ったら、一言で「おめえ、あいつもズーズー弁だぜ」(笑)それで「米内の家に、米内の息子が同行でね、おれは行ったことがあるんだよ。そうしたらおやじが出て来やがってね、りっぱな顔していやがんだけど、しゃべり出したらズーズー弁だったよ」と……。(笑)むろんこれは、津軽人をご両親にもった今日出海氏のユーモアです。

井上　海軍大将の井上成美さんというのは、東北じゃないでしょうか。

司馬　あれは東京じゃなかったですか、いや、よく知らない。

井上　そうですか。あの人はとてもいいですね。

司馬　しかし、なぜあんな矮小な日本人から離れてしまっている人が、権力社会のなかで生き続けられたのでしょうね。

井上　東北だともっとよかったんですがね。(笑)山形には石原莞爾がいます、世渡りが下手で……。(編集部注・対談のあとで調べてみると井上成美氏は宮城県仙台市の生まれ)

司馬　石原莞爾の「言行録」というのを読んだことあるんです。京都の師団長の時に、しゃべったというのが戦後に出版されたんですけど、こんなこと言っちゃっていいのかと思うようなことをしゃべっています。

陸大出の軍人というのは、世渡りそのもののところがありますが、頭からそういう場所をはずしてしまっているところが、おもしろいですね。

井上　清川八郎も山形ですけど、ちょっと似ていますね。

司馬　ああ、そういえば似ているなあ。清川八郎というのは、ほんとにかわいそうだっていう感じがします。文久年間かな、年表的に変な錯覚があるかもしれませんけど、要するに井伊直弼という、日本人にしてはちょっとめずらしい独裁者、だから日本に合わない人間が大老になった。そして、独裁政治をやったあとすぐ、当然のことながら殺される。そうしたら清川八郎が出てきて、九州を遊説して、要するに東山三十六峰という幕末のテロ騒ぎが始まるでしょう。

それまでは、長州人というのは、将軍様が怖くてしようがなくて、おべっかつかいのお大名だった。それがにわかに翻るのは、吉田松陰からです。その吉田松陰の弟子たちを勇気づけるのは、

清川八郎が九州遊説で新段階を作ってからなんです。ところが肝心のアジテーターの清川八郎は、京都で殺されるでしょう。これは悲惨だと思うんです、仲間がいなかったから。

つまり東北人というのは孤独ですよ。長州から出て来たやつ、土佐から出て来たやつとか、広島から出て来たやつは、だれか知り合いがあるわけです。で、仲間を組んじゃう。そうすると、お前今はそれ言っちゃだめだとか、だれかが言ってくれるでしょう。だから殺されない。清川八郎は、それがないから、いい気になってしゃべっちゃったんですね。彼は月形半平太の一モデルなんでしょう。

井上　そうですね。江戸の日本橋あたりで殺されるんですね。

司馬　似たような人物が、やっぱり出羽から出てくるんです、本間精一郎という……。

井上　ああ、急進派の勤王の志士……。

司馬　これは京都で殺される、土佐のやつに。彼も月形半平太のモデルだそうです。

井上好子　月さま雨がというのは……。

司馬　それは、本間精一郎のちょっとフィクションがあるらしいです。木屋町の三条をずっと下がって来ると、果物屋さんがありますね。そのあたりで彼は殺されるんですが、そのそばを通るたびに、東北人の悲しみというのが、私にわくんです。仲間がいない。それが、どれだけひどいことになるかということです。井上さんには幸いにして奥様がいらっしゃる（笑）から、いいですね。

井上　いやいや、仲間がいないことより、もっと女房のほうがおそろしいです。絶えずうしろからけさがけ。(笑)

東北での悪口はほめことば

司馬　長州の連中は、いかだを組むんです。一人だけエリートを作らない。薩摩は一人、西郷さんを作っちゃうようにピラミッドを形成する。つまりイモづるですけど。長州は長州で、おれもお前も友だちだという組織……。

私の、自分自身いろんなことで得た感覚でいうと、友人というのは長州から始まったんじゃないかと思うくらいなんです。江戸体制は上下関係だけで、仲間というのはない。長州の連中というのは、幕末ではっきり友情が成立しています。友人関係という横の、身分の違いにこだわらないものができている。これは明快です。それは同時にいかだになっちゃうんです。で、閥になるわけ。

薩摩は親方を一人作る。で、イモづるでいく、という。西郷さんが亡くなって、だれそれになる。その次はだれそれだという具合です。とうとうタネが尽きたときに、上原勇作という少年が明治初年に士官学校へ入ってきた。士官学校で一番、工兵科だったと思いますが、そうしたら、薩摩の軍人で偉い人が同県人の士官候補生たちを呼んで、お前たちは、上原を中心にしてイモづ

るでいけ。だから上原を大事にするんだぞ。そうすれば大佐までは、どんなボンクラでも大丈夫だというんです。

井上　東北人は、一人だから激しいところもあるんですね。たがいに同志の足を引っぱり合ったりして、ますます一人ぼっちになってしまう。

司馬　軍人社会のことを調べたときに分かったんですけど、斎藤実（まこと）という人がいます。出身は、南部藩、分県になってからは、宮城県。彼は朝鮮総督をやりましたが、他の総督よりは、人類的だったと思います。昭和期の悪しき時代の政治家の中では、ほんのわずかましということで評価していいと思うんです。その斎藤実は、書生なんかが訪れると、東北は一人でやれ、というんですね。

井上　なるほど……。

司馬　いつだったか、会津若松でお酒飲んでたんです。私以外は、全部東北の土地の人でしたけど、そうしたらそのうちの一人が、われわれの尊敬すべき作家について、悪口言い出した。私は会ったことはない人ですけれども、その人の作品は尊敬してましたから、聞くに聞きかねて、あなた違うんじゃないかと言ったんです。その悪口というのは、作品でやってたんじゃなくて、あの野郎め偉くなりやがったという類いなんです。しかも、その作家は、東北出身じゃないんですよ。その悪口言っている人と同じ学校の出身というだけなんです。私が、あなた悪口言うもんじゃないと言いましたら、キョトンとする。当人は悪口言ったつもりではないわけなんです。非常

な親愛のつもりで言ってたわけ。それが私らから見たら、悪口に聞こえる。

井上　それはありますね。悪口や罵詈雑言は、むしろほめことばなんです。

司馬　どうも東北人を見るときに、ちょっと一つ、フィルターをつけとかないと、見損うところがあるみたいな感じがしました。

井上　むしろある連帯を信じてるわけです。その連帯というのは、必ずしもいいことだけ言って繋がるというんじゃなくて、これだけあいつに対して悪口言えるということは、どれだけあいつを愛してるかというところがありますね。

井上好子　司馬さんが『翔ぶが如く』をお書きになったとき、西郷隆盛は東北人だと思って、お書きになったんですか。

司馬　ははア。そんなことありませんけど。(笑)似てますか。

井上好子　ええ。わたしはね、司馬さんのお話を聞いててそう思ったんです。西郷隆盛が最後に、日本はめちゃくちゃになればいいんだ、めちゃくちゃになったところからしか、新しい日本は生まれないんだっていう発想をしたと、お書きになってるでしょう。それは、東北人の発想みたいに思うんです。だから、司馬さんは東北人はとてもいいっておっしゃってたから、西郷隆盛に東北の人を重ねてお書きになったのではないかと思ったんです。

井上　私はキャンベラでかなり集中して司馬文学を読みましたが、それは司馬さんの史観なんだと思うんです。もうちょっと悪くならないと、本当のことは出てこない。中途半端じゃ駄目だと

いう史観、それがいつもある。敗戦日本の責任をだれがとったか。天皇はとったか。軍人がとったか。そういうところへ結びつけて読んじゃったんですけどね。だれ一人責任とらない。だからいま高度成長といいながら、どこか一つ、しっくりしないところが出てきている。

西郷さんは毛沢東と似ている？

司馬　いや、それは本当に西郷さんが、そう言ったものですから、戊辰戦争は一年です。あれじゃやっぱりよくない、十年ぐらい続いて、めちゃくちゃになって、灰になって、その中からよくなる。西郷さんには、それのみがあったらしい。そうしたら毛沢東と似てるんですけどね。

井上好子　そうですか。

司馬　ところが、いまはっと思ったのは、出羽の庄内の人が西郷の語録を書くんです、鹿児島まで行って。隠栖（いんせい）してる西郷のところへ、殿様の子が訪れ、殿様の系統の人も行き、西郷さんは出羽の庄内の人には喜んで話すんですね。それを速記するんですけど、西郷という人の語録が残ってるのは、それしかない。

井上　「西郷南洲遺訓」ですね。

司馬　だから西郷の思想というのを、その一端でも知ろうとするには、それ以外にないんです。いろんな変なこと書いてありますでしょう。例の「美田を残さず」もそうじゃないかな。だから、

ひょっとすると、西郷さんは、東北人とはうまが合ったのでしょうかね。

西郷さんは異民族みたいな顔してるでしょう、体つきも。何となく安倍貞任みたいな感じでね。（笑）

井上　で、体がまるいというのは、一つのシンボルって感じがしますね。いま盛んな道化論で、山口昌男さんや高橋康也さんがおっしゃっていますが、道化の条件として、大食らいと、まんまるさっていうのが必要だそうです。逆に言うと、犠牲の小羊、スケープゴートになる条件として、まるまる肥えてるという、そういうイメージが必要らしいんです。だからやっぱり西郷さんていうのは、一種の道化ですね。

司馬　西郷さんの巨大な道化性にくっついてきたんでしょう、薩摩の人は。

井上　なるほど、そうかもしれません。

司馬　ところで、東北にまた戻りますけど、大和盆地の中国式律令政権が、馬鹿の一つ覚えみたいに弥生式農耕を東北に押しつけようとして持っていったことは失敗だったと思うんです。つまり、熱帯植物である稲を北上川に植えて、さらにどんどん北上していった。これを奨めて歩いたのは、坂上田村麻呂なんです。

つまり奈良朝政権ていうのは、中国式の律令国家をとって、国家でありますぞと布れて回ったんですけれども、実際は弥生式農法奨め公団でしょう。それを坂上田村麻呂とか、四道将軍とか、伝説的な人物がどんどん行く。

焼き畑農業だとか、採集生活だとか、山の中に住んでて走り回ってるほうが暮らしやすいと思ってるやつに、どうか低い土地に来て、水の傍で水田やんなさいって奨めた。それに乗っかったやつを熟夷、そうじゃない山の中走り回ってるのを荒夷。しかし、東北人はやがて熟夷になっていく。だけど稲は熱帯植物だから、少し寒い風が夏に吹くと駄目になる。すぐ飢饉……。

何で牧畜をもっと盛んにして、寒地で食えるようにしなかったというと、やっぱり奈良朝の農業公団の悪です。日本全国どこでも、この稲という便利な食物で食えるんだという、稲作奨め公団が東北へ行ったから、東北人はだまされちゃった。稲は白河以南が適地だということはわかりきったことで、そういう稲作感覚のなかに頭までつかりながら、ふと東北のことを思うと、ひどく暗い印象にみえる。稲の不適地ですから。東北のツラサの出発は、そこからじゃないかと思うんです。

井上　そしていま、東北米作にそのつけがまわってきているという気がしますね。つまり日本人というのは、一つのものが自分にいいと思ったら、他人もそれをしないといやなんですね。人は人、おれはおれ、反対は反対、賛成は賛成と言えない。でもそういう厳しさが、そろそろわれわれには必要ですね。お上からくると、しようがないやって、ブツブツ言いながら稲植えていくとか、工場に行くとか、そういうのじゃなくて、本当の声を出したほうがいいんじゃないかって、思ってるんです。

司馬　軍隊というところは、付和雷同の世界なんです。仲間を組んでれば、あの困難な、つらい、

非人間的な条件のややこしいものが、全部頭上を通り抜けるみたいなところがあったんです。

私は学徒出陣ですけども、要するにいまの学生と変わらないのが軍隊という中に入って、仲間組んじゃってる。それが自動的に見習士官なんです。小隊長になるわけでしょう。そうしたら技能は何にもないんです。

兵隊から苦労してきた人のほうが、私は戦車隊でしたから、エンジンの端々までわかるんです。科学者なんです、彼らのほうが。こっち側は野蛮人なんです。ですから、下士官さん、兵隊さんよろしく頼むというとこがあるんです。おべっかしちゃうんです。もうちょっと心理的に言えば、仲間化させようとするんです。そういうとこで、私は自己嫌悪のかたまりだったわけです。

それで、兵隊から帰ってきたときに、さアおれはひとりになるぞっていう感じで、もう濡れないぞ、二度とあのいやな屈辱、そしておべっかの、お互いに弱点同士で、傷痕という立派なものじゃなくて、ちょっと寒い部分をお互いの皮膚で温めてる感じを、やめるぞということがあったわけです。

しかし、日本人は、本来やっぱり鍋釜一つ。(笑)だから、どうしようもない民族みたいなところがありますね。

井上　ほんとに鍋釜一つというのは至言ですね。鍋釜の中に、またいろいろ鍋釜があって、そのときのレベルでどれにしようかという……。宮城県、福島県は東北じゃないっていう鍋釜を使ったかとおもうと、いまは「日本」という大きな鍋釜になって……。(笑)

集団になると乱暴な日本人

司馬　いや、ほんとにね、たいしたことないでしょう。われわれはひどい目にあいましたとか、ひどい体験しましたというのは、全部嘘ですね。日本人が受けた体験ていうのは、よく聞いてみると、ちょっとした貧乏だったり、兵隊にとられニューギニアで飢えかけたり、その程度でしょう。

仲間がいるんです、ニューギニアで飢えても。ひとりでニューギニアに行って、キリスト教を宣教してるうちに現地人に食われちゃったということは、ないわけでしょう。そういう個人として全人類のある苦悩みたいな、しわ寄せみたいなものを受けて、死んだり生きたりしたということがないでしょう。

井上　そういえば、あまりありませんが……。

司馬　だから実に日本人ていうのは甘ちゃんのぼんぼんですね。いま、日本人は世界中に嫌われているところがありますが、どこかなめられてるとこがあるのは、いいとこですね。なめられないと、人間ダメですね。

井上　財界の代表団がイギリスなんかに行きましてね、日本はダンピングをしてけしからん、なんて言われると、シュンとなって頭抱えて帰ってくるでしょう。(笑)

司馬　ええ。

井上　あれが外国人だったら、絶対その場で反論しますね。たとえば西ドイツの陶器より安い値段で日本の陶器が出回ってるから、西ドイツのが駄目になったと言われる。その場合、そうじゃなくて、日本人がいかに一生懸命世界中のいい陶器のデザインを勉強し、コピーし、いろいろ考えて、いいデザインで、安くて、丈夫なものをつくったかということを堂々と主張すればいいのに、みんな頭抱えてしまう。そういうところはじつに子どもだなあ、とおもいます。

司馬　そうですね。いま一番面白い民族というのは、アメリカ人か日本人かもわかりませんね。私は火星人として思うんですけれど。（笑）

井上　ええ、日本人は面白いです。みんな不思議がっている。ひとりひとりは優(すぐ)しいが、集団になると乱暴きわまりない。日常の食器やなんかにデリケートな美的感覚を働かせるのに、公共物は醜悪である。あんなにものを売るのが上手(じょうず)なのに金の使い方がまるで下手(へた)。国内では売春が禁じられているのに、国外では女を買っても平気。教育程度は高いのに教養は低い……なにがなんだかよくわからん。こういう意見をずいぶん聞かされましたよ。

司馬　何しろ世界に目ざめたのは三十年前ですものね。紀元前から文明があるのに、日本だけが敗戦になって、初めて世界があるということを知ったわけでしょう。大変なもんですね。江戸体制の藩が崩壊して、閉鎖性が解けたと思ったら、明治以後は極端な島国にしたでしょう。要するに日本統治のイマジネーションていうのは、一つを薩摩藩にするだけですね。

あるいは、ちょっと長州藩入れて。そういう連中が太平洋戦争で負けてくれたおかげで、われわれは少しばかり世界に向いてきた。それは何も平和がきたっていうんじゃなくて、住民になれたという感じです。国民ていうのは多分にフィクションですね。そこから出発してきているのかなア、新しい日本人というのは……。

もっとも今日、住民性といっても、まだきわめて猥雑で、原始的な段階にありますけど。

（「週刊読売」昭和五十二年七月九日、十六日、二十三日号）

日本語の起源の秘密を追う

大野　晋
司馬遼太郎

日本語はまだ若い

司馬　先生は『日本語の起源』、『日本語をさかのぼる』と、岩波から二冊お出しになっていますね。それを読んで非常に感じ入った部分がいくつかあるんですけど、きょうはそれに触れながら、「日本語」という漠然としたテーマで、しかし、雑談風に……。（笑）

大野　日本語の起源は、日本人の起源につながるので、重大なことですね。では、まあ、雑談でいきましょう。

司馬　私はこの前（四十八年十月）の伊勢の正遷宮に行きましたが、偶然、ドナルド・キーンさんに出会ったんです。雑談してるうちに、キーンさんが、あの人は日本文学および日本語学に明るい人ですけれども、「司馬さん、日本語の〝おかあさん〟という言葉はいつごろから始まりましたか」というんです。私は「明治のごく初年だと思うんですけどね」といったんですけど、いい加減な言い方ですよ。文部省がつくった言葉ですね。おとうさん、おかあさん、という言葉まで役所がつくったという国は世界にないだろうと思います。

「日本語」というのは実にややこしい言葉で、どういうようにしてこの言葉を、どんな目でみればいいのか。つまり若いのか、年を取り過ぎているのか、言葉として私は若いだろうと思うんで

すけど。

大野　そうです。若いですね。

司馬　それにつまり流動が激しすぎるということ、いろいろなこと思いまして、〝おかあさん〟ひとつでも、明治になってこしらえなくちゃあ、しようがなかった。どこの民族でも、例えば、中国、モンゴル、朝鮮でも、革命を起こしてから改めて〝おかあさん〟をつくったわけではなく、はじめからありますね。私がずっと前に読んだものの記憶では、〝おかあさん〟という言葉が国語教科書に出たときに、山の手から、学校に怒鳴り込んできたおかあさん、つまり、母上がいらっしゃいまして、そういう下品な言葉を教えるとは何ごとだと——。「おっかさん」と聞こえるんですね。

大野　おっかさんというのは、もとは「かかさま」ですね。かかさまがおっかさんになるんです。おっかさまから、おっかさん、おっかあ、それを、かあさんという言葉に作ったんですね。たとえば、「てて親」は、トトとトをとって、おとっつぁんですね。つァんは品が悪いから、さんにあげて、お父さんという形が出来たんじゃないんですか。

司馬　そうでしょうね。とにかく、統一国家になって、初めてつくるんでしょう。だから、古い日本語がたどりにくい。大変ですね。

大野　それにもう一つは、日本語の歴史といいますか、文献としては千二百年ぐらいさかのぼれるんですが、その文献から言葉の移り変わりを丁寧に、日本語を勉強している人たちが跡付ける。

いつごろからどうなったか、というようなことが、よくわかるようにしてあれば、これはこういう風にしたんだなあ、これは由来が古いんだなあ、そういうことがわかる。跡付けがきちっとしていれば、日本人が日本語について、安心して、自信を持って、言葉の良い、悪いを判断できると思うんです。ところが、国語学、日本語の学問が、手が届いていないものだから、日本語について、日本人自身が判断できない、ということが多いんじゃないんでしょうかね。英語の大きな字引き、つまりオックスフォード辞典ですが、英語学の人は、オックスフォードがあるというふうに、自分が作ったようにいうんですよ。あれは完成まで八十年かかっている。ドイツ語のグリムの辞書は百二十年かかっている。八十年というと三世代かかっているんです。計画を立てて着手した人は死んで、それを受けて、次のキャップになった人が、やっぱり仕上げの目の前ぐらいに死んじゃう。三代目がやっと仕上げる。ドイツ辞典のグリムごときは、四世代かかっている。そうした、自分たちの言葉の辞書を持っている。私はあんまり使ったことはないんですけど、グリムの辞書はガイスト――〝精神〟と日本語では訳しますが、その一項目だけで一分冊あるんですね。一つの単語だけでそれぐらい、意味が、こういうふうになって、どういうふうになった、ということが書いてあるんですよ。そういうものを持っているんですね。ガイストという言葉が疑問になれば、それを読めば、なるほど、こうなのかということが分かるわけですよ。

司馬　服部四郎さんという非常にすぐれた言語学者がおられますが、服部さんは言葉の年代の測定をやられている。沖縄言葉と、いまの京都言葉の違いは、数百年だとか測定されているわけで

す。これはアメリカ人の考え出した方法を使ったのですけどね。日本語と朝鮮語の別れは三千年前でしたか、四千年前……。

大野　四千五、六百年ですね、数の上では。

司馬　もっとも、その測定法は仮説の上で成立しているから、すぐそれがカーボンの調査のようにはならないんですけど、おもしろい試みですね。ところが日本語自身が、これが古い日本語なのか、あるいは新しい日本語なのか、わからずに単語を集めてしまう場合があるでしょうね。

大野　日本語は朝鮮語と仲間なのか。満州語、蒙古語、トルコ語、フィンランド語、ハンガリア語など、そういった言葉とどれだけ関係があるか。日本語と比べるわけですね。そういうのを研究される方がいろいろありましてね。ヨーロッパに行って、いろんな論文を見ているうちに、南洋のほうの言葉なんかとの関係を考えた、といって日本語との比較表を作って送って下さる方もあるんですね。しかし、肝心の日本語のほうが、後でできた言葉とか、後でできた意味とかでもって、外国の言葉と比べている方が多いんです。

　外国語と日本語との関係を考える時に、古い意味でもって比較しなければいけないはずなのに、日本語として、あとの意味でもって比較していて……。これはやっぱり、日本にちゃんとした大きな辞書がないからなんですね。

司馬　そうですね。実際、われわれは日本語をぞんざいに使っているように思うんです。江戸時代には、ずいぶん末期になると日本語学というものに興味を持った人はいたにはいた。本居宣長、

その子供もそうですけど。ところが明治になってチェンバレンが来て、初めて日本の国語学が成立するのでしょう。戦国時代にはロドリーゲスが日本の文法書を作る——というのは向こうの連中に世話になっているんです。あとは、むろん大学の国語学はありますけど、どうしても国文学に押される感じでしょう。

大野　付属物の感じになっておりますね。

軽んじられている語源研究

司馬　一番大事な仕事なのに、なかなか国語学の先生も日本語の周辺言葉、隣接言葉をあまり、おやりにならない。大野先生のような方が出られて、われわれは非常に気持ちが朗らかになっているんですが……。

大野　国語学のなかでは隣接の面もやらないどころか、たとえば平安朝語の専門家は、もう万葉集を読まないんですよ。万葉集の専門家は源氏物語を読まないわけです。それから江戸の専門家は、もう中世をやらないといった、そういう状態ですね。重箱のすみをほじくるようになっているところがあるんですよ。それと日本の言葉を研究している人には、自分は文学ができないから語学をやります、そういう人がいるんです。それではやっぱりダメなんですね。言葉の研究には、言葉についてのセンスがいるわけですよ。

司馬　惚れ込まないとダメですね。

大野　惚れ込んでない人が多いし、文学はわからないけれども、語学をやりますということになると、骨皮筋衛門みたいになるところがあるんですね。

司馬　そうですね。いろんな大きな発見をなさった橋本進吉博士――。写経書のちょっとしたフリガナ的なものから発見なさったお仕事とか、大きなお仕事はあるんですけど、しかし日本語とは何ぞや、ということがないでしょう。

大野　そういう問いがない。また言葉というものは人間がしゃべるものだし、生きてて、生活していて使うものなんだから、人間の生活と結びつけるとか、当時の生活はどうだったのか、あるいは政治はどうなっていたのか、軍事的にはどうなっていたのか、そういうような文化と言語を結びつけていくということをしないで、むしろ、できるだけ文化から切り離した非常に抽象的な言葉をやろうという傾向が強いわけです。それが言語学の学問だというふうになっていて、語源の研究なんていうのは、一番バカにされているわけです。しかし、やっぱり、この言葉はどういうふうにしてできたのか、どこから来たのかということは、言葉を使う人間の一番素直に持っている問いだと思うんですよ。その素直な問いにできるだけ学問的に答えようという姿勢がない。たとえば『大言海』という字引きはぼくはすごく尊敬しているんですけど……。大槻文彦先生がとにかく五十年かかって作ったんですよ。

司馬　今でいえば、科学的でなくって大槻先生のセンスの中で語源をさぐっておりますね。

大野　変なのもありますけどね、猫はよく寝る子から猫だとか。盗みをするからネズミとか……。

司馬　犬はすぐ去ぬからイヌだとか。

大野　それに類するものがあるんです。芥川竜之介のような口の悪い人がそれを取りあげてあれこれいったものだから、『大言海』そのものが軽んじられていますけど、実に人間が一生をかけてやっただけのことはあるんです。それはもうしっかりしてます。私は分からなくなったら『大言海』を見るんです。

司馬　わたしの年下の友だちで、ロジャー・メーチンというイギリスの青年がいましてね。今三十で、二十四歳のときに日本に来たんです。ケンブリッジの日本語科を出て、日本に来たのは京都大学の大学院に入って国語学をやるつもりできたんです。彼に、「国語学やってて、イギリスでどこか就職できるの」といったら、「いいえ、日本に永住して、日本の国語学をのばすために来ました」というんですよ。ところが、日本では国語学というのは非常に変わり者の学問なんだ。大野先生には申し訳ないんですけど。変わり者の学問だと、国文学の世界ではされておりますから、京都大学の中には適当な指導者がいらっしゃいませんでして、漂っていた彼を泉井久之助先生が拾い上げて、ウェールズとイギリス地方における方言の比較を論文にさせて、とにかく修士は与えたんです。で、いまは京都外国語大学の助教授をしておりますけど、国語学をのばしに来た青年がちょっと気の毒なことに英語の教師になっているんです。これを見ても日本ではいかに国語学が進んでいないかわかりますね。画期的な学問であり、われわれの足元そのものの学問な

んですけどね。とにかく日本では、フランス文学のえらい先生はたくさんはばたいていらっしゃっても、日本語学の先生が少のうございますね。

大野　やっぱり、日本が島国だからじゃないんですか。日本人は、一億みんなが日本語をしゃべっているんですよ。青森県と鹿児島県ではついこの間までは言葉が通じなかった、そういうことはあると思うんですけど、日本という島は農業国で、それで、世界全体から見れば、非常に温和な暮らしいい場所なんじゃないんでしょうか。

司馬　そうだと思います。戦国の室町の末期に出てくる「倭寇」というのは、随分、方々（外国）行っているんですけど、すぐ帰ってくるんです。それはやっぱり、日本のほうがいいからなんでしょう。

大野　そうだと思います。農業国だから、自分の生まれついた土地にくっついていれば食いはぐれないわけですよ。だから日本人は自分の住んでいる場所と、それの〝そと〟との間に、ある線を引いて、自分の周りに〝うち〟という関係を作るわけですね。うちの人、うちの関係の人とはお互いに相通じて、そうすればそこで真面目に働いていれば絶対に食える。だからよそ者は絶対にその中に入れないわけですよ。外来というのはダメなんですよ。外来患者に対しては不親切になるんですね。

司馬　なるほどね。

大野　病院なんかでも、看護婦さん一人知っておれば、さっと行って、すぐよく診てもらえるの

に、外来患者は三時間待たされて三分間で済んでしまう。そういう「内」にいて、親しい人間と暮らしていれば暮らせるわけです。だから、言葉を使わなくても分かる。言葉なんていうのは日本じゃいらないんですよ。

司馬　顔を見ていれば分かることがあります。

言語無用の家族生活

大野　「内」の関係の人たちの間では、なんでもツーカーなんです。源氏物語でも読者を百人ぐらいしか予想してないんじゃないんですか。

司馬　そうですね。ひょっとしたら数人かもしれませんね。

大野　宮廷の女房社会、そういう狭い社会だけしか、読者として予想してない。千年あとに貧乏学者が読むだろうとは思わないんですよ。だから主語なんていらないんです。ここで動作する、何とか何とかした、その動作についての尊敬語で、動作のぬしは誰だってわかるし、動作もわかるしするから。一々、誰が何々ということはいわないわけですよ。そういうわけで、日本語の表現法には、物事を客観的にきちんと表現するという、感覚で育ってない面があるんですよ。

司馬　確かにそうだなあ。

大野　ヨーロッパには、人間というのは都市なら都市に、知らない人間が集まってきて、人間と

人間とがぶつかったときに初の社会ができる。遊牧民ですね。知らない人間同士ぶつかって、そこから物事が始まるわけです。人間の出会いから。

ところが日本人は土着から始まるわけです。あそこの嫁さんはどこから来たとか何とかはみんなに分かっているから、言葉はいらない。言葉というものは、どういうときに使わないか、ということを考えるとよく分かるんですね。結婚したばかりの男と女がいると、これは一部屋にいて、一日中口をきかないだろう。なぜなら、亭主がそこで字を書いている、女房はそこでお針などをやっている、口もきかない。ちゃんと二人は分かり合っておって、男がお茶が欲しいなと思うころに女がちゃんとお茶を持っていく。

その男と女、夫婦が、まさにお別れの状態になると、これまた、全然口をきかない。口をきくのもいやだ。顔を見るのもいやだという。これも言葉を使わないわけですよ。分かっちゃえば言葉を使わない。また、分かろうとしなければ言葉を使わない。しかし、分かろうとするときに分からないこともある。その分かろうとするときに言葉を使うんだと思うんです。

司馬　ぼくなんか上方の人間でしょう。ずっとここで育って、ここで老いつつあるわけですよ。で、東京では観念語、説明語が出来上がっているんですね。簡単にいえば、九州でいうと、「あんた、好いちょるばい」といいますね。これは惚れているということでしょう。東京では、「愛してる」というでしょう、どうもこれは説明してるんですね。

十五、六年前ですけど、道頓堀を東京の人と歩いていて、簡単なことをその人のためにしたら

しいんですね。その人に路上で「感謝します」といわれて、そのときにびっくりしました。「感謝します」というのは「おおきに」というか「ありがとう」というべきか、どっちかと思うんだけど。このごろは、普通、使われますね。

ぼくら、ものごとを断るときに、上方流に阿吽の呼吸で断るんですけど……。たとえば仕事を依頼されて、「したいんだけど、いま忙しいからできない」という。こちらとしては、断ってるわけです。ところが、三、四日ほどして、その相手方から「もう忙しくなくなったんでしょう」と、電話がかかってくるんです。どうも、ちゃんと状態を説明言葉で説明しなくちゃいけないらしいんです。

東京は諸国人の集まりだから、諸業種の集まりでもありますから、自分を説明する言葉が必要なんですね。言葉は実に豊富になって、自己の意思を説明したり、自己自身を説明したり、大いにしてるんです。ところが、土着で暮らしていると追っつかないんですよ。

私はね、今でもそうですが、子供のときから中国が好きなんですよ。あんまり好き過ぎて、中国よりも周辺文化というか、中国の周辺民族のほうが好きなんです。

大野　われわれもそうです。日本、朝鮮、モンゴル、ベトナム、チベットが猛烈に好きなんです。中国文化圏のノンチャイニーズ……。

司馬　そうです。これが海の灯台に例えれば、文化の光の源として中国文明があるという感じで……。

もっとも、モンゴル人はその光を拒絶するところがありますけど。モンゴル人は、中国を農業国家である、オレとは相反するんだと思っているんですね。だから、モンゴル帝国は漢民族の行政官を採用しない。大官にはアラビア人を連れてくる。同じ遊牧民ですからね。農耕民の漢族は拒否して……。きらいですね。それは商売違いの感覚ですね。民族の問題じゃない。中国からは文字が入らないですしね。外務省という言葉は、モンゴル語でやりますと、ロシア語よりも、中国語よりも、長いです。そのときの交際をつかさどるオトド、これは外務大臣。日本でいったら、外相という漢語でやればしまいなのに、言葉が多い。日本人のように、縮めなくてずっと長いんです。

私はこの間ウランバートルに行ってきまして、平和友好なんとかなんとかという人と会ったんです。それをいうのに、二息分ぐらいかけて……。

「日本人のように縮めないのか、あるいは、アメリカ人が好むように略さないのか、頭(かしら)だけとって縮めないのか」といったら、「絶対縮めないんだ、ずっというんだ」というんですね。日本人には縮めグセというものがあるんですが……。

それとモンゴルは、ラリルレロから始まる言葉がないというのは面白いですね。

日本語も同じですね。ろうそくとか、ラッパ、らっきょうとかは、漢語だし、こんなんは別ですから、ないんですね。ロシア人が江戸時代にやってきた時に、オロシャとしか言えないんですよ。モンゴル人も自分の国のことを、オロスといいます。実に似ている。そうすると、われわれ

が、島国で暮らしていても、いながらにしてずいぶん広がりのある民族ではないのかと思ったりする。少年じみた空想ですけれど、そこから日本語というものに非常に関心を持つようになったんです。

日本語には忠も孝もない

司馬　大野先生の、『日本語の起源』を読んでまして、最後のくだりぐらいまできて感じ入りましたのは、中国文化とインド文化（中国経由の仏教ですが）、それが入る前の日本人というのは大変どうも未開で。何を思って暮らしていたか。人生とは何ぞや、神とは何ぞや、愛とは何ぞや、ということはなんとも思わず、そこまではお書きになっていませんが、ちょっと羽目をはずしていいますと、愛に相当する言葉さえございませんね。それを思いますと、がっかりする感じです。

しかし、開き直っていいますと、日本人は知的思考が出来る民族になったのは非常に若いんだと……。

だから、われわれは若々しいんだ、というふうに思ったりもします。

「忠孝」という言葉も、こんなにいばって日本の倫理だといって、大ふざけにふざけ回った江戸時代以後、とくに昭和前期といいますか、そんな言葉はもともと日本ではないわけであって、言葉としてない、というのは観念としてないわけですよね。

忠も孝も、みんな中国語であって、さっきの愛も中国語であって、そしたら、いちばん新しいキリスト教的なものとしては愛、あるいは仏教的なものは慈悲、それから中国的なものは孝でしょう。

それらは古代日本人の生活習慣の中の倫理感覚としてでしょうけどね。それを倫理として抽象化する能力を持ってなかったのは、やはりよほどの未開状態ですね。全くの高砂族と同じ状態で、中国文化がどんと入ってきたという感じですね。

だから、文化ショックというのは、先生の『日本語の起源』にも書かれていますけど、この文化ショックの感じが、私もそれを拡大していいますと、どういいますか……。その仏教とか中国文化を思想としてとらえるよりも、手っ取り早く効き目としてとらえるでしょう。とくに、仏教の場合、そうですね、薬の効き目のようにしてとらえている。

法隆寺の仏さんも効き目主義ですね。インド人は効き目よりも輪廻（りんね）の中で生きている。いまでもインド人はそうですね。輪廻の中に自分自身を見いだしている。

インドの貧しい、あまりものを思わない人でも輪廻の中で生きている自分を知っている。ところが、日本人というのは、どこそこのお不動さんは効く、というやつで受け入れるでしょう。

日本人が思想というものが、この世にあるんだということがわかるのは、江戸の末期ぐらいですから、これは中国文化を輸入してから、千数百年たって、やっと高校の生徒ぐらいになったわけでしょう。

大野　ぼくもそう思いますね。ぼくが日本語のことをやり始めたのは、日本とはなんだということを知りたかったからです。それを知るには、いろんなやり方があると思いますけど、できるだけ、よそから入ってきたものを除いてみて……どうやって除けるかというと、言葉を手掛かりとして、日本語の非常に複雑に組み合わさったものを〝要素〟にばらして、これ以上、分析できないみたいな要素まで持っていき、それを整理して、何と、何が基礎か、ということをやってみる。そういうことをやっておけば、新しく入ってきたものはなんだ、ということが分かるし、それを日本でどういう風に変えたかということも分かるし、そういうものが、どれぐらいの日本人の根に入ったか、ということも分かるんじゃないか。いろいろ仏教のむずかしい本を読んでみて、日本では、いったい、どれぐらい分かったか、仏教がどれぐらい分かっていたのか。偉い学者がある解釈を書いている。ところが、日本人全体が、日本民族が分かったのか、というと、それはやっぱり、いろいろ違うと思うんです。神だとか、仏だとか多少考えてみたけど、どうも愛にあたる言葉は何があったのか、何もなかったのか。例えば、忠孝の孝の字は、オヤニシタガフココロ、という風に訓読するんですね。なかなか孝というものの核心をついている点はあるんですね。だけど、われわれが受け取っている孝というのは、親に従うというよりも〝尽くす〟という風に受け取っている点があるんです。古いところでは、親に従う心、そういうのは親と、従うと、心とがあるわけですから、親とはなんだ、という風にやっていって考えてみようと思ったんですけど。それと、もう少しやってみると、たどり得る日本人の古い姿というのが出てくるんじゃないか。

それがね、案外、強くて今日まで生きているんですね。

司馬　堂々たるものですね。生きてますね。

ほんのちっちゃなかけらだけを取り出して言うようですけど、例えば、ここに新聞社の人が二人いるわけですね。新聞社なんかで、ラジオ、テレビ部なんていわなくて、ラテ部というでしょう。ブルドーザーさわっている人はブルといいますね、私ども小学校の最初の教科書はハナ、ハト、マメだったんです。それに象徴されるようにカタカナ二つで、そのものが元の単語じゃなかったかと思ったり……。

原日本語は二音節

大野　日本語にはいろんな言葉があるけど、それをどんどん小さくしていきますと、どこまで分けていいかというと、三音節——。例えば、高田という言葉がある。これはタカとタに分かれますよ。小山というのであればコとヤマに分かれる。三音節で組み立てている言葉をいろいろやっていくと、たいてい、そいつは二つに分けられるものなんです。二音節の山をヤとマに分けると行きすぎる。

司馬　ヤマ、カワ、ハナ、ハト、マメ、マス……。

大野　ハナ、ハト、マメ、マスというのはよく分けております。日本語の原形をとらえたもので

す。

司馬　原形というのは、北方のウラル・アルタイ系の言葉が入る前の、つまりはやりの蒙古学の区分でいえば、縄文時代といったころだと仮定して……というのはわたしは一時、よくバーに行っていたことがあるんですよ。このごろは女の子に愛想をいう根気を失いましてあまり行かなくなりましたが、バーではやっている店の名前はカタカナが多い。それも二字のお店ははやらないようです。二字は四字であっても二字でしょう。三字か五字のところが繁盛している。カタカナ二個だと縄文的でドロ臭く思い、三個、五個だとハイカラな感じがするみたいですね。薬の名前でも、よく定着している名前は、アリナミン、ポポンエスとかベンザとか、五字か三字だなあ。これがハイカラさ、海の向こうからきた感じにつながるのでしょうか。ぼくらがよく、ちょっとハイカラぶって、たとえば、アプローチするとかいってみると、何となく一座の空気がしゃんとするということがあるでしょう。英語だからというより、カタカナにした場合、文字数が多いからではないでしょうか。

大野　そういうところがありますね。司馬さんがおっしゃった日本の言葉は、なんか余りにも日本的であるためにはやらないというのは、とても面白い観察だと思いますね。

司馬　パンタロンというのは、カタカナの五字だからハイカラだと思うんですけど。四字か二字だと、例えばミニスカートといわずに、ミニといったほうが土着的な感覚を呼び起こして何だか肉感的な感じがするんです。ピンとくる。カタカナ二個で表す言葉は、どうも縄文時代の完成さ

れた言葉じゃないかと思ったりするんですけど、間違いかな。

大野　賛成ですね。司馬さんは蒙古語を学ばれたそうですが、基本的な単語はどうですか。

司馬　長いですよ。学生時代は、これは日本語の祖語だと思い込んでいましたが、いまはどうも日本語とは違いすぎるなと思いはじめています。言葉が長いんです。例えばモンゴル語は概して、地名でいいますと、ウラン・バートル＝赤い英雄ですけれども、長い。カラコルム、ノモンハン、シラムレン、まあ一般に長いですね。

『日本語の起源』の本で、大野先生は日本の縄文時代の言葉というのは、どんなだったかということはなかなかむずかしいけれども、南方語で考えてみるのも一つの方法だという、そういう意味のことをお書きになっておられますね。そして、次にパプア語の一派を探されて、これがバカに似ているじゃないかと、例をあげていらっしゃいますですね。非常に面白うございました。日本語は母音・子音・子音・母音で終わってちょうど、しどけなく着た着物の裾がはだけているように、終わりますね。子音で厳しく締めくくらない言葉ですが、パプア語のその一派もそうらしいね。

大野　ぜひ現地に行ってみる必要があると思います。百万人ぐらいいるんです、日本語によく似た言葉をしゃべっている人たちが。ウスルハ語などですけどね。

案外近いんですよ。パプアの真ん中の高地なんです。海抜三千メートルぐらい。日中は三十度ぐらいの暑いところなんですが、夜になると五度ぐらいに気温は下がっちゃう。マラリアはない

そうです。

司馬　旧日本兵が残存しているかもしれないといわれるあたりですね。

大野　ええ、それで、その近くにオーストラリアの国立言語研究所があるんですね。五十マイルぐらい離れてるのかな。ポートモレスビーから飛行機の便があるんですよ。行きやすいところなんです。

研究所でウスルハ語を採録している人はいるんですが、やっている人は英語とか、まあインド・ゲルマン語しかできないんです。

アルタイ語のできない人たちがやっている。だから、文例がうまく配列できない。だけど、一字一字の訳の置き換えをみると、まったく日本語と同じ構造なんですよ。

司馬　どうも日本語の濃厚な血縁語は、オーストラリアの原住民の言葉がそうじゃないかと思ったりしていたんですけど。

大野　ええ、くさいんですよ。それで驚くべきことは、オーストラリアには三母音の言語がかなりあるんですよ。

司馬　そうですか。それは沖縄語ですねえ、それは。私はね、沖縄の三母音だけでなくて、鹿児島の士族でない人たち、士族は五母音を使いますから、ふつうの人たちは三母音ですませていますね。西郷どんがせごどんでしょう。士族はさいごうだけど、百姓はせごどん……。どうも、三母音の南島言葉に近い。パプアもそうですか。

大野　ともかく、日本語と語順が同じなのがあるんです。あのへんにアルタイ語のわかる日本人が行って、それこそ逐語訳をやれば研究はたやすくできちゃいますよ。ぜひ行く必要があるんです。

実は文例が三十ぐらいしかないんですがね。

でも、ある限りでは文法的にはぴたりと合ってしまうんですよ。だから、行ってたくさん語彙を採録すれば……。たとえば、赤はカラゴロ——。

司馬　面白いですね。要するに日本語は縄文時代には南方語、弥生式が入って北方語というように、くっきり考えてよさそうだなあ……。

大野　この成因はわかりませんけど、とにかく、われわれとどこかでつながっていたことになるかもしれないんですね。そうなれば、日本の歴史の書き換えですよ。

司馬　海というのは、非常にわれわれを隔てていたというのは、どうも近世ぐらいの感覚かもしれませんね。むしろ、移動のチャンスを与える空間だったような感じで、古代は随分流動していたんですね。

今の日本は鎌倉から始まった

大野　日本語は、もともと関西で発達したんですね。関東人は関西から言葉を習ったんだと思い

ます。発音も全体からいって関東のほうが荒っぽい。この荒っぽいということは、聞いていて非常にわかりにくいんです。私は、どうやったらわかりやすい日本語を話せるかということを考えましてね。結局、こういうことを悟ったわけですよ。水谷八重子のように発音しろというんです。「ワ、タ、ク、シ、ワ、メ、イ、ジ、ノ、オ、ン、ナ、デ、ス、カ、ラ……」という風にあの人はやるんですよ。

司馬　母音をたっぷり発音するのは関西式発音ですねえ。

大野　そうなんです。関西式ですよ。それが日本語の極意なんですよ。これをやれば、必ず聞き手にわかるんです。

司馬　つまり、浄瑠璃の長丁場と同じ言葉なんで、耳でとらえやすいですね。

大野　ええ。実は、ぼくはね、義太夫を久しく聞かなかったんですよ。ところが去年久しぶりで土佐太夫の語りを聞いたんですよ。そうしたら八重子と同じ調子ですよね。

「ア、ア、ア、カ、ナ、シ、ヤ、カ、ナ、シ、ヤ……」

そういう調子なんです。水谷八重子は浄瑠璃を関東風にやってるだけですよ。そう思ってね、こんどは武原はんが舞う時に語る富山さんの発音がね、聞いていて意味がちゃんとわかるんです。つまりね、関西の発音が日本語の元祖なんですよ。ああいう風にやるのがね、日本語の性質に合っているんです。

関東はね、元来、別の言葉をしゃべっていた。そこへ日本語が入ってくるわけです。だから発

音の習慣だけは以前の言語の習慣が残り、関東は母音を落とす。関西は母音が多い。母音を落としちゃ、日本語はいけないんです。

司馬　母音はやっぱり強調しないとね、いけません。日本語になりにくいですね。だけどね、われわれはね、関西育ちですと、母音を大きく言うと恥ずかしくてね。

大野　それは関西の人が、総理大臣のいるところに対して、あっちが首都だという気があるんだ。どうもね、それはいかんですよ。それはちがうんだ。

司馬　そうはいうもののね、京都のひとたちは一種の独立文化圏のようにして開き直ってるようですけど、大阪となるとね、経済力はなくなるしね、言葉は漫才になるしね……。

大野　なんで大阪の漫才が、そのまま東京に入るのか……。

司馬　それはつまりね、カタカナでも書ける、平がなでも書ける、速記できるんです、上方漫才は……。

大野　そうなんです。日本語の正統な流れなんですよ。

司馬　そうですねえ。それはそうだと思います。しかしね、言葉というのは美意識とくっついていきますからね。関東で発達したのが律令（りつりょう）の日本人、奈良朝、平安朝の日本人というのとちがう、それのモラルというのは、源氏物語読んでも、今昔物語を読んでも全然出てこない。そのね、律令の基礎というのは別質だったんではないでしょうかね。

鎌倉になって、自作農政権が、頼朝政権ができ上がる。関東武士団ができ上がる。そうすると

熊谷次郎直実、景山茂綱が出てくるわけです。ここで初めて、何が潔いか、何が美しいかという土民のモラルが出てきますよ。これは自作農になったこととつながりがある。やっぱり人間性のリアリティーがね。北条政子の一夫一妻主義ができますでしょ。

私はね、どう考えても鎌倉の田舎からいまの日本が始まったと思うんです。日本歴史も始まったと思うんです。日本人のモラルの歴史も始まったと思うんです。

あいつの行動は美しいとか、あいつは汚いヤツだというのは関西で始まってないんです。鎌倉幕府を中心に始まっているんです。

そうするとね、それにくっついてる言葉というのは、潔さが入っているわけですね。そうするとねえ、関西言葉はねえ、忠臣蔵でいうと大野黒兵衛であってね、大高源吾じゃない。大高源吾も実際には関西だけど、イメージとしては関東イメージでしょ。

マルセイユのフランス人がパリっ子に対して、果たして最終的に最後までいばれるかというのは、これはちょっと疑問でしょ。マルセイユ人がオレは本当のフランス人だといばって言うのは、大阪のヤツがオレは本当の日本人だといばっているのと同じであって、しかし何となく出るところへ出ると、しょぼっとしているという感じ……。

大野　司馬さんには、大阪意識というか、大阪の人民意識というのがあるのね。

司馬　うーん、私はまあね、私の先祖の一派は赤穂浪士の一人だそうですけどね、播州ですから。ですけど、もう私の血液というのは全く大阪なんですよね。

大阪というものはね、共和国みたいなところなんですよ。お大名のいなかったとこでしょう。だから、おさむらいの数ってのは、二百人か三百人ぐらいしか——東西町奉行所に与力、同心がいる程度でしょう。蔵屋敷は、これはまた別ですから、勘定に入らない。

そうするとね、おさむらいの美意識が入らないところなんだ。何十万という人口ですから、どうしても土着の階級意識がある。そうするとね、封建制度というのは、金沢でも江戸でも半分は武士ですから。

武士というのは形而上文化を尊敬するわけだから、形而上的なものを尊敬するというのは、あとの半分に影響するわけですよ。

大阪は、そういう影響を薄くしか受けていない。そういう世界におりますとね、まあまあ、日本というのは不思議だという感じがしますな。

辰巳芸者がつくった「そうです」

大野　ぼくはね、東京深川の生まれで下町ですからね。町民ばっかりでね。土着なんですよ。山手というのは、本来は地方から来た、つまり明治の官僚とか軍人、学者、それから明治以降できた会社の勤め人。そういうのが山手に住んでいる。下町には土着の商人みたいのが住んでいる。ぼくは驚いたんですけど、食べ物がちがう。

司馬　カレーライスなんか食べてね。カレーライスはちょっとひどいか……。

大野　まあ、カレーライスはうちなんかでも作ったけど、シチューですね。山手の友だちの家でごちそうになってね。こう白いおサラにね、白い液体があるんだ。そして、こうジャガイモなんかきれいにあってね、軟らかい牛肉が大きな塊――あんな大きな塊なんか見たことがないんでね。カレーライスに入ってる肉なんてもんは、薄く切ってあるもんですよね。

司馬　スキヤキの肉みたいのね。昔のカレーライスはあれだった。

大野　それで食べ物がちがうだけじゃない。あいさつの仕方がちがう。例えば、ぼくの友だちにね、日露戦争の時の二〇三高地攻撃隊長中村少将、白ダスキ隊の隊長だった……。

司馬　ああ、戦死しちゃったですな、旅順で……。

大野　その人の孫がいるわけですよね。その家に行くとね、そのおっかさんなんかが出てきて、朝十一時ごろ遊びに行くとね、「お早いお出ましで……」なんていうんだな。十時、十一時で「お早いお出まし」もないもんですよ。まったくちがうんだなあ。

やっぱり、ぼくは下町の人間だと思いましたね。

それでね、田舎から東京に出てきた人というのは、つまらないところで構えたところがあるでしょう。

司馬　そうそう。都電の停留所の名前を一つ一つ全部覚えたりしてね。

大野　ぼくらには、まるで構えがないんだ。ぼくの中学は開成でしたけど、私立で下町的な自由

民権的な空気があったわけです。

そういうのが、ぼくの身にぴったり合っちゃってね。それで旧制の一高に入ってみておどろいた。

司馬　地方の官吏の子とかね、会社員の子とか、教師の子とかね。俗称でいえば、わりあい士族が多うございましたね。

大野　だから困っちゃって。コンパに歌を歌うとね、英語の歌なんか歌うでしょう。こっちはしようがないから辰巳芸者てのは、足袋はかないんだ、なんていう話しちゃうんだ。

司馬　辰巳芸者といえば、彼女らは羽織着てたんですけれど、「そうです」という言葉は辰巳から始まったんじゃないですか。

大野　さあ、そうらしいですね。

司馬　「さよでございます」の、つまり「ございます」は、英語でいえば〝is〟でしょう。英語はそれですんでしまう。それで縮めてくれたのが辰巳芸者じゃないかと思うんですけど。

「そうでげす」から「そうです」――。

大野　「そうでげす」というのは、ぼくも知っているんですよ。実際に使っているのを……。

司馬　大阪は「ごわす」ですよ。「ございまする」というのは、結婚式の仲人かなんかつとめた時だけに言うんで、お商売のね、道修町あたりで使う時は「ごわす」――。

ところがね、この「ごわす」というのはねえ、西郷さんの「ごわす」と思ったらね、薩摩の

「ごわす」とちょっとちがうんですね。京都のお公卿さんの「ごわす」ですね。「そうでごわす」というのは、お公卿さん言葉で、お公卿さんのまねなんですよ、船場は。

お公卿というのは、京都ではね、バカにされていた階級でしてね、明治になって浮上したわけでね。お公卿の大将は天皇さんでしょう。京都の人は、お公卿といわず〝御所さん〟――ごしょさん、つまりごっさんやね。

さんというのはね、これぼくはシリトリ話みたいにして、しゃべっちゃうんですけども、さんというのは、われわれ子供のころに、八十ぐらいのじいさんが殿さまのことを殿さんといってましたよ。

「きょうはどうも殿さんのようなおかずだ」とかいってね。

そのね、殿さまというのは、関東やね。殿さんというのは豊橋までだそうですね。浜松から殿さまですな。

いまの宮中の女房言葉も、京都以来のものですから、サマはなくてサンだそうですね。

まあ、鳥が啼く吾妻（東）といいますけども、東言葉は鳥が啼くというのは、子音が多いからでしょうね。子音が耳ざわりに聞こえるほどに多いから、きつくなるわけでしょうが。

大野　羽仁説子さんがね、漢字学習をあまりするな、というんですね。どうしてだと思ったら、漢字というのは、体制側のものであって、漢字教育というのは、体制べったりになるから、漢字教育をやるなというんですよ。ちょっと違うと思うんですが。しかし漢字というものは、体制側

のものだという発想は……。

司馬　それは正確なんですけど。

大野　実は、もともと日本人は文字を持っていなかったんですね。だから古い、ごく素朴な日本人の原形というものをたどろうとすると、漢字を追い出して考えなくちゃいけない。しかしね、漢字が入ってきてから、日本は千五百年もたっているんですね。その間に漢字を日本語の造語要素として採り入れて、そして、言葉を造って書いているんです。だから現在ではこれを外来のものだというふうにしないほうがいいと思いますね。日本語としては、今度は漢字を使いこなし、むやみやたらに、たくさんの漢字を使う必要はないけど、二千や二千五百の漢字を使いこなしていったほうが、日本語としては得だと思うんですよ。

いま国語審議会で漢字をどうするか、ということをやっていますが、なるべく、ふやすまいとしていますね。昭和二十一年には、当用漢字を千八百五十に決めてしまってるが、なんの根拠もないんです。実際にその数だけあれば、どういう言葉ができて、どういう言葉ができないか、そんなことを調べないで、やっているんですよ。文化要素を自分で追い出して、これを使ってはいけないとか、使ってもいいとか、そんなこと言うのはおかしいと思いますね。むやみやたらに難しい漢字を使えばいいんだという考え方をチェックしたという考え方は、まあ、ぼくは認めてもいいけど。でも、こんなことをやっている国はないですよ。

民衆のために、民主主義のために、漢字はやさしくしなければならないということでやったん

でしょうけど。漢字の八割は、組み合わせになる形声文字でしょう。だから一つを覚えてしまえば、ある程度、カンで書けるわけですね。意味も、三千字ぐらい覚えるのは、そんなに難しいことではないんですよ。漢字を上手に使ったほうが得ですね。

玄界灘で左右した日本文化

司馬　それにしても、日本人の造語力はたいしたものですね。会社名とか、そういうもので使ったり。

しかし、非常にハラが立つのは電話帳を見ましても、町を歩いていましても、会社の名前で勝手に漢字を作って、例えば、興和産業とか、意味もなにもないでしょう。もともと根拠もないのに、勝手に作る。申し訳ないけど銀行では大和銀行。ヤマトと読ませるべきであるのにダイワと読ませる。かえって造語的でしょう。漢字は煉瓦（れんが）ですから、二つ並べれば意味がありげに見えますから。

それと、日本人には、二字の名前が多うございますね。義胤（よしたね）とか義兼（よしかね）とか敦胤（あつたね）とか、いろんな呼び方で呼びますでしょう。ぼくは学校におりましたときに、国文学の先生が、国語学に興味のある方で、日本語というのは、漢字をどう訓読してもいいんだ、とおっしゃったときに、えらいショックを受けたんです。子供の名前をつけるときに、勝手に親がつけますね。

私は古代史に非常に暗いんですけど、遣唐使が始まってから、ムシ麻呂とか、ヒロ麻呂とかいう名前がなくなりまして、タネナガとか、二字系統の名前になってきますね。頼朝とか義経とかになってくる。それは中国名に類似させたからでしょう。

大野　そうでしょうね。

司馬　ちょうど朝鮮では新羅の統一が日本の天智天皇のころですが、そのころ金日成（キム・イルソン）とか朴正熙（パク・チョンヒ）という言葉ができたんです。それまでは朝鮮固有の名前だったんです。朝鮮固有の名前は姓がないんです。

モンゴル人にも姓がありませんけど、その親類民族である満州ツングースにも姓はなかったようですね。愛新覚羅というのは姓ではないんですね。成吉思汗（ジンギスカン）つまりテムジンですが、なにテムジンだと言っても姓はないわけです。新羅の勃興（ぼっこう）のころは、唐が恐ろしくて、全部、唐制にならいましたでしょう。服装から生活習慣から全部。国のしきたりから、制度から、そのついでに姓名も唐制に変えたわけですね。これは周辺民族のみんなやることですから。ついでに極端に、中国なまりにしてしまいますでしょう。そこから朝鮮字が、金日成とか、朴正熙ができるわけで、日本人は、玄界灘で、つまり唐と日本海をへだててるから、金日成風とまで、名前をつけなくてもよかったと思っていたんです。

しかし、あるとき、ふっと考えたんです。いや、そうじゃないんだ、源頼朝というのは、ゲンライチョウで、向こうで通用するんじゃないかとね。実際に空海が当時、唐に行きましたときの

遣唐使というのは藤原葛野麻呂なんですね。カドノ（葛野）というのは太秦（京都市）あたりを葛野といいますが、あの辺で生まれた人でしょうが。これが唐に行くと、藤原のハラをとっぱらって、トウにして、葛野も、字を変えてトウガノゥ……正式なカドノ麻呂では、ひなびて恥ずかしいということがあるんですね。だから中国風三字名前にしたんです。

大野　つまり、外国文化にどれだけつくか、どれだけ自分のものにするかということでもありますね。例えば、われわれは漢文というのは、ひっくり返して読むものだと思っていたんですね。ところが朝鮮ではストレートに読むんですよ。ドイツ語、英語を読むのと同じなんです。それだけ朝鮮は、つまり中国に近いわけです。

だから漢字は全部、音読みでしか使わないんです。訓は使わない。花が咲くという場合は、咲くという字を当てるでしょう。朝鮮語は当てない。

日本はやっぱり玄界灘が一つあるということです。

司馬　玄界灘一つが日本文化のすべてを決定的にしていますね。

（「週刊読売」昭和五十年一月一日、八日号）

日本の母語は各地の方言

徳川宗賢
司馬遼太郎

日本語は開音節か

司馬　日本の言葉というものは、大ざっぱな言い方をしますが、北方の色彩が強うございますね、コンポジションとしては……。しかし、ややこしいデテールは別としても、どうもそれだけで割り切れないところがある。

私は、言語には生理みたいなものがあるように思えるんです。たとえば、われわれは最後に子音がくると、発音できないというところがありますね。イット・イズ・ア・ドッグと英語でも全部母音をくっつけてしまう。ところが、朝鮮人は語尾の子音は平気なんです。現に朝鮮語は、ほとんど子音で終わりますね。もっと北方の言葉もそうだと思うんですよ。

徳川　母音で終わるのは開音節……。

司馬　それが抜けきらずに、われわれに遺伝しているらしい。弥生以前の縄文時代には、この島（日本）の人びとがしゃべっていた言葉は、どうも南方の開音節だったかもしれませんね。

で、弥生式になってから入ってきた言葉というのは、どんなものなのか、いまの朝鮮語ともツングース語ともモンゴル語とも違うものなのか、似たものなのか、――これは全くわからないことですが、しかし、そのころやってきた連中は、語尾に子音がきても発音できたと思うんです。

だけど、先住民の方は語尾を母音で開くことばかりやっているから、土着というか土地の方が生理の側を担当して、コンポジションの側は、後からやってきた連中が担当して、いまの日本語ができ上がったんじゃないかと思ったりするんですが。

徳川　日本語は開音節といわれていますが、一般的にいって開音節の言語が、子音で終わる閉音節言語に変わり得るものなのか、変わり得ないものなのか――、その逆に閉音節の言語が開音節言語に変わり得るのかどうか。ヨーロッパのなんとかいう国ではどうだったのか、アフリカではどうなのかとか、そういうことを深く考えたことはありませんが、しかし全く変わらないということでもないと思うんです。

司馬　ヨーロッパのラテン系は、わりあい開音節が多うございますね。

徳川　イタリア語なんて、なにか日本語みたいな感じですね。

司馬　関西は母音で開くだけではなくて、母音を広く長く言います。われわれが関東弁を聞く時、子音のにおいが非常にするんです。どうも、自分のしゃべっている言葉が母音くさくて、その面だけ自分たちは田舎くさいと……。

徳川　田舎、都会は別にしましょう。（笑）客観的にみて、違いがあると……。（笑）

司馬　威勢も悪いという感じがするんです。

徳川　たとえば東京なら「です」とか「あります」というような時はSで終わっているんです。「ですう」とか「ありますう」とか言わない……。

司馬　あれは、われわれは、とても発音できませんな。関西、西日本生まれの人間には無理です。

徳川　ところが、西日本とおっしゃいますけれども、九州あたりに行くとまた変わってきますね。九州も西の海岸に行きますと、子音終わりが、非常に多くなっている。鹿児島なんてのは、まさにそうなんです。「クビ」や「クキ」や「クチ」や「クツ」みんな、「クッ」とかなんとか……。それから甑島（こしきじま）あたりとか、天草にもあるし、五島列島にもあります。長崎もちょっとかかっています。つまり、東シナ海に面したあたりにそういう方言がありますね。

司馬　朝鮮人の名前がそうですが、韓国の大統領の朴（パク）さんというの、「パッ」と飲み込んで発音するでしょう。あれが日本人に言えないのが、朝鮮の人には不思議でしようがないらしい。

ところが、薩摩の人は言えるわけです。「そういうことがあるか」というのを「そういうこっがあるか」とかね。たとえば、福建省の「フク」という単音がある。福建語では「フク」はKで終わりますね。だから無声子音ですね。われわれのところへくると「フクウ」になりますが、鹿児島の人は「フッ」と言えます。

徳川　むしろ、「フク」とは言いにくかったんですね。いまの人は、言えますけれども。

司馬　無声子音は、中国人か朝鮮人しか言えないと思っていたんですが、鹿児島あたり、あるいは長崎まで含めた東シナ海に面したところに、それが残っているというか、現在盛んに使っている。

徳川　よその人には、ちょっとまねできませんね。熊本の人でもだめですね。でも子音終わり風

なのは、奄美大島ぐらいで止まっていると思うんです。大島のすぐ南側に加計呂麻島という小さな島がありますけれども、そのあたりも非常に子音が強い。ところが沖縄へ行くと違います。

司馬　沖縄は上方弁の感じがありますね。意味を考えずに、なんとなく調べを聞いていますと、上方言葉にやや近いんじゃないでしょうか。

徳川　ですから、日本の中にも、いろんなものがあるというわけです。日本語は開音節である——とは、いちがいに言えないという気がします。簡単に断言する人がいますが、そう単純ではない。東北地方、これは東日本なんですが、あそこはちょっと濁る言葉を使う。たとえば「赤」を「アガ」という。旗を「ハダ」、的を「マド」という。あれは、母音が強いことと関係があるのではないか。関西の場合とは、また違いますけれども、無声子音に前後の母音の響きが伝わって、有声的な性質を持たせているということがあると思います。関西の方は、東へ行けばずっと子音性の方言が広がっていると思っておられるかもしれませんが、そうではなくて、日本の国は、母音的方言と子音的方言のだんだら模様というか、そんな感じがいたします。

司馬　日本語の中にも、無声子音の性質を持った言語があるのは、確かなことなんですねえ。

徳川　それが朝鮮語と関係あるのか、朝鮮語とまじわっているうちにそうなったのか——というようなことは、すぐには言えませんけれどね。

司馬　そうですねえ。東シナ海に面したところにということならば、揚子江以南の方と関係があるかもしれないし……。この想像、大げさ過ぎますか。

徳川　いえ、実は私もそういう夢を持っています。朝鮮半島の言葉だって、むかしから、現在のままのはずはないでしょう。ことに南の方は、わからないです。

新羅の統一から名前が変わる

司馬　私もわからないながらも、新羅の統一から朝鮮語は、随分変わったんじゃないかと思うんです。朝鮮人の名前が、統一から中国名前になるでしょう。それ以前の朝鮮人がどんな名前を使っていたか、しかし――これは史料が少のうございますね。

ただ、日本の信憑性がたいといわれている古事記、日本書紀の時期までにやってきた朝鮮人、朝鮮半島の渡来人というものは、アチキ（阿直岐）だとかなんだか変な名前でしょう。キム・イルソンでもなければ、パク・チョンヒでもないわけで、あれはやはり、新羅の統一から中国名前に変わったんだろう。その時に無声子音が定着したのかもしれないと思ったりするわけなんです。

徳川　そこで朝鮮語というけど、ソウルだとかピョンヤンのことばかりでなく、ことに南の方、さらに済州島なんかの言葉ですね。その辺のことを、隠れているものを掘り起こす気持ちでじっくりやることが大事な気がするんです。いまとなってはうまくいかないかもしれませんが。

司馬　済州島というのは、古代史では斯盧国となっていました。つまり、いまの平戸あたりが末盧国である時期には、向こうは斯盧国であった。そして、朝鮮半島の文化の変化の激しさに、済

州島ぐらいは、ゆるやかについていっただけである——という意味では、今日、済州島で非常に古い言語の生理みたいなものを採集できないとも限りませんね。

徳川先生は学者でいらっしゃるから、容易に大胆なことをおっしゃりませんけれども、まだ（言語学は）いかにも採集の段階にあるようなお顔をなさっていますけれども……。

徳川　そうばかりでもないんですが。でも考古学もそうでしょう。なにかバンと出てきたら、いままでの説を全部変えなきゃならないですから。私の本質はオッチョコチョイですが、表面は慎重に、慎重に……。（笑）

司馬　これは言葉から離れた、なんと言いますか、私のかぼそい妄想（もうそう）の世界ですけれども、室町末期ぐらいまでしか可視範囲がないんですけれども——。薩摩なんかに来る中国人というのは、われわれの想像以上に多いようです。坊津（ぼうのつ）あたりを経由して……坊津を経由しなくても、漂着したり……。それはそれとして、島津家というのは、室町時代になってから、平家だ、源氏だと言いだしましたけれども、それは室町将軍が源氏だから……。ですけれども、実際は島津家というのは、藤原だ、と称してたこともありますしね。

徳川　ウチと同じです。（笑）

司馬　おんなじですか、家康さんも。一時は藤原と……。

徳川　そういうのが格好がいいと思った時もあったんでしょう、むろん真剣に。

司馬　その藤原ですが、ほんとうは惟宗（コレムネ）、惟任（コレトウ）というのは、帰化姓だったという説もあります。

惟宗、惟任というのは、南九州で非常に活躍する帰化姓であって、どこをどう経由して来たのか、なにびとであるのかわからないけれども、少なくとも、九州では惟宗、惟任は名族であるということが言われています。

徳川　日向守、あれですね。

司馬　そうです。信長が九州攻めを予定した時に、あらかじめ明智光秀を惟任にしたというのは、土着の人になじみますからね、名前が……。それはちょうど戊辰戦争の時に――、徳川さんには非常に悪いんですけれども――。(笑)

徳川　いいえ、結構でございます。

司馬　――江戸を攻めに行く連中が、東山道といいますか、中仙道を通っていく。総大将は板垣退助です。彼はもともと乾(いぬい)という姓なんです。ところが、彼の先祖伝説に甲州の武田の板垣なにがしから出たというのがあって、彼が京都を出発する時、岩倉具視が「じゃあ、お前、板垣という姓に変えてしまえ。甲州の連中は徳川の天領で、その点で容易に従わないだろうが、板垣が来たといえばなじむんじゃないか」――ということから、板垣になったわけです。これは余談ですけれども……。

で、光秀の惟任というのは、信長時代にもなお、その帰化姓が名族だとして畿内にまで響いていたということですね。どうも、島津もそうだったらしい。

そうすると東シナ海というものが――われわれはいま近代国家になっているから、パスポート

が要るし、その頭で国と国との交通というのは、なかなかいかないんだと思っているけど、中世以前というのは、人間の往来というのは盛んにあったんじゃないですか。

徳川　検疫もないし、税関もないし、やっていたのでしょうね。

鹿児島弁は三母音

司馬　薩摩というのは、これは大変しろうと判断で言うようですが、士族言葉はわりあい江戸の言葉に近く、一生懸命やっているような感じもあるんです。つまり「アイウエオ」という五つの母音でしゃべっているような感じもするんですけれども、普通の百姓言葉は、三母音で片づけるんじゃないですか。

徳川　その傾向は沖縄に通じているところがありますね。沖縄こそまったく三母音といわれているところです。「オ」と言わないで「ウ」と言う。「エ」は「イ」と言う。雲は「クム」、手は「ティー」、米は「クミ」です。沖縄は非常に変わってみえますが、九州と通ずるところがあります。

司馬　それと、われわれは母音が二つ並ぶのは平気でしょう。「アイ」「カイ」「カウ」……が、薩摩の人は、それを一つにしちゃう癖があるんじゃないですか。よく薩摩の人が、自分の地方の言葉の変なところをサンプルに言う時に、「貝を買いに行け」を持ち出すんですが、それを「け、け、け」と言うんです。カイは「ケ」でしょう。カウも「ケ」、イケも「ケ」なんです。

徳川　これはなにも薩摩に限らず、東京なんかにも「ア＋イ」は言わないふうがある。鯛は「テー」高いは「タケー」。江戸っ子ばかりじゃない。非常に広いんです。むしろ、関西が言わないので有名なところじゃないですか。

司馬　ははあ。関西の方が孤独なのかな、その点では……。

徳川　関西も、京都府や兵庫県の北部にはその傾向がありますし、名古屋あたりは「アイ」は「アェ」となるので有名です。「おきゃあせ」式の、いろんな不思議な母音がたくさん発達している。西に行って、岡山付近も「おきゃあま」という所ですね。東北地方なんかだって、「アイ」は「アェ」になってしまう。「イテー」とか「ツメテー」とかいうのは、東京だけではございません。

司馬　そうですね。北陸の一部でも言うかもしれませんね。

徳川　関西の中心部は、正しく言う。

司馬　言ってるのが大変、威勢よくみえて、なぐられちゃうんじゃないかというような感じが、関西にはある。そういう連中になぐられるんじゃないかという恐怖感が……。（笑）

徳川　一方で、関西の方で東京風のしゃべり方をしている女性と仲よくしてみたいとか言った男がいるんですよ、テキパキしてるっていうんでしょうか。

ちょっと違う文化――文化というか言語の状況というものに、あこがれる気持ちがある。逆だってあるでしょう。関東の人は、京美人と仲よくしたいとかなんとか……。（笑）

司馬　京都の女の子というのは、やっぱり東京の人を好きですよ。圧倒的に好きですな。母音の多い言葉を使ってるやつは、どうも男らしくないと思うのかな。

上方は特殊地域

徳川　関西風の言葉の調子、まあアクセントにしても、いまの母音を融合させないということでも、西のほうへ行くと、あるところで止まってしまいますね。中国地方は違っていて、むしろ海を隔てた四国が上方に近い。

司馬　広島、岡山が、われわれの側からみれば、標準語に近く聞こえるんです。ところが阿波とか伊予とかへ行きますと、私らが失った上方弁を、まだしゃべっている感じがします。

徳川　北のほうでは、越前、加賀、能登、越中……。その辺までは、なにか上方風の感じがありませんか、そのはずれが佐渡で……。

司馬　若狭は上方ですけれど、越前に行くと違うような感じです。東国のにおいが、やっぱりしますね。

徳川　われわれがみますと、あのあたりは東日本の中では、かなり関西に近い。加賀も能登もそんな感じがする。

司馬　私なんか自分で大阪近辺に住んでいまして、関西というのはどの範囲かというと、やっぱ

り関ヶ原ぐらいまでは自分のエリアの感じがするんですよ。なんだか自分の感情があの辺までですね。それは大変、生活感としてありますね。不思議ですね。

徳川　大垣あたりはだめですか。

司馬　大垣はいいんです。大垣はまだ含めてあげるんですが、岐阜市はだめです。

徳川　あのあたりにアクセントの境目がありますね。垂井のちょっと東です。

司馬　だから、やっぱりそういうところがあるんです。それから阿波は、だいぶ違うんです。伊予はこっち側に含めちゃいますけれど、高知はとっちゃいます。

徳川　われわれには、高知県も関西に近いという感じがしますが、ただ西の幡多（はた）郡というところは、ちょっと違いますね。それから愛媛県でも南、宇和島のあたり、あの辺は四国ですけれども、アクセントはふしぎに東京風です。

司馬　おっしゃる通り、高知県幡多郡は愛媛県宇和島を含めて東京に近い。宇和島の子も土佐中村の子も、大阪に行けば大阪弁になり、東京に行けば東京弁になるというのが、土地の高等学校の先生あたりの自慢ですよ。ウチの子らは、どっち側にもなるんだ。私たちの言語生理は一生抜けませんけれども、宇和島あたりの子は簡単ですよ。

　初め私は、宇和島は仙台の殿さまが江戸初期から来まして——仙台と同じ七夕祭があるんです。伊達（だて）さんですから——で、東国の言葉が、ごちゃごちゃになったんだろう。だから、二重に言葉がしゃべれるようになったんだろうと思っていたんですが、どうもこの頃になって、少し違うん

ではないかと……。おっしゃるように、土佐幡多郡が同じエリアですね。

方言にも市民権がある

徳川　そうです。だから、そう伊達さまばかりに、責任をおしつけるわけにはいかない。（笑）

方言が全部、江戸時代の幕藩体制の結果だという考えがあれば、俗説ですね。すくなくとも、これは四、五百年のことではない。私、いつか冒険みたいなこと言ってみたことがあるのですけれど、つまり近畿の言葉――それは今を去ること千二百五十年だか千三百年だか以来、文献を通じて伝統を伝えていると思いますけれど、じゃあ、その古事記、日本書紀、万葉集という時代の日本語というものが、津軽から薩摩、さらに沖縄にいたる全地域の言葉の祖先として推定できるかというと、そんな簡単なものじゃなさそうだってことですね。すべての方言を説明するためには、もっともっと古い先祖を考える必要があるんじゃないか。

古文献の言葉は、近畿地方の言葉の先祖ではあるんだろうけれども、もっと異なる言葉が古い日本の時代にはいろいろあって、ただそれが、文献ではたどることがむずかしい。それを知りたければ、現代の方言を比較する中から探さなければならないのではないか――そういう気がするんです。

司馬　私もその通りだと思います。いまとなれば、方言という言葉で押し込められてしまってい

るけれど、よく考えてみると、全部が市民権があったんでしょうね。五母音に統一されて——大昔から五母音だったというのは、迷信であって、八母音であったかもしれないし、三母音に過ぎなかったかもしれないところもあるでしょうし、だから非常にたくさんの言葉があったんですね。

徳川　あったと考えたほうが、自由な考えを伸ばしていくとき都合がいいという気がしますね。

司馬　これは言葉の世界とは違いますが、私は神道について考えることがあるんです。神道というと明治の太政官が開発した国家神道のほうを思ったり、明治神宮みたいなものを思ったりしますけれども、そうじゃなくて、ほんとにカンナビヤマというか、山そのものが神道そのものであったということですね。それは地方に行くと、やっぱり残っているわけでしょう。

徳川　そうなんです。近畿地方でいえば、三輪山だとか……。そういうものは、確かに古代の文献にも根拠があって、いかにも由緒ありげですね。

だから、今日でもみんなそこを訪れるけれども、しかし、東北地方にだって四国にだって昔から人間が住んでいて、当然、当時の信仰の対象があったと思わなくちゃいけません。たまたま近畿地方を中心として文献という根拠があるから、いかにも由緒ありそうに思えるけれども、他にだってまだまだ比較すべき古いものがあるはずです。ただ文献に残っていないだけです。

東北地方のことをすぐに言っていいかどうか、まだ問題はいろいろあると思いますけれども、延喜式とかいうものがあって、古い神社のひとつの根本史料みたいになっている。出先のお役人の調子によって、ばかに熱心なところがあったり、不まじめなところがあったりするもんだから、

ある地域はいやに式内社が多かったり、ある地域は少なかったり、そんなことがあり得る……。こんなのは、実は役人が昔から、でたらめだったことと関係があるんじゃないかと思うんです。

司馬　それは非常におもしろそうでございますね。そうですねえ……。それで非常に深刻な顔で、それを遡及させて、いろんな問題を出してくるほうが、見当違いな恐れがありますね。ここは延喜式の神社が集中しているから、よほど、かつては中央政権が何かしたんだろうとか……。

徳川　私は古代宗教には、まったくのしろうとですから、式内社のリストのでき上がってきたプロセスの詳しいことは全然知りませんけれども、ナゲヤリな地方官と凝り性の地方官、あるいはゴマスリ地方官と反骨地方官がいたということを前提にすれば、そういうことがあり得るんじゃないでしょうか、無責任な話ですが。

司馬　この間、種子島に行ってきたんですけれども、種子島というのは、まるでカンナビヤマだらけです。住吉神社というのがあって、だけどなにも社殿がなくて、やっぱり本物だという感じがしましたけれども、別に延喜式にもなにも残っていないですよ。(笑)

徳川　私が古い信仰、古代日本神道ですか、ほんとうに残っていると感じたのは、沖縄の離島に行った時ですね。聖域の中に入ってはいけないといったら、絶対入らないですね。入ったために死んだ人がいるということが本当に信じられている。

それから神さまに仕える女の人たちに、どういう唱え言をするか、どういうふうにお祭りをするかと聞いていても、絶対に言わない。尋ねられただけで体が震えてくるんです。もしゃべっ

たら、天罰が下ると思っている……。（笑）

愛宕山はオタギヤマ

司馬　沖縄の「ウタキ」というんですか、御嶽（おんたけ）という意味ですね。京都では愛宕山のことを「オタギサン」といいますね。両者には関係はないですか。

徳川　考えたことありませんでした。

司馬　京都の人に東京でいう愛宕山という風に言ったら、腹の底から軽べつしたみたいな顔をしますからね。東京のはオタギサンの支店ですけれども……。

徳川　私はオタギさんという人を知ってるもんですから、人名ならそう読むと思ってるけれども、山の方はアタゴというのかと思っていました。

司馬　いや、違うんです。一等巡洋艦愛宕なんていうのは、京都の人は抵抗を感じたそうです。

徳川　愛宕、高雄、摩耶、鳥海ですね。

司馬　ただねえ、オタギというと、どうも勇ましくないんだなあ。（笑）だけど一等巡洋艦愛宕は、京都の山を祭っていたわけですからね。だから、「オタギ」という発音で呼んで欲しいもんだという話があったそうです。

その話は別として、私なんか関西弁でやると、自分の感情が言葉に密着して出てくるところが

あるんですよ。関西弁は土語ですから、たとえば「疲れたなあ」と私どもは言いませんでしょう。「しんどいなあ」と言いますね。「しんどい」と言わないと、どうも疲れた感じがしないんです。それから何かしていただいた時に、「おおきに」言いますね。「感謝いたします」とは言わないです。ところが、この頃、大阪でもふえてきましたね。つまりこれは文語でしょう。

徳川　私は「感謝いたします」というのはよほどフォーマルなときでないと……。「ありがとう」じゃないですか。「恐れいります」とか。

司馬　いや、私はそれを初め、東京の人にごくプライベートな場所で言われちゃいまして、それがおかしくてしようがなくて……。「愛する」というのも、そうじゃないですか。九州の人間なら、「お前ば好いちょる」と言いますでしょう。大阪なら「わしはほれたで」と言うのかな。ところが、いまでは「愛してるよ」というのは普通になってしまった。これは漢語というよりも、非常に抽象的な言い方でしょう、自分の状態を客観的に説明するわけですから。それがだいたい今のラジオ、テレビの標準語になりつつあるみたいな感じがしないですか。ずいぶん言語が変わりつつあるような感じがしませんか。つまり、土語が滅ぼされつつあるという……。

徳川　それはあるんじゃないでしょうか。公的言語が私的言語に干渉するということは、いつの世にもあることだと思います。逆もありますけれどね。

ただ、私、最近関西へ来て暮らしているんですけれども、外来語の中にさえ関西と関東と違うものがあるということを実感しました。

ページとページの違いなんてのもありますが、私、自炊しているもんですから、肉屋なんかに行くんですけれども、挽き肉というものはなくて、ミンチというものがある。東京ではミンチなんて、しゃれたことは言わない。アイスコーヒーに対してコールコーヒ。ワイシャツとカッターシャツ。

また、ショップというものが関西に多い気がする。カレーショップとか電器メーカーのサービス・ショップとか……。(笑)

司馬　大阪ガスのガスタンクに必ずといっていいほど書いてある標語が、「ガス・イズ・ベスト」――英語です。英語だとああそうかと思って、電気はやめようと……。(笑)だから、関西みたいな非中央というものは案外、外来語に対するショック度が強いんじゃないですか。

徳川　ショック度かどうか、よくわかりませんけれども、外来語を自分たちの言葉の中に取り入れてくる時に地域差があるということは、土語が滅びつつあるというよりも、まだそこには、つまり関西弁のことですが、明治以後も活力が温存されているということを示していると思えるんです。

東京弁は生々しい体臭が希薄な感じで、なにか蒸留水のような感じがなさるんじゃないですか。

司馬　感情の表現だけではなくて、ある種の観念を言う時にも土語が出てきたら、その観念にリアリティーがくっつく感じがあるでしょう。

いま文学座でやっている芝居(「鬼灯(ほおずき)」)ですが、それは戦国時代の摂津の国で起こったことを

書いたんですけれど、全部標準語で書いたわけです。

だけど、これが大阪弁で書ければ、この感じがもっとビビッドに出るんだけどな——つまり、主人公の苦労とか主人公のおかしさというものが全部出るんだけどなあ。だけど、大阪弁で書くと漫才になっちゃうから、やめましょうと……。(笑)

徳川　いやいや、そんなことはないと思います。でも、そうはいうものの、そんな感じを持つ人も多いでしょうね。

司馬　そのことを別の言い方でというか、はすかいの例で挙げますと——。

私の家の近くに朝鮮の学校があるんです。朝鮮語というのは、日本に支配されて近代化が遅れたわけです。だから土語になっていたわけです。日本の支配三十六年の間は、正式の発表をする時には日本語が用いられた。だから、非常に観念的な言葉、形而上語、論理的な言い回しというものが遅れたわけです。

ところが戦後独立してから、南北ともに論理的な言葉を一生懸命、言い回しまで含めて作ったんです。南北ではその点で言葉まで違っているんですけれども、それで三十年たった。で、近くの朝鮮の学校は——ここから向こうは、私の責任においてしゃべることであって、事実とは違うかもわかりませんが——子どもが学校のキャンパスに入りますと、朝鮮語でしかしゃべっちゃいけないんです。それは新聞の社説みたいな言葉なんです。「われわれは、このように欲する」とか極端に言えば、そのようなことです。子どもたちは、それだけでは自分の感情がうまくいかな

いので、感情表現は大阪弁になっちゃうんです。土地の子ですから――「きょうはしんどかったなあ」とか、「あのテレビはおもろいな」とか、学校の外に出ると、それを言うことによって、パッと感情が友だちに伝わる。感情が伝えられた喜びというものがある。そういうものが言語にくっついて……。

何を言いたいかというと、標準化された日本語ですね。それには、なかなか感情がくっつきにくいということを言いたいのだけど……。

源氏物語を関西弁で訳せるか

徳川　そこにこそ土語の存在理由があるんじゃないでしょうか。標準日本語には、そこまで責任を負わせにくいんですね。

源氏物語といえば、日本の代表的な古典作品ですけれども、与謝野晶子とか谷崎潤一郎とか円地文子とかが訳していますね。ある人が私に言ったんですけれども、紫式部の直系の子孫がいるかどうか知らないが、あれを京都弁で訳したらどうだろう。そうすれば、もっとうまく訳せるんじゃないかって。江戸っ子です。自分で訳してみて何かうまくいかないことがあったんでしょう。ところがその話を京都大学の先生にしたら、考えたこともなかったと……。

それから、また別の人に同じ話をしたら、「いづれのおほんときにか……」と、ちょっと言っ

てみて、訳そうとしたらしい。だけど、とても訳せないというんです。(笑)

司馬　つまり、現代京都弁に、そういうボキャブラリーとか言い回しが残っていないということでしょう。

徳川　私が関西人でないから本当のところはわかりませんが、関西で今日使われている言葉というのは、なにか偏ったものになっているのかもしれませんね。つまりオールパーパスでない。そんなことはない、現代京都弁にもまだ希望があるといって、断固おやりになる方がいらっしゃればいいと思うんですけれども、聞いたところによるとどうも希望がないらしいんです。

司馬　それはおもしろい話だなあ。

徳川　ところが、関西では、昔は自分の言葉で書けたのです。

司馬　昔というと平安時代……。(笑)

徳川　書けたどころか、それ以外の言葉では書けなかったんです。江戸時代中ごろまではそうだったといってもいいでしょう。太安万侶が古事記を書く時に、序文に書いてありますけれども——どういう言葉で書いたらいいかわからない。漢文風に書くと、ほんとうの気持ちが表れない。日本語の現実から遠く離れてしまう。そうかといって、いましゃべっている言葉の通りを漢字の音を借りてずらずら書いていったんでは、ながったらしくて、しまりがなくなってしまうと嘆いているわけです。

その当時の関西の人たちは、新しい文体を作るために、非常な努力をした。古事記の時には、

後世、曲がりなりにも本居宣長が読めたのか読めなかったのか、とにかく、ああいうものを書いた。万葉集は歌だから、その通り漢字の音をたどって書いた。つまり当時はまだ散文を、まともに書けなかった時代でしょう。その中での苦闘が上方という土地で行われた。それ以外の土地では、全然考えられてもいなかった時代にです。

司馬　そうだったと思います。天才が現れないと、土語から散文化することは無理です。

徳川　今度は大野晋先生の受け売りですけれども、古今集の序文ですね。

「大和歌は、人の心をたねとして、よろづのことのはとぞなれりける」――紀貫之が書いたんでしょう。紀友則の漢文の序文がもうひとつついていますね。貫之はそれを訓読するというようにしながらいっしょうけんめい、新しい文章を作ったんだと思うんです。しかし、当時の人からみると、これはなんだ、日本語かい、こんなものでは感情が全然表せないじゃないか、日本語の美しさがない、なんて言われたのではないでしょうか。きっとそんなことがあったと思います。でも、そういうものを作らなければ、源氏物語はできなかった。

司馬　なるほど、これは偉大なことをおっしゃいますな。天才が現れることによって、文章語ができ上がると思います。

徳川　ルターがドイツ語の聖書というものを作ることによってドイツ語の標準語ができる。チョーサーがカンタベリーテイルズを書くことによって英語の散文ができ上がる。ずいぶん乱暴な言い方ですが、その時には文句を言う人が、たくさんいたに違いない。愛情なんか、こんなもので

表せるかとか。感情のひだをほっぽらかしているとか。しかし、それを刻苦勉励して作り上げてきて……。どうも古今集の序文は、あんまり色気がなかったけれども、それから百年たって源氏物語がでてきた。これも関西で実行されたことですね。

こんどは明治になって、二葉亭四迷なんかが、東京弁をもとにして、円朝の速記録を元にしたかどうか知らないけれども、近代文体というものを作った。「浮雲」の文学的価値は、全然わかりませんけれども、そういうものがもとになって、その文体でしか表せない、文字を媒介にした現在の日本語ができちゃったんです。

その時に、こんどは上方弁は置いてけぼりにされた。関西の方が、もし東京言葉に反感があるならば、谷崎潤一郎なんて東京で生まれた人間が、あんな言葉で書いているのに抵抗して、負けずにがんばって自分の文体を創造すればいいと思うんです。そうしてこそ、はじめて近代社会の言語として自立できると思うんです。

司馬　いまの関西土語からは、よほどの天才が現れない限り、文章語にはなれないと思うんです。

徳川　芝居では、寛美の新喜劇みたいなのもあるんですから、じゃあ、関西弁で論文を書いてみるとか、随筆を書いてみるとか……。私はそういうことをつみ重ねて、コンセンサスに到達してこそ、方言というものが、東京の、なんて言いますか、風下にいて、さみしい気持ちを持たなくてすむ、唯一の道だと思います。しかし、もうだめですか。(笑)

近代国家の言語統一

司馬　近代国家というのは、そんなものですね。その近代国家の近代言語が、つまり話し言葉としての言語が成立するというのは、愛宕山の放送からですか。

徳川　大正十四年ですか。しかし、さっきの話に続けるようですが、放送の前にやはり現代口語文体――これを作ってきた人たちの努力があるという気がします。演説文体や語りの文体もあったと思いますが、そんなものを利用して、ＮＨＫは、しゃべったんですね。

司馬　要するに、文章語を口語化してしゃべったんでしょうね。私は大正十一年生まれぐらいの人の言葉を聞いて、ハッとしたことがあるんです。鶴見俊輔さんとしゃべっていて、

「鶴見さん、あなたの言葉と中央公論の嶋中鵬二さんの言葉と同じですね」

と言ったんです。鶴見さんは、

「ああそうですか。彼とは高等師範の附属で同じだった。私どもの時から、アクセント教育が始まりました」

と、言われたんです。

徳川　それは知りませんでした。初めて伺いました。おそらく、高師に神保格先生というアクセントの先生がいらっしゃったということと、関係があるのではないでしょうか。

司馬　とにかく鶴見さんのお話では、おうちで話している言葉さえ、学校で訂正された。代々、東京に住んでいる者でもあなたのアクセントは、こういうべきである、と。それが、永井道雄さんも同じなんです。同じ学年でいらっしゃるわけです。永井さんに偶然、お会いしたことがあるんですけれども、似ているわけです。つまりどこか、アナウンサー言葉の先祖のような感じがします。だけど、言葉というのは、おもしろいものだと思って……。似てしまうんですね。

徳川　オックスフォードなまりとか、ケンブリッジなまりというのも聞きますね。

司馬　それは一つの方言でしょう。附属には、そういう方言意識というのか、エリートとしての方言意識がなくて、やっぱり言語訓練——。自分たちは、モルモットのようにしてアクセント教育を受けたとおっしゃっていますから……。

徳川　それは少し行き過ぎだという気がするんです。大先輩のなさったことを批判するようですが、人間たるもの、四六時中おんなじ言葉を使っているはずはないと思うんです。それを強制するとすれば不自然です。丁寧な言葉遣いをする時もあれば、少し酔うと「なに言ってやがんでえ」式の言葉を使う場合もある。二十四時間、全部を規制するというのは、行き過ぎだと思いますね。近代語を創り出していく苦悩のひとつのあらわれかもしれませんけれど。

司馬　まあ、そうでしょうね。ですけれど、近代国家というのは、統一が好きですから……。

私どもは、方言をわざと作る勢力に属したことがあるんです。日本陸軍なんですけれども。私は戦車隊にいまして、普通、アクセルと言えばいいのに「瓦斯践板（ガスせんばん）」という。ドライバーは「柄（え）

付螺回し」という。クラッチのことは「連動板」。それから……もっとこっけいなものは、ないかなあ。ミシンは「縫穿機」、編み上げ靴を「編上靴」、長靴を「チョウカ」、スリッパを「室内靴」、「袴下」はズボン下です。――そういう具合で、一般の人を「地方人」というでしょう。

あれは非常な蔑称ですね。軍人が、たとえ一等兵が言ったって、(笑)蔑称です。そして、日本の戦争がだめになっていったのは、どうも軍部が日本を占領したからだと思うんです。

徳川　そうかもしれませんね。しかし一方で、「お前、死ね」なんて異常なことを遂行するためには、異常な習慣がなければできなかったとも考えられますよ。山県有朋は私は、あまり好みませんけれども……。

司馬　そうすると、軍隊の文章というのは、方言文章だと思うんですけれども、「何々シアリ」――「敵機ハ京浜地区ニ侵入シアリ」とか、非常に不思議な言葉を使うんですよ。そういう軍隊文章というのはメッケルに勧められて作ったらしいです。なるべく簡素で簡明で論理的な文章を発明せよというところから……。

徳川　昔の吉原の「なんとかでありんす」という言葉と、ちょっと似た性質……。つまり、浮世と離れているということが、第一。それから、いろんな言語を持った人たち、北からも南からも、それぞれの方言を持って軍隊に来るから、言葉を統一すべきであるという単純な理由。それがなければ、軍隊が成り立たないわけです。第三に、言うことが大体きまっている。その点でもありんす国と同じ。

司馬　同じですね。

徳川　いまの自衛隊がどんな状態か知りませんが、もし「ありんす国」のけがあるなんて言ったら、ぶんなぐられちゃうでしょう。

それはとにかく、いまは、昔からの純粋の方言だけでは、どんな僻地でも、だんだんやっていけなくなってきましたね。でも、こんなこともある。東京大学の系統は、大学生といえども一年生、二年生という。ところが、京都大学の系統は一回生、二回生という。

司馬　まったくのところ、京都大学の系統は、地方大学でもみんな一回生とか言ってますからね。私学でも、関西圏はそうですね。関東は一年生でしょう。地域差があるという意味では、まさしく方言であって、京都大学方言、東京大学方言ですな。(笑)

徳川　九大は回生でやっているらしい。東北大は年生で……。

司馬　だいたい分布がわかってくる。

徳川　金沢とか名古屋はどうだとか、そういうところに興味の行くひとがある。(笑)私、阪大に参りまして、一年生はというようなことを言うと、学生は、そんな軽々しく言わないで、大学生らしく一回生と言ってほしいと言いますよ。(笑)

司馬　これはおもしろいですな。

徳川　われわれ関東人にすれば、一回生、二回生というのは変な感じ。私どもは卒業年次一回生というほうでして……。一回生なんといったら、なんだか明治生まれのような感じで……。

司馬　それは何期生という意味じゃないかと思ったりもする。

徳川　東京では教務係と書くところを、関西では教務掛と書く。そんなこともあって、やはり関西の言語圏というものは健在――健在な証拠かと思ったりしますが、でも江戸時代の近松、西鶴を生んだころの健在さとは違いますね。

司馬　土語として健在ですな。地域的には関西圏である四国の、さっきは高知はちょっと違うんだと言いましたけれども、わざと入れるとして……。私は、どういうわけだか、高知県の名誉県人なんですよ。へんな自慢ですが。(笑)

徳川　ふところに手を入れている、困りものの男(編集部注・坂本竜馬)のことをお書きになったからでしょう。(笑)

司馬　私から言わせると、徳川幕府がボロボロになっていたからですが。(笑)

徳川　いや、いや。あの人は立派な人です。夢があります。(笑)本当はああいう人が好きです。

文字に支配される言語

司馬　それをおいて、うらみつらみは……。(笑)高知県というのは、たとえば藤(ふじ)の花というのを「フンヂノハナ」。ちゃんとチに濁点が発音できるんです。富士山のフジと違うわけ。「フンヂ」とnが入る感じですね。それと水というのは「ミンヅ」と言います。

徳川　その発音、ほかの土地の人にわかってもらうようには、片仮名で書けない。

司馬　ところが、いまの高知県の全高校生は言えない。四十歳ぐらいで限界になっているようです。高知県は四国山脈に囲まれているから、高知弁というものが、そのくらいの年齢まで残った。

しかし、いろんな地方のきれいな方言のことですが、たとえば薩摩には士族言葉という非常にきれいなものがある。私は、わざわざ八十歳ぐらいの老女のところへ行って、なにげない話だけを聞いてきたことがあるんですよ。丁寧な言葉で、意味はわからなくても、音楽的に立派な音感を感ずるわけです。大阪も船場言葉というのは、八十歳以上の人ですね。江戸弁も、私の知り得る範囲では——胸元から発声するような感じで、あれは八十歳以上の植木職というような人でしょう。

徳川　フヂとかミヅとか、チとシとツとスの濁音ですね。これを区別しているのは、高知に限らず九州にもあったわけですけれども、いっせいに退潮しているようです。もうだめですね。

それから、われわれ小学校のころは、クヮイシャとかクヮジとかクヮシとかグヮイコクとか——そういうふうにグヮ、クヮとかいう音がまだ各地に残っていて、しかもそう書かなければ、大阪でいえばペケ、東京でいえばバッテンをもらったわけです。(笑)ついでに言えば、津軽へ行けば、ペケはエキスという。それが一番シャレてるじゃないですか、エキスが……。

それはともかくそういう言葉を保持していた人たちは、表記法の区別に支えられているという自信もあったようですね。チの濁音、ツの濁音とか、クヮ、グヮの発音というようなものは、標

準表記法によって守り得ていたと思うんです。それが、現代仮名遣いになって、パアになりましたね。とたんに崩れたんじゃないでしょうか。

だから発音に関しては、いまの四十歳でしょうか、戦後、小学校に入った人たち以降、古典的なものは全部崩れました。このことは、文字言葉というものが、案外、言語をコントロールするということを示しているのではないでしょうか。耳で聞かなくても、文字で覚えちゃいますからね。『播磨灘物語』に書かれた言葉が、いまの人たちに影響を与えて調整していく。ですから、どうぞいい言葉を、お書きくださいませ。(笑)

司馬　えらいことになったな。(笑)

徳川　やっぱり、文学者というものの影響力というのは、強いと考えなければいけません。大学の先生なんか、だめ。(笑)

司馬　いま少しごっちゃにして、しゃべってしまいましたけれども、フンヂでないほう、つまり老女のきれいな方言云々とか植木職の江戸弁云々の話は、あれは非常に優れた敬語としての、つまり重い敬語としての方言が滅びつつあるということであって、もう八十歳以上の人でしか使えないのではないかと……。

徳川　八十歳か七十歳か、そんなことというと六十歳の人が、私だって使えると怒るかもしれませんけれども、土着のもっとも丁重な言葉より、標準語で話す方がいいという気風が強いですからね。それからやはり敬語というものは、社会制度というか、人をどうみるべきであるかという規

範が、裏腹になっているものだと思うのです。ですから、ほんとの古典的な敬語を保持している人がいたとしても、現代社会は昔と人の見方が違いますから、受け継がれないのは仕方がありませんね。日本の美風は失われてしまうんです。

司馬　第一期大衆社会の現出ということと関係があるでしょうか、敬語の問題は——。震災前後で断層ができたのかもしれませんね。

徳川　昔は生まれながらにして尊し、という人というのが、いっぱいいて……。

司馬　徳川さんのようにね。(笑)

徳川　天皇家をひとつの頂点として、小さな地主さん——五町歩所有していて、小作人にちょっと貸している人を末端として、このヒエラルヒー(階級支配)があったわけですよ。だけど今日、生まれながらにして尊し、という人は、十数人ぐらいしかいないんじゃないでしょうか。

司馬　そうですね。それも危ないところですな。(笑)

徳川　どうでしょうか。いまやアメリカへお出かけになって、大いに巻き返していらっしゃるから(笑)……。ともかく、世の中が、まるで変わってしまったわけです。富士山がオベリスクになっちゃった。

司馬　そうですね。世の中というやつが大きいんですね。世の中というやつが、言葉を規制していくんだな……。

徳川　そうだと思うんですよ。言葉というものは、世に棲む人々みんなの選択によって方向づけ

がなされるんです。これからのことを考えて、現代を起点としてみても、敬語なんかについては、人間観の変遷につれて言葉が変わるんじゃないか。言葉だけが、社会と関係なく変わっていくというものではございません。

司馬　話は変わりますが、江戸の殿中言葉――旗本言葉ですね。後になって山の手言葉になるというものは、いつごろできたんですか。「さようでござりまする」とか……。

徳川　さあ、よくはわかりませんけれども、家光ぐらいのときは、まだだめでしょう。

司馬　そうですか。

徳川　じゃないですか。知らない、知らない。(笑)そのころの史料を知らないものですから。こちらが伺いたいぐらいです。

司馬　どうもお逃げになりますな。旗本言葉のでき上がりというのは、やはり中期以後、末期に近いんじゃないでしょうか。

徳川　結局、言語というものが変化するのは、世代の交代だと思うんです。江戸の古い時代の大久保彦左衛門が死んでしまえば「鳶ノ巣文珠山……」という人はいなくなってしまうわけですから。それを二、三回繰り返せばがらっと変わりうると思うんです。

司馬　がらっと変わり方が、江戸の殿中言葉においては、普通なら粗略になっていくところが、かえって荘重になっていくでしょう。

徳川　上方からお嫁さんを連れてくるとか、そとからの刺激があったでしょう。それから、格好

をつけるということが、ずいぶんあったんじゃないでしょうか。大広間詰、大廊下、帝鑑の間……。変な区別ですが、何かと区別する時に格好をつける、つまり、いまの人には想像もつきませんが、そういう人は、一日中儀式をしていたわけでしょう。殿様は殿様らしく、家老は家老らしく、老人は老人らしく、つまりらしくしたわけです。自分は溜の間詰らしくしなければいけない——それが仕事になっちゃったんです。そうすることで、自分の存在を確かめている。極端に言えば、当時の殿中では、それ以外考えることがなくなっちゃったんじゃないでしょうか。

司馬　たとえば、勝海舟のおとっつぁんの速記録がありますね。あれは、なかなかおもしろい言葉ですね。

徳川　「夢酔独言」は速記録じゃなくて、自分で書いたんじゃないですか。

司馬　いえ、やっぱり無学の人ですから、だれかが筆記したんでしょう。ほぼ彼の日常会話じゃないでしょうか。だから、海舟も晩年の「氷川清話」というのは、べらんめえ調ですよ。下町の八百屋の言葉とあまり変わらないみたいな……。つまり彼は、お旗本ではなくて御家人だから、地下（じげ）の言葉に近いんでしょう。

徳川　殿中の言葉というのには……。

司馬　遠いんだな。（笑）

徳川　格好をつける習慣がない。（笑）そういう点では、むしろ、お坊主衆とか、そういう人たちの言葉のほうが、複雑でおもしろかったかもしれませんね。

司馬　お坊主が百万石の大名に話しする時の言葉と同僚言葉とはえらく違ったでしょうね。三重、四重の言語を操れたんじゃないですか、あの連中は。河内山宗俊なぞは……。（笑）

徳川　だから、ああいう人たちの言葉を調査しておくべきでした。

司馬　そうなさるべきでしたな、方言学者としては……。（笑）

徳川　このごろ社会言語学とかいうのが、はやってきましたけれども、ああいうものがおもしろいですね。今日なら宮内官の古手の人を調べるべきかもしれませんね。でも、たとえば読売新聞社にお勤めの方が、インタビューに行かれる時と、社長さんの前にお出になった時と、会社が終わって飲み屋にいらっしゃった時と、どう言葉が違うか——これだって調査に値する。（笑）

（傍らの記者に「どうでしょう」「そう変わらないのではないでしょうか」）

乱れた世の中ですな。変えなきゃ、日本人じゃないんです。（笑）

平安時代は別の国

司馬　標準語の統一というのは、江戸の殿中言葉にまで跡を引く、標準文語の統一かな——。標準文語の統一というのは、室町期の能狂言の流行というのが、大きいでしょうね。

徳川　現代のテレビと通ずるところがありますね。ところで、文献を通して見ると、たとえば、万葉集というのは、チンプンカンプンなところがありますね。

司馬　そうです、ありますな。

徳川　平安時代のものを見ても、ちょっととりつくしまがない。わかりにくい。でも、平家物語とか太平記ぐらいになってくると、近いというか、なにやらわかってくる。そして狂言とか、それに西鶴なんかへいって、いろんな難しい言葉も出てきますけれども、なにか、こっちへ近づいた感じがする。

平家が滅亡し、源氏が滅びたあのへんを境として、日本語の節目が変わったというような気がいたします。鎌倉時代は、まだちょっとごたごたしていますけれども、室町時代になると、もうこっちのものになってくる。平安時代というと、どうも向こうのものというような気がするんです。

司馬　それは、非常に重要なことですね。言語と離れますけれども、平安は原則として律令制ですから、土地制度としては口分田（くぶんでん）――班田収授ですか、具体的に言えば、人間はみんな土地に縛られて農奴になっていた。自分の先祖が奴隷だとは言いたくはないけれども、律令制度というものの百姓は、奴隷ですな。

それで、奴隷というものの、なかなか人情が……、人情というのをはっきり言えば、モラルみたいなものですが、それが今日、よくわかんないんです。われわれが、現実に平安時代に戻ればわかるんですけれども、後の文献ではわかりにくい。われわれが、平安時代のことを思っているのは、古今、新古今とか源氏物語を思っているわけで……。

徳川　うわずみですね。

司馬　うわずみというより、場合によったら外国みたいなものですな。平安時代における絶対多数である日本人の人情が、わからないんです。それが鎌倉時代になると、逃亡奴隷みたいなのが農場主になって、武家と称し始めるでしょう。

律令の農奴的な状態の中から、エネルギーの達者なやつが出てきて、人数を連れてどっか関東の平原にやってきて、低湿地に農業土木を施した連中が関東武士の起こりだと思うんです。それが平安末期ごろだろうと思うんですけれども、北条氏と称して——北条氏は平氏といっているけれども、あんなのは、うそでしょうな。畠山も平氏といっているけれども、うそでしょうね。みんな流行で家系を作っただけで、あの頃から系図は、全部うそだと思っているんです……。

ま、その連中が出てきて、初めて日本人が出現するわけでしょう。つまり、日本人のわれわれが、いま考えている日本人のモラルとか美意識というやつが、出現するわけで、私はどうも平安時代は別国だと勝手に思っている。だから、考古学者には悪いけれども、日本人の歴史は、鎌倉時代から始まると思っているんです。

徳川　そのあたりからやっと、それまで沈んでいた人たちが出てきた……。

司馬　出てきたんでしょうな。そこから始まる言語というのは、最初は文章文語としては吾妻鏡のようなものだけれども、どこか違ってきて、室町言語が始まる。

徳川　いまの日本人に直接通じるサイレントマジョリティーが、ついに文字をもって登場してき

たと言えるんじゃないでしょうか。平安と室町とは時代的にならべると平安が古いわけですが、古い新しいでなくて、質が違っている感じですね。ひと口に日本人とかなんとか、言っているけれども、いろんなものが混じっている。大陸から引っ越してきた人たちばかりかというと……。

司馬　東シナ海や太平洋から移民してきたやつがいる。

徳川　意外に古い人が、またいる。縄文以前の無土器時代から、ここには人がいたんです。私は縄文人はアイヌじゃないという考えですが、それらが、ごっちゃになった、わけのわからない集団が日本人でしょう。それに、地震や台風はあるにしても住みやすい国です。

司馬　これは高温多湿ですからね。モンスーン地帯は、物成りがいいですから。

徳川　千五百秋の瑞穂の国。（笑）そして細々と、しかもまあ和気あいあいと、仲良く暮らしてきた。日本人というのは、不思議に、すべてのことが、よその国からきたという気持ちが一つ、それからもう一つは、日本のことはすべて、日本で始まったという、その両方を持っていますね。

司馬　これは珍しいですよね。イギリス人は、そんなことは思わないからな。

言葉というものは、ちょっと結論めきますが、武家言葉もあれば公家言葉もあり、庶民言葉も方言もあって、いまの言語ができ上がったんでしょうな。それに漢文と西洋語とが入ってきた。いまのわれわれが使っている言葉というものは、苦心惨憺の末の日本語ですね。

徳川　その通りですね。言葉というのは、結局、いやおうなしに歴史性を負っているんですね。大事なことは、日本語は長い歴史の中で、たしかに天才の関与もありますけれど、無名の日本人

すべてが参画して創り上げてきたものだ、ということですね。我田引水的な私の結論を言えば、みなさんに、その中で、もっと方言に関心を持っていただきたいということですね。

まず、方言こそが、日本語の活力の源泉であるということ。万一これが涸れるなんていうことがあると、日本語はひからびたものになってしまうと思うんです。また過去に向かって言えば、方言の中には、断片的ではありますけれども、昔の面影——文献で知り得る千三百年を超えた、もっともっと深い歴史が、残っているはずだと思うからなんです。日本語は結局方言の中から育ってきたんです。この方言を、みんなが明治以来百年間、ばかにしてきた。母親をないがしろにする者には、かならず災いがふりかかってくるんじゃないでしょうか。

司馬　方言をばかにしては、日本人の感覚も何割かは落ちこぼれることになりますな。

（「週刊読売」昭和五十一年一月十日、十七日号）

しぐさ言葉を生む日本文化

多田道太郎
司馬遼太郎

正座は唐の風習

司馬　多田さんは大体日本趣味やから、畳のほうがいいんでしょう。

多田　どっちかと言えばそうですね。

司馬　もし正座したら、何時間ぐらいできますか。

多田　それはあきませんね。一時間もたんですね。半時間ぐらいでちょっとおかしくなりますね。

司馬　ぼくは、あぐらもあかんな、三時間ぐらい座ると、明くる日足腰こたえますね。こんなイスのほうが楽といえば楽やね。

　多田さんは、原稿を書くの畳ですか。

多田　前は畳でしたけれども、このごろイスにしました。

司馬　それはよかったなあ。正座というか、跪座（きざ）というか、べつに太古から日本のものでないし、あれはむりですな。唐の風習がこっちへきたんだというのは、本当にそうですね。唐の中ごろぐらいまで座ったのか、それとも唐の初めぐらいかな、とにかく中国の家屋の構造が、あのころ以後、変わるようなんですよね。

　いわゆる、われわれが知っている中国式の生活、つまり土間があって、そこにイスとテーブル

があるというのが、唐代のいつごろからかそうなっていくとともに、ひざを折り曲げる座り方も消えるんじゃないですか。

多田　唐代の中ごろだという話は聞いてましたけれども、不思議なことですね。どうしてなくなったのか。

司馬　この前中国に行ったら、上海で唐の時代の宴会の大きな絵があったんです。それをずうっと見ていたら、胡座している者もあれば、正座している者もあって、これはまちまちの時代なんやなと思ったんです。

正座しているのは、何か身分上しているのか、あるいは別の理由でしているのか、ちょっとわからなかったんですけれども。

多田　だいたいやっぱり、礼儀正しいといいますか、そういうものが正座らしいですね。清末の人が日本へ来て、これは唐代の美風がいまだに残っておるといって、えらい感激したというような話を読んで、あア、そういうものかなあ、と思ったんですがね。中国では、ほとんど消えてしまった。

司馬　日本の座り方というのは、お公家さんは、天皇の前でどうやって座ったのかな。

多田　残っている絵によると、立てひざが多いですね。片立てひざみたいな。

司馬　正座じゃありませんね。正座は、おそらくは奈良の古いお寺、つまり、古い時代の奈良の南都の僧侶の風習として（つまり長安の官寺あたりから伝来して）あったんだろうと思うんです

けれども、われわれ庶民の中に定着するのは、やはりお茶じゃないですか。

多田　宮廷のほうからは礼風として残らないというか、普及しないで、むしろ、そちらのほうから普及したというのはおもしろいことですね。

片ひざ立てというのは、これもよくわからんですが、これは司馬さんのお得意の朝鮮経由らしいという推測のようですけれども、いかがですか。

司馬　ぼくもよくわからんですけれども、朝鮮人は片ひざ立てですね。またモンゴル人の場合は座敷がありませんね。ですけど、目上の人に対しては、腰を上げての片ひざ立てですね、西洋の騎士が貴婦人の前でひざまずく格好です。

それから、日本のお公家さん、将軍や大名が、衣冠束帯もしくはきちっと烏帽子（えぼし）をつけて、正装して対面するというときに、正座だったかな、胡座、だったかな。

多田　そういうことは、いままであんまり人が気にしなかったことですね、普通。

司馬　胡座が正式だと思うんですよ、対面のときには。

室町期のある時期から、おそらく小笠原式礼法だと思うんですけれども、武家礼法、公家礼法で、対面に書院になりますでしょう。書院での対面というものは正座になったのかな。これは研究者がちゃんとおったら、きちっと整理できるんだけれども。

多田　それの専門家いないですね。

司馬　いないんですよね。

多田　柳田国男先生なんかの説は、居る、座るというのが、胡座をかくことであって、正座が入ってから、胡座というふうな名前をあてて、あぐらと読ますようになった。そういうことで、それまでは普通は胡座だったといっています。多分そうだろうと思いますね。

顔を見るのは無礼

司馬　正式のお作法のときもそうですね。ただ書院ができて、偉い人とそうでない人とが対面するというときには、偉い人の顔を見ないというのが礼儀のようですな。だから、江戸城なんかでも、大名が将軍に拝謁（はいえつ）するときなんか、大勢で拝謁するわけだけれども、一代のうちで、将軍の顔なんか見たことがないらしいですね。なんべんも大書院に行ったけれども、ついに何将軍の顔も見なかったというようなものらしいですね。

多田　戦前はよく、天皇陛下のお顔を拝んだら目がつぶれるといわれましたが、あれはやっぱり、偉い人の顔を見たらいかんということの一つでしょうか。やや特別ですけれども、そういうことはあるでしょうね。

　ヨーロッパでもそうですね。大僧正の顔をまともに見るのは犬だけだとか、そういうことわざがちゃんとあります。しかし、だんだんデモクラシーが発達してくると、相手の人の目を見るということが、一番大事なこととされてきた。

いまアメリカ人は必ずそれを言いますね。アイコンタクトと。アイコンタクトできないと人間としてだめなんだ。だから、エレベーターでパッと社長に会うでしょう。日本人だと、思わず目をそらしておじぎをするわけですよ。それはひきょうだと言うか、率直正直でない印象を与える。まず目を見なさい。それがどうしても心理的にしんどかったら、鼻のへんを見なさいとか、非常にプラグマティックに。しかし、日本人は外資系の企業で働いている人でも、なかなかそれは習慣としてできないですね。

司馬　西洋人は、子供でもじいっと見るからな。よく見ますな。話している間じゅう、じいっとにらむようにして見ているからね。

多田　しかし、真っすぐ見たときには、あまり目の表情は出ないでしょう。むしろ、ちょっと流し目したり、上目遣ったり、いろいろの目の表情でその人の気持ちが出てきたりなんかするわけです。目は口ほどにものを言いといいますよね。しかし、これはデモクラシーなのかどうか、もうひとつわからんのですけれども。

　というのは、江戸時代から、街の中で人と人とバッタリ出会ったときにらむ風習が、町人といっても特に伝法（でんぽう）な人たちでしょうけれども、そういう風習がちょっと出てきますわね。けんかの前ぶれみたいなことですけれども、こういう火事と何とかは江戸の華とかいうふうな世の中になってくると、目をそらすということは、もう負けなんです。勝負の世界がだんだん激しくなってくるわけね。今日風にいえば、大衆社会的になってくる。

ですから、柳田先生なんか、にらめっこは江戸時代に普及したとおっしゃってる。それまでは、侍の中で、一種のゲームとしてあったようですけれども、思わず顔をふせてしまうというのは、勝負の世界ではだめなんですね。それが、市民的理想としてだんだん出てくると、広い意味でデモクラシーなんでしょうけれども。

司馬　ガンをつけるとか、面を切るとかいう言葉がありますね。もうないですかね。

多田　昔より少なくなったような気がしますね。と言うのは、お互い同士市民社会で、電車乗っても、人の顔をじっと見る人がふえてきましたからね。一々言うていたらえらいことだということかもしれませんけれども。

瑣末主義から出た礼儀

司馬　日本人のお作法というのは、儒教とか、そういう原理から出たんではなくて、大体締めつけなきゃどうしようもないというところから出ているわけですね。室町につくり上げられるものでしょう。非常に勝手につくったわけですね。瑣末主義こそ人間をよきほうに束縛する大事なものだというんで。

だから、朝鮮、中国なら、その礼は、こういう儒教的な原理から出ているんだといって、お作法の説明ができますけれども、日本の場合は、むしろ瑣末主義が発想で目的だったわけですね。

小笠原式礼法というのは、飯の食い方でも、なかなか覚えられないようにできてますな。おはしをこっち側へやったり、あっち側へやったりそういうようにして縛って、室町の大名を縛りあげたわけでしょう。

それが戦国で切れますでしょう。戦国は不作法の時代ですよ。豊臣政権ができたときに、大坂城の大名のたまり場なんていうのは、すごいものだったそうですな。落書きしたり、そのへんで小便したりね。

それで結局、小笠原式礼法を知っている連中を呼んできて、なるべく瑣末主義にしようと思ったんだけれども、適当なのがいなかったのかな、あんまり。石田三成がそのかわりをしていたんですね。石田三成というのは、お寺の小僧上がりだから、お寺のお作法はわかるでしょう。お寺はそれなりのお作法あったから。それでやかましかったんかな。三成がきらわれた一つは、それでしょうけれども……。

それが江戸期になると、わからないものだから、専門家を呼んできた。室町大名が戦国を生き残って、それもほとんど庶民同様の姿で生き残ってしまった家、吉良家とか、畠山家とか、そういう名家を呼んできた。いわゆる高家というやつにしたわけです。儀典課長のようなものにして、旗本の三千石ぐらいの石高を与えて、それで礼式をきちっとさせたんです。

けれども、そういう礼式というのが、日常の倫理と結びついてないわけで、忠臣蔵の映画や芝居のなかでも、きょうは大紋だとか、あるいはカミシモに長袴（ながばかま）だとかなんとかいうので、浅野内

匠頭が吉良上野介にいじめられるところがありますね。

ともかくも、日本のお作法というのは、やっぱりあまり、朝鮮、中国のようなものとつながりませんな。

多田　朝鮮、中国が、むしろわれわれからみると異質といいますか、思想的といいますか。日本のほうがヨーロッパと似てますね。ヨーロッパは、大体同じころにエチケットというような言葉が、宮廷の中の瑣末主義として出てくるんですね。イデオロギーないんですよ。エチケットというのは、初めは荷札という意味だったそうです。つまり、いろんな札をつけておいて、順番を勝手に決めるわけですよ。

長者の前では眼鏡をかけるな

司馬　たとえば朝鮮では、いまでも南のほうはそうだと思うんですけれども、非常に極端な形だけれども、上長の前でめがねをかけてはいけないとかそんなことがあるんです。めがねというのは、朝鮮には李朝時代に老眼鏡として入っていたんですね。それで老眼鏡をかけるというのは、老人ぶることになるわけやね。上長の前で老人ぶるということは、むしろ逆でしょう、自分のほうが上みたいで。儒教は老が勝ちなんですから。

ぼくの友人の朝鮮人が、まだ四十代ですけれども、中学生のとき、近眼ということがわかって、

お母さんがめがねを買ってきてくれた。ただ、おじいさんの前だけはめがねかけて出るなと言われたんです。ところが、あるときうっかり、めがねをかけて出てどなられたそうです。つまり、近眼鏡というのも認めないわけだな。めがねは老眼鏡。老眼鏡はすなわち長老を意味する。だからこれは、ちゃんとした原理が、このお作法には原理があるわけです。日本はそうじゃないのやな。

多田　朝鮮では、目上の人の前で絶対たばこを吸わないとか、それはきついらしいですね。いまでも相当きつい。

司馬　いまでもそうでしょう。父親の前で、幾らふてぶてしい汚職政治家でも吸わないんじゃないですか。それと、じかに向かい合わないでしょう。目下の者は、ちょっと斜めになっていて、そこにほかの人がおれば、その人に向かってものを言うことによって声が届いてますから、目上の相手と会話する。

これは日本の場合も、大名なんかの世界ではあったわけですけれども、普通の家庭の中でそれが行われるのは、やはりすごいですね。向こうは礼の国ですな。

多田　対面してもいけないわけですね。

司馬　ただ日本の場合に、お茶が人間の対話を、どれだけ便利にしたかというのは、計り知れないと思うんですよね。室町式の書院での対面というのは、雑談もできなければ、政治的な話でも、込み入ったこと言えない。だけど、お茶席というのは、亭主と客しか階級がないということにな

っているから、だから、秀吉と利休もしゃべれるし、それは非常に込み入ったことも、あの場ではしゃべれるでしょう。それこそ、さっきのアイコンタクトも十分あっての対話があったと思うんですよね。だから、お茶があんなに武将の間ではやったというのは、便利なんでしょうな、話し合いには。

お茶というのはその意味で言えば、もしそのころの朝鮮人、中国人が日本へきて、お茶の場を見たら、実に野蛮で、礼を知らないということになるでしょうけれども、日本の場合は、あの形式があるから、うまく旋回したわけでしょう。いろんな政治や取引が……。

多田　こないだ司馬さんの『歳月』という小説で学んだんですけれども、西郷が座ぶとんを三つぐらい並べておいて、客がくるとまあそこへ座りたまえ、まあ寝ころびたまえと、横になって寝ころぶという風習があったらしい。わがふるさとの大和もそういうことであったとお書きになってましたね。非常に感銘受けたんです。片一方には小笠原流があると同時に、他方にはこんなことがあると……。

司馬　前川佐美雄さんにその話したら、なんであたりまえのことを言うねんと言うんです。あの人は大和の葛城山麓（かつらぎさんろく）の生まれですからね。

ぼくらの子供のときは、お客が来たら、必ず枕（まくら）を置いた。やっぱり寝ころんでないと話できへんでと、心から言ってますな。

多田　徹底した上下、正座の文化と、そういう長座ぶとんを並べて、まあお互い横になろうやと

いう文化がある。

しかし、お互い横になるというのは、何よりご馳走であることは事実ですね。お客に呼ばれて、まあ横になりなさいと言うてゴロッと横になって、水割りでも一杯飲みながらしゃべるのは、人生の至福でね、カクテルパーティーとか、そんなしんどいのはもういいわというのが、普通のどの人間でもそうだと思いますよ。両極端、もっと間にいろいろありますけれども、そういう身ぶりとか、作法についてもいろいろバラエティーのあるのが、本当に興味ひかれますね。

司馬　これはいいことですね。

多田　これが一つのイデオロギーになると、やっぱりそれは分をわきまえないとか、そんなことはなんとかというふうに一つにかたまるわけでしょう。そうじゃなくて、人間はいろいろな状況に応じて、いろいろな人の関係でこういうこともあり得るんだという、それで文化があるというのは、大変ぼくらグッタリ派には助かりますね。

しぐさの中に女の色香

司馬　多田さんの本（『しぐさの日本文化』）を読んでいて思ったんだけれども、人間は造形的に、写真を撮ってしまえば違う人なんだけど、動いている姿、しぐさ、その他がどっか似ているというところがありますね。

多田　われわれ男の感覚しか持ってないけれども、女の色香に迷うのは、色香ということは大変微妙でございましてね、スタンダードの美人というものじゃないんですよ。大抵の場合、ちょっとしたしぐさに大変ひかれているんですね。

ある女性はたとえば小指で小鼻をちょっとさわるとか、くせがある。それが何とも言えない魅力があるとか。ところがアメリカ式にいきますと、まぶたがなんセンチ開いているとか、鼻の高さはなんセンチとか、こういうふうにいくわけです。しかし、本当はそうではないですね。われわれが女性にひかれる場合の一番のポイントというのは、その女性のしぐさみたいなことにひかれますね。

司馬　動きの中で美人を見いだしているんでね、静止したり、写真に撮ったり、寸法をはかったりしたら、決して美人じゃない人が多いですね。よく見てみると、むしろ醜女の場合が多いですね。だけど、みんながその人を美人だと言う。ぼくはなん人か知ってますけれども、なんぼ考えてもあれ珍妙な顔しているけどなと思うけれども、あの人美人ですね、なんていわれている人がありますよ。身動きなんだろうな。

多田　ですから、なんセンチやせて、ウエストがなんセンチだったらどうであるか、体重がどうだったらどうだとか、それしか考えてないでしょう、今日のチャームスクールとか美容学校なんてのは。しかし、そういうもので女性の魅力は本当は出てこないとぼくは思うんです。

それじゃ、どういうふうな身ぶりをしたら女性が一番魅力的に見えるか。これが、むずかしい

ですね。いまの文化の中で、こういう身ぶりが、実は魅力的なんだということが出てくると本当はおもしろいですけどね。

昔は女の人は、人の目を見なかったとか、ちょっと笑うときに口に手をあてるとか、こういうことが魅力のポイントだったんですよ。いまは必ずしもそうはいかない。

司馬　目病み女にかぜひき男といいますね。目病み女というのは、赤いモミを眼帯のようにして、片っ方だけあてているわけでしょう。わりに江戸のいきな連中はいかれたんでしょうね。ぼくら子供のときには、かぜひくとくびに包帯してるやつがいましたね。

多田　かぜひいてなくとも、わざわざ包帯した女の子があった。あれは文化ですね。けがしてないのに女学生が足に包帯巻いたりして……。

司馬　そういうアクセントつけることなんだろうな。アクセントの置き方なんだな。

多田　男にも多少その面はありますが、大体弱さというものが女性の魅力のポイントであるということは、大体いままでずうっとそうですね。

南太平洋にアラペシという民族があるんですけれども、アラペシ族というのは、そういう文化の伝統を持っているんです。

そういうというのは、つまり、山の中に入ってけがしても、医者に手当て受けないんです。それでずうっと見せて歩くんです。町へ帰って、私はこんなにけがしたのよ。こんなひどい目に遭ったと。そうしたら、みんなが、あアえらいことして、かわいそうに、かわいそうにと、集まっ

てくるわけ。そうすると、その人の人格がものすごく高くなるわけよ。一種の名誉ですね。

世界の流行歌は全部それですね。アラペシ族ですね。私は悲しく男にフラレた。失恋の歌ばかり。このごろやや特例の歌が二%ぐらい出てきましたがね。世界のどの文化をみても、私は悲しい、私はこんなに傷つけられた、私はだめな女です、私はなんとかの女よと、こういう自分を下げるのが多いんです。

ということは、アラペシ的文化なんですよ。それはみんなが一番つながり得るんです。そこに同情がいくという、人類文化のすべてのものがある。

ところがそれと逆の、ちょっと名前忘れましたけれども、すぐそばに、おんなじ血を引いているんだけれども、全然違う文化を持った民族がいるんです。その人たちは、非常に論理的なんです。そろばん勘定が非常に達者でヨーロッパ人顔負けなんです。かわいげがないんです。だから、そこの女性は愛されないわけね。すぐそばで文化が非常に違うということがよくあるわけですよ。

男と女といろいろ言いますけれども、男でも、そういうアラペシ的なものが有利な武器になることもあるんですね。私はこんな傷を受けましたと、こう出てくることが異様な武器になることもあるんですね。だから、何か女性のチャームのポイントとかというのは、その時代、その場所の文化の非常におもしろい問題なんです。

このごろの若い女性の魅力のポイントをじいっと見ていると、パッと両手挙げる人いるのね。

キューピットの形するんですよ、お手々挙げて、かわいい女の子、つまり、幼児化するわけ。二十二、三、もうちょっといった女の子でも、パッと、まあーとこういうかっこうするのね。昔の女の人は、口に手をあてたかっこうしたけど。

これがお手々挙げというのと、キューピットのイメージといろいろ重なって、これはかわいいという感じの何か原型になるんですよ。

そういうしぐさのポイントに個性がやっぱり出てこないといけないわけですね。個性が出て、しかもある文化のポイントであると、大抵の男どもはポーッとまいるわけですよ。目方が六十キロ超えていても、そんなのは問題にならないわけだな。

家康にも幼児性が？

司馬　女の人は、四十になっても、五十になっても、どっか幼女的なものを残しているほうがよさそうですね。もう一つの島のやつみたいに、あの人はしっかりしているけれども、どうもかわいげがなくて、造形的には大変な、よく見たら美人なんだけれども、あんまり魅力ないというのは、ひょっとすると、幼女性が形として残ってないのかな。男にも女にも、幼児性というのは多分にあるんだけれども、ただチャーミングな形として持ってないんだよね、その婦人は。

まあ榎美沙子さんがあんなに人気あるのは、彼女はやっぱり幼女性を持っているからな。だか

ら、何をやっても無害な感じ、無毒な感じがするのかもしれません。

山路愛山という人は、日本で最初の歴史家だとぼくは思うんですけれども、あの人は幕臣だから、家康が好きなんだ。豊臣時代の前後のことを書いても、秀吉には秀吉なんですね。家康には家康公なんやね。公がついている。

家康にぼくらは愛嬌がないと思うでしょう。しかし愛山は、あれだけ子分たちが一生懸命家康を押し立てたのは、彼に愛嬌があったからだということを書いているんです。どこに愛嬌があったということは書いてないんですがね。

家康はよく突発的事態に出くわすと、あわを食ったといわれるでしょう。つめを夢中でかむとか、ああいうところにおれがいなきゃこの人はどうにも持たないんだ、と手下どもが思う。そういう手下どもがくっついているのは、案外、家康の幼児性にくっついているのかもしれないですね。家康みたいに大人そのものみたいな人間でも、もしも生の家康を見たときは、われわれはひょっとすると彼の中に大人をみなかったかもしれないですね。幼児性みたいなものをみちゃうかもわからない。

多田　弱点によって人間がつながり合うというのは、人間社会の男、女もおんなじようなことがありますね。ですから、完全無欠な男なんて、もしそれを描いたとしたら、プラスばかり集めたら、これは大変孤独な、全然社会性のない、どうにもならん男でしょうね。身ぶりでいいますと、カミシモというのは、おもしろいものですね。カミシモをつけるという、つまりピーンと肩を張

るわけですね。われわれはなで肩ですからね。どうもアジア大陸の人から軽蔑されているんやないだろうかというコンプレックスがあるんですけれども、それが室町時代から徳川へきて、こういうものを発明した。

殿中でござるというと、ピーンとカミシモ張ってある。あれかっこうがついているわけですね、あれなりの。あれは、ぼくは大蔵官僚のスタイルだと思うね。確かに立派に見えるわけですよ。ところが、そればかりでいくと、人間ついていかないんですね。何か、カミシモ脱いだかっこうがどこかにないと。カミシモつけたときはちゃんとかっこうになっているけれども、家へ帰ったら、奥さんに全部世話やかれんと、ネクタイ一つ締められない。これがわりあい平均的に偉い人になる秘訣ですね、日本社会で。

複雑味こそ真の文化

司馬　大蔵省の役人というのは、他省にくらべると豪快なところがある。しかし役人だから、カミシモは着ていますね。たとえば大蔵省の偉くなった人で、有名な女優さんを奥さんにした人があったでしょう。あのときに、あの人おもしろい人やね、という感じもった。ああいうカミシモを着た人がもつ女房というのは、四代前ぐらいまで名前の知られている家系の人の娘をもちがちだけれども、単に浮世で有名なだけの女優さん、その女優さんは、わりあい名家の娘さんらしい

けれども、しかし女優さんだから、はずれた存在ではある。はずれた人をもらうという、そうすると、あの人は愛嬌のあるおもしろい人じゃないかという感じがあるでしょう。

多田　そういう本音が、どうも戦後社会の中で、初めて出てきたという感じがしますね。戦前だったら、裏も表もない人間というのが、たとえば職人の世界にしても、侍の世界にしてもずうっと続いていたような気がするんですが、実際はそうではなくて、ぼくら裏も表もない人間というのは、実におもしろくないんですよ。表で会ったらカミシモをつけているけれども、裏で会ったらこういうおもしろい人間というのは、複雑味があって、文化ってまさにこういうものだろうと思うんです。

司馬　その落差は激しいほどおもしろいしな。

多田　遠山の金さんでも、極端にいえば……。

司馬　しかし、あれは日本人は好きやなあ。遠山の金さんというのは、カミシモを脱いで最後に入れ墨を見せないと、どうしても芝居にならない。あれはおもしろいよね。

多田　私は、まだあんまり考察していないんですけれども、入れ墨というのは、おそらく最後の身ぶりとか象徴であって、やっぱりトーテムでしょうね。南太平洋から来たと思いますけれども……。やっぱり何か、ある人間に何かの自然の力をうつしたい、集団を組みたいという原始的な一番重大なものをデザインにしているわけですよ。これが一番モダンなものの先端にいくわけです。

だから、入れ墨礼賛みたいなことになるけれども、そういうものが一方にあって、しかし、世界で普遍的になるためには一応カミシモつけんならんということで、カミシモつけて、お白洲に出て、いざとなれば、わしはこうだという、この変わり身の見事さと、ショッキング性、これはまさに、現代に遠山の金さん以上の英雄は、おそらく出てこないだろうという感じがありますね。

隆盛とはおれがことかと西郷言い

司馬　似たような人が自治体の知事や市長さんあたりにいても、よかりそうなものなんだけどな。度胸が要るからな。度胸というのは、やくざのような、ああいうものじゃないですね。人間がよっぽど透きとおらなければ、出来あがらないものですから、ほぼ無理かな。

ぼくの知り合いで、七十超えた人がいるんです。今度は名前の話なんですけれども。

その人は、もう四十年ほど前から、自分のことを名前、つまりセカンドネームで呼んでくれと言っているんです。自分の身内にまずそうさせた。で、子供さんも、お孫さんも、その人のことを次郎なら次郎と呼んでいるわけやね。呼び捨てなんです。外国の小説を読んで、その主人公がいつもセカンドネームで呼ばれているということが、すばらしいと思ったんですね。

次郎というのは仮称ですけど。それは、親がつけて、親が呼んでいるだけの名前でしょう。だ

から、他人から次郎と呼ばれると、人間がそのまま親しくなるところがありますね。ぼくにもそれで呼べと言うんです。ぼくは呼ばないですがね。だけど、姓で呼ぶということは非常に封建的で、律令官僚的だと彼は言うんですよ。

日本人が相手を呼ぶのに、非常に複雑な呼び方をするのは、多田流に言えば、これも文化なんだけれども、これをぶち破るということも、一つのおもしろいアイデアかもしれんと思ったりするわけです。

「諱」の項を、『広辞苑』で引くと、後鳥羽院のそれは尊成と「増鏡」からの引用で文例になってますね。諱というのは、死んでから言う生前の実名ですよね。大石内蔵助良雄の良雄は諱ですが、同時代の大石内蔵助の周囲の人は知らないし、また知る必要もないわけです。良雄というのは、墓か系図に書き入れるだけです。

明治の初年に、あんまり名前ややこしいんで西洋流に一種類にしろというおふれが出たんです。それで、偉そうにつけたい人は伊藤博文とつけ、偉そうにしたくないといったのが江藤新平で、自分の通称を届け出た。そうしたら周りの人が、江藤さん、そんな安っぽい名前よりも、ちゃんとあなたには、諱があるじゃないか、それが重々しくていいじゃないかといった。ところが彼は、そんなに重々しいのが好きなら、ニイヒラとでも呼んでくれといったというんですね。

だから、あのときのおふれで届けた名前で、一つのちょっとした人物テストができると思うんですよね。西郷隆盛の場合は、吉井勇さんのおじいさんが届けちゃったんです。吉井幸輔という

のが通称なんだけれども、西郷吉之助とは若いときからの親友で、あいつは不在だけれども、おれが届けておくと言って、勝手に届けて、隆盛にしちまったですね。ところがこれは、吉之助のお父さんの諱だったんですな。小さいときからの親友でも、吉之助の諱を知らなかった。しようがないから、彼は隆盛になっているけれども、本人は実感は一度もわいたことないでしょうね。

つまり、明治になって太政官のおふれで、名前を整理するようになって、しかも、維新の足軽あがりの連中が偉そうにしたいために、博文とか、有朋とか、漢字二字の名前にしたわけなんやね。そして、訓読みにする。これは奈良朝のころからの名前の呼び方ですね。

多田　名前を幾つも持つということはいいことですがね。しかし諱というのは、ぼくらの感覚にはそぐわないですね。

二字名前は中国向け

司馬　いまの親でも、わりあい子供にヤスシゲとか、トモモリとか、ああいう名前をつけたがりますな。昔から日本人はこんな読みにくい名前をなぜつけたがるんだろうと考えたことがあるんですが、あれは遣唐使に行くときの用意なんですね。

遣唐使に、最初はなんとか麻呂が行くでしょう。やがて、なんとか麻呂では野蛮な感じがして、結局、中国名前に似たようなものをつけた。二字にして、訓読みにしておく。

空海を調べていたときに、空海を乗せて行ってくれた遣唐大使というのは、藤原葛野麻呂で、それが向こうへ行くと、正式の文章では藤賀能になっているんですね。それから、豊臣時代に行って、初めは秀吉は平氏を名乗ってましたからね。朝鮮側の文章では平秀吉ということで理解されているようですね。

つまり、日本人の名前というのは、変な二字名前の頼朝とか、義経とか、正成とか、家康とか、本人が生前に使わなかった諱を名乗るようになったのは、要するに、遣唐使へ行くかもしれんという都合だろうと思ってるんです。

多田　明治以降になると、ヨーロッパ風のジャックとか、アンヌとか、そういうのをいろいろつけまして、遣欧使になった場合も不便しないようにした。それはだんだん、バーの名前になってくるわけですよ、リカとかエリとか。バーなのか、それともハイカラなお嬢さんの名前なのかわからんような、こういう文化の混乱状態に陥りまして、大変おもしろいです。

司馬　昭和二十年代ぐらいから、女の子が生まれると、バーのホステスみたいな名前をみるようになりましたね。

多田　あれはどこへ行ってもホステスできるようにという配慮かもしれんけれども。(笑)

司馬　公家が女の子につける××子というのは、われわれ庶民はつけなかったですね。明治になって、人民の地位がアップしたんじゃないかと思って、みんな子をつけるようになった。だからいまは、アメリカやフランスの名前に近いほうがいいのかもしらんね。マリとかエリとか。

多田　名は体をあらわすというのは、名前が人生に対する身ぶりといいますか、しぐさといいますか、基本的なこういうものであってほしいという親の希望をあらわすわけで、非常におもしろいですね。

司馬　名前はむしろ、親を判断する手がかりになるわけやな。

多田　いまの時代は、触覚の時代であるとか、カラー時代であるとかいわれますね。人間が花の色なんか見ていて、その色を写して何かにしたいという、これは大変興味あることですね。衣服のここに染めたいとか、自分の皮膚に写したいとか、おしろいにしたいとか、紅にしたいとか。そういう写すという思想が文化の一番基本的なものだと、ぼくは思いますね。

ちょうど紀元ゼロ世紀のころに、漢の時代のことらしいですけれども、青と赤と白と黒と原色を決めて、真ん中に黄色を置いたわけですね。大変な知恵ですね。

いまの若い人はほとんど知らないことだけれども、青春という言葉ね。これは青い春なんですね。春は青いわけです。なぜ春は青かということは普通考えないわけですけれども、本当は、青というのは東であって、東と春と青というふうに秩序づけられているんです。朱夏というのは南（朱）にくるわけです。白秋というのは、西（白）へくるわけです。一巡グルッと、時計回りで一巡しまして、北へ来ますと、玄冬になって黒い冬になるわけですね。ですから、空間と時間と、そういうものすべてを色によって配分する。

色というのは情緒でありまして、一番無秩序なものなんですよ。私は赤が好き、私は黄色が好

き、ぼくはフリージアが好き、ぼくはバラのような女が好きと、バラバラな趣味なんですけれど、それを秩序づけた。人間社会における最も重要な秩序は漢代にできたという感じがするんです。

司馬　漢の武帝のころには、モンゴル人がやられちゃうけれども、それまではモンゴル人が中国人をやっつけてますね。それは絹がほしいからというだけの理由やないけれども、モンゴル人が動物を持ってきて、中国人がほしくもない馬や羊を与えて、そのかわり絹をくれというところもありましたな。

　よく考えてみると、あれは色をくれなんだろうな。それまでモンゴル人はけものの衣服、毛皮を着ていたわけでしょう。要するに、色がなかった。毛皮色しかなかったわけ。それを赤とか、青とか、何かを着たいという。いまでもモンゴル人の民族服は自分で生産しないのに、絹のどんすですよ、中国から仕入れている。紀元前から仕入れているわけやね。つまり、絹の手ざわりが好きなのだというよりも、色ですね。つまり、長城の内部の農耕民族はカラフルなかっこうしている。あれを身につけたいと思う感じがモンゴル人にあったのかな。

多田　それは政治的なレベルとちょっと違う、いろんな文化を自分のなかに取り入れて秩序づけたいという一種の、いま風に言えば支配意思かもしれませんね。

司馬　江戸末期なんかに来た外国人が、日本人の中間色の見事さに感心するでしょう。

多田　中間色というのは、日本の文化のやっぱりおもしろいものですね。

司馬　ところがいまは、原色の時代だといいますね。これ、解放されたんやろな。あんまり日本

文化も、日本文化すぎると拘束性が強くなるから、似合いもしない原色を着るようになったんかな。

多田　原色時代というのは、一つの過程で、今度は中間色か何かわからないけれども、また新しい色の時代を迎えるだろうという予感はありますけれども。異文化を取り入れて、どのようにたくましく生きていけるかということが、色の感覚で一番よくわかるんやないかと思うんです。ぼくらは鈍感ですけれども、女の人なんか、それを敏感に感じているんだというおそれと、尊敬の気持ちがあります。女性文化の一番強いところは、そういう根本的な、直感的なもので、パッとつかんで、私はこういう表現するんだと、これで人生生きるんだという、非常に微妙な、非常に高い意識だと思いますね。

うちのおふくろなんかでも、いま思い出すと、これはコウトかしらと、これはじみかしらと、つねにいってました。子供心に、女はつまらんことをいっていると思っておったけれども、実は男のほうがつまらんことを思っていた。これはマルクス主義でいくか、近代主義でいくか、なんてね。

司馬　コウトという言葉は、上方言葉だけれども、これはちょいといま翻訳不可能みたいだな。

多田　江戸ではどういうふうに言ってましたかね、コウトというのは。

司馬　コウトというのはないですね。じみてこともないんだけれども、年齢さびたという感じかしら。年齢というのは漢語だから、さびたをつけたのは変だけれども、品のいいじみさかな。

日本の学問文化というのは、江戸期の各藩が、背負うわけでしょう。佐賀藩でも、津和野藩でも、宇和島藩でも……。しかし、江戸でいうイキとか、上方で言うコウトがわからない。

江戸期の町人は、旗本を含めちゃいますが、無学ですよね。それでもいいねん。隅田川を船ですうっと流していたら、それで文化なんやね。がんばって、漢文暗唱せんでもいいわけや。ところが、漢文を暗唱してくれる人がないと、言語文化ができ上がらない。

地方から各藩の子弟が神田に集まってきて、塾ができますね。江戸期の神田は塾の街です。後に明治大学やなんかになったけれども、千葉周作のお玉ヶ池とか、大抵の漢学塾があった。だから、古本屋ができた。いまの古本屋街は、江戸時代からあるわけやな。

江戸には、地方の人たちがしょっちゅう入っていて、元禄以後は百万都市だったというけれども、その半分ぐらいが侍でしょう。侍はそれぞれの地方から出てきているし、移動しているから、共通の言語が必要なんです。あくまでも言葉で説得しなきゃしようがないから、どうしてもわれわれの上方弁とちがって論理的になってしまうわけや。諸藩の江戸留守居役あたりも含めて、やっぱり地方の侍が共通の言語文化をつくったんやろうな。

言外の意を伝えること

多田　日本人は、外国に行ったときに、非常に言葉で悩みますね。言葉ができたらどんなにいい

やろというわけです。実はそれは誤解であって、世界の文化をかなりよく見ているアメリカ人の研究によると、六〇%ほどは身ぶりで全部通じている。言葉というのは、その中の残りの三十何%のうちの何%だといっています。大抵のことは身ぶりで通じるわけです。

司馬　しかし、普遍的原理ができ上がるのは、言葉が通じない、人情も違う、文化性が違うということからですね。中国だって、儒教という普遍的な原理ができ上がるのは、お互い他民族やからね。いまでこそ、漢民族一つと言っているけれども、どう考えてもヨーロッパみたいに多種類ですよ。日本に普遍的な原理はでき上がらないのあたりまえやね。鹿児島の人と津軽の人が、初めはしんどいけれども、半年ほどしたら、あうんの呼吸で通用するでしょう。だから普遍原理が成立しない。だから、やっぱり日本には文化は起こっても、文明が起こらない。

多田　われわれは大変な文化国民ですよ。

司馬　文化民族であることは確かですね。だけど、文明民族ではないな。ぼくらが陸地ではさまれていたら、早く普遍性に触れて、カトリックで行くか、回教で行くか、どっちかになっているでしょう。何も旧制高校や、いまの新制大学で思想習わんでもいいわけや。

多田　そういうことにはならなかったのは、一種の宿命ですね。だから、普遍というものの恐ろしさをぼくらは知らないですね。普遍というもののありがたさは知っているけれども、耳学問で。

たとえば、ヨーロッパでどんなにキリスト教が恐ろしいものであったか。土俗宗教を弾圧して、全部つぶしてしもた。それだけじゃなくて、その地方の文化の根源までもカトリック風にするわ

けですね。そこがもう一つの文化民族である大変な特徴と思いますね。そんな恐ろしさを知らなかったということは、地球上で非常に珍しいですね。いいところばかりとって、非常に甘い夢を見て、「アンアン」「ノンノ」とかを手にした、ディスカバーネエチャンみたいになって、いい気持ちになっているんです。

司馬　普遍性は、服装や建築などのモードの流行だけで満足するというところがあるな。さて、本日はいろいろしゃべったけれど、「立て板に水」ってわけにはいかなかったですね。

多田　そうですよ。イギリスの貴族なんか「ア、ア、アイ・アム……」と、つかえつかえしゃべったりするそうです。ペラペラと理路整然としゃべる人は、頭が切れるみたいにみえますが、これは文化が低いということかもしれない。つかえてしゃべるという「しぐさ」で、言外の意を伝えるのがいいんです。

司馬　安心した。（笑）

（「週刊読売」昭和五十一年四月三日、十日号）

空海・芭蕉・子規を語る

赤尾兜子
司馬遼太郎

日常感覚と俳句

司馬　きのう、朝起きぬけに坊主さんが訪ねてきた（笑）、高野山から。「山、寒いでしょう」と言いますとね、「春寒料峭（しゅんかんりょうしょう）と言いますかな」。日本では普通のあいさつ言葉が、ちゃんと俳句的雰囲気になっているんですね。「ちょうど山の冬枯れの木が、春先の風でこう芽吹いてくるでしょう。若い芽がさかんに炭酸ガスを吸収して、そして酸素を出し始めるころが、どうも高野の山は寒いですな」と、そう説明がちょっと理屈っぽいのやけど……。（笑）こういう日本人の時候のあいさつの、きめの細かい日常感覚の中から俳句というものが出てきたのかなあ。お坊さんが帰ってから簡単な字引で、「春寒」の項をひいてみると、杜甫（とほ）の詩が引用されています。「氷雪、鶯至リ難ク、春寒、花較遅（やや）シ」こう読んでいいのかどうかしらんけど、つまり、高野山の坊さんが、ほとんどそのとおり言っているわけですね。すると、俳句と漢詩のかかわりが、なんだか自然にわかったような気がして、あすは赤尾大人（うし）と対談するから、この話からきり出しましょうと。（笑）

赤尾　なるほど。春寒はね、言葉はまったくそのとおりで、あいさつにしても生きているし、その微妙さいうのは確かに俳句は持っているけれども、ただ漢詩といくらか……。僕自身、実作や

ってて、また中国文学を習った端くれでもあるけど、それで思うのはね、春寒という言葉はそのまま日本へ伝わって生きていても、その「春寒」の、寒さの「寒」がね。この前、あなたは中国へ行ってこられましたけども、寒の厳しさを、日本のほうがずっとしなやかに使っている感じがするんです。

司馬　おもしろいな。

赤尾　で、中国の漢詩の一つの聯を、あるところ二行なら二行だけ抜き出して、それをアレンジすれば俳句になる、というような考え方を、僕の友人の畏敬する学者が最近発表してたんですけども、僕はねえ、二行取り出してアレンジしてなるものと、俳句とは、ちょっと違うと思いますよ。というのは、二行くっつけるのは、それは分析的にいえることで、俳句のほうがもっとしなやかと言いますか、そこに日本人の掬う、心のヒダがある。それを思うんでね、漢詩の断片であるとは、思わないんです。

司馬　なるほどね。それは「春寒」からすぐ「春炬燵」なんていう季語、まあ私個人としては春炬燵というイメージは嫌いですけど、だけどなぜ嫌いかというと、何となく日本的な退隠の状態でしょう。つまり、非常に無責任的退隠の状態やね。公という抜きさしならぬものから逃げるという屈折は頭からなくて、私だけの、自分だけ布団かぶって眠っているという感じの。まあ「春炬燵」は眠っているのかどうか知らないけど。それが、好き好みは別として、日本人のその背中を丸くした雰囲気、そして外は冷たい風が田を吹いてて、というイメージは、やはり独特である

ことは独特やね。で、しなやかといえばしなやかですね。もっとも、赤尾君の言っているしなやかというのは、こんな低いイメージのことを言っているんでないと思いますが。

漢詩で言う春寒はねえ、……確かにそうだろうなあ。あそこの長安なんかは陝西省にありますでしょう。陝西省いうのは、もうちょっと北へ行ったらモンゴル高原やね。だから、あの黄土層はにおいとしたら、江南のべとべとした稲作地帯の雰囲気とはまったく違います。非常に乾いて、それが早春という頃に、「長安二月、香塵多シ」という韋荘の詩にあるように、ちょうど十センチか十五センチぐらいのニラ系の草、これは羊や何かが喜ぶんですけど、その草が乾いた土の上ではるかに無数に花をつけるんです。そうすると、旧暦二月の風が薫ってきて、風塵までにおう。そのにおいは非常に乾いて、厳しくて、あまり湿度がないわけね。

赤尾　そう、その湿度の差ね。

司馬　で、それが日本の「春寒」との、まあ違いといったらおかしいけど、日本へ入ってくると、もう最後は「春炬燵」にいってしまうような春寒やね。

漢語イメージの継承

赤尾　いま、あなたのおっしゃる湿度という問題ね。日本の俳句の詩の中に流れていて大事なことは、湿度の濃い風土ですから、ちょっとした春先の動きが、その中に湿度を帯びつつ動いてい

るわけです。「春寒」も、また「春日和」でも。そこらへんが微妙であり、僕のいい方で言うと、しなやかであると。漢詩のそれと少し違うのは、そこと、それから少し話が大仰になるけど、漢詩の「詩」は、「志」でしょう。こいつが必ずどこかに生きていますからね。

司馬　うんうん。

赤尾　俳句が志であるというのは……僕は若いころはそうおもってましたけれど、このごろは、志という大仰なことは、それほど言わんでもいいのじゃないか、という感じを持っているんです。

司馬　なるほどねえ。僕はここ何年か空海の文章とつき合わされたけど、手紙なんかは実にうまいわけや、最澄に出す手紙とか。よく考えてみると、あれは中国からそのまま移入したものですね。手紙の形式いうのは、空海はそのまま……何て言いますか、人文的には中国人でしょう。

赤尾　ええ、人文的にはそうですね。

司馬　で、先に時候のあいさつをしてはるね。われわれ、いまだにそれを踏襲しているわけですね。たとえば「膠漆之芳(かをり)、松柏トトモニ凋マズ、乳水之馥(かを)、将(まさ)ニ芝蘭トイヨイヨ香シ……」（『空海の風景』下巻二五八ページ）というような。つまり、一種のどう言うんですか……。

赤尾　一種のデコラティブな……。

司馬　うーん、デコラティブというよりも、漢語からうけてきた響きによるイメージの結像というか、その型というかこういうあたりから日本人は継承していくわけですね。だけど実際に日本人が、漢語、つまり漢文的世界に面としてなじむのは、江戸中期以後でしょう。

赤尾　自己消化するのはね。

司馬　つまり、あのころに芭蕉が出現するのは、こういう継承の感覚の爛熟という点でもう当然のような感じがしますね。芭蕉のサロンに参加する人々は、初等の漢文は全部心得ているわけでしょう。故事もほぼ初等的なものは心得ている。芭蕉もそんなに多くを知っているわけでもなくて、杜甫の一部とか、それからまあ唐詩選というものは、まだ社会になじんでない。唐詩選までは知ってなかったようですが、しかし漢語の響きみたいなもの——春寒料峭というような感じやね。春寒料峭といったら何の意味かよくわからないが、何となく空気がこうぴりぴり響くような感じ、というものは、互いに共通のものになっている時期に、芭蕉が出ているわけですけども……ということは、以上、以下を質問するために長々と喋ったんですが、僕はどうも俳句に無知で……、つまり俳句というものは、日本化された漢語イメージから成立する文芸というわけですか。

赤尾　僕は、俳句の原型になる基礎的な構築の言葉の根は、漢語、漢語脈的系列ね、これによって、このわずか十七音の詩を構築した、ということは認めます。

司馬　ええ、ええ。

赤尾　芭蕉自身が若いころ、彼の生涯の大ざっぱにみて前半分、漢語まじりの作品をいっぱい書いています。あれから芭蕉が、一つの自分の骨格をつかんだということは確かですね。

司馬　ははあ。

赤尾　いま、たまたまあなたがおっしゃったんですけども、江戸中期以後ね。漢詩人に菅茶山（かんさざん）あたりがちょうど出てくるんですよ、僕の頭には。茶山の漢詩は、もはや漢語を大体自分の手の中に入れてしまって、やわらかい、和人的な漢詩にしていますわね。

司馬　長崎へ行って中国人に見せたら、あるいはおかしいかもしれないがしかし日本人の漢詩はもうこれでいいんだ、という開き直りがあるわけやね。

赤尾　そうです。ちょうどそれは江戸後期になりますね。

俳句の和語と漢語

司馬　この前、この雑誌で、小野十三郎さんが、富士正晴さんと対談していましたね。あれを読みながら、かつて小野さんから聞いた話を思いだしたんです。小野さんの家に、ロシヤ系ソ連人と、共和国の朝鮮人と、二人のそれぞれの詩人が遊びに来たわけやね。それで車座になって酒を飲んで、興がたかまってきて、「小野先生は日本の代表的な詩人だから、一つ自分の詩を歌ってください」と誰かがいった。小野さんあれにはこまった、といっていたな。日本では詩は印刷されて、活字で読者に読んでもらうべきものになっているでしょう。小野さんがどうしたのかは忘れたが、そのうちそのロシヤの詩人が自作を朗詠しはじめたんです。そこらへんのふすまが響くぐらいのどうにもりっぱな声楽だったということです。それから朝鮮の詩人が朗詠した。これも

堂々たる声楽だったそうです。朝鮮人が朝鮮語の詩をうたうのをぼくもいつか聞いたことがありますが、あれはいいものですな。以上は玄人の詩人の場合なんですけど、朝鮮なんかへ行きますと、農民が、多少型式はあるんですけども、田のあぜに酒壺を置いて郷詩などをうたいますな。

赤尾　郷詩ね。

司馬　百姓のじいさんなどがやる。〝自分はもう七十になったが、十六の年にどうこうしとって、それで人生は長いようで短い〟とかいうのを、即興で作って、即興でふしをつけてやります。実に気分が駘蕩とするような節です。なぜ朝鮮のことを言うかというと、われわれと似た言葉だからです。さっきのしなやかさということを頭に置きながら、話を遠道しつつ喋っているのですが。中国語では文法上論理的な、レンガ積みの言葉でしょう。

赤尾　論理的明晰性があります。

司馬　日本語は、てにをはで結んでいって、てにをはっていうニカワでくっつけていって、どこまで続くかわからない。要するに、むちのようにしなやかな言葉ですね。朝鮮語も同じで、言葉のせいかどうかは知りませんが、郷詩などはしなやかです。仲間としちゃ、モンゴル語もそうですね。モンゴルなんていうのは、いまでも、むろん文学の中で詩は第一等に置かれていて、代表的な文学者はほとんど詩人です。詩は一般の人々の間で日常のもの——日本の俳句のように——になっています。興至れば、頭韻、脚韻のついた即興の詩をうたいます。たとえば何か競馬の大会でもあったときに、政府の役人が出るでしょう——日本だって出てくるけど——そういう政府

のえらい人が優勝した馬をほめるのは、自分がその場でつくった詩でほめなきゃいけない。詩がヘタだとばかにされる。

赤尾　なるほど。

司馬　それは教養なんやね。〝お前の耳は錐のように鋭く、お前の脚は何とかのようにしなやかだ〟とか、〝お前のたてがみはどうであり、お前のしっぽはこうだ〟と。そして、〝お前はどこそこに生まれ、だれそれにはぐくまれ、そして、お前は何歳で何キロ走った経験を持っている〟。その詩を聞いている大衆が酔うんです。詩に酔ってゆくにつれてその馬がよりすばらしく見えてくる。われわれと同じ文法を持った他の民族に、ちゃんとまだ詩が生活の中で生きているわけですね。

ところが、われわれの民族の代表的な詩が短歌と俳句であるとしたら、まあ短歌のことはさておくとして、俳句は、はっきりと眼で読み眼から感興をおこすところから出発しているでしょう。つまり、漢字は耳よりも目で見るものですからそういうイメージが、俳句の中の大きな要素を占めたんだろう、そう思いながら、僕はきょう来たんです。ところが途中の車の中でね、必ずしもそうではないかもしれない、と思い直す気にもなった。つまりさっき芭蕉の話が出ましたが、芭蕉の中で私のようなごく散文的な頭にでも残っているいい句というのは、やはり和語ですね。たとえば、「五月雨を集めて早し最上川」。これ全部漢語が入ってませんね。それから「夏草や兵共がゆめの跡」。念のために僕は芭蕉の句集で、この「兵」の場合を見てみたんですが、文字の

置きかた、汚いですね。むしろ口頭で唱えたほうが、ここに五人の人がいるけれども、一つの気分ができて、もうその世界はほんとに、お互い共通の光景ができあがるでしょう。

そうすると、俳句といえども漢語べったりではない。漢語イメージが触媒になっていただけで。……つまり、がんヴィールス説っていうのがあるでしょう。病理解剖したら、どこにもヴィールスがいない。しかしヴィールスっていうのは、ポンとやってきて、生体にがん細胞をつくって、どこかへ行ってしまうわけやな。だから死体にはもういないのであって、立証に非常に困るところらしいんだけども、それに似たものかな。漢語イメージっていうのは俳句形成——少なくとも、蕉風の俳句形成に入ってきたんだろうと、こう思ったりもしてね。何だか今日はおれはよく喋るな。(笑)

赤尾　いや、僕はいまの話に、ほぼ賛成ですよ。たとえば去年、僕は伊勢神宮へ詣でましたでしょう。で、あのときにまず思ったのは、芭蕉のつくった句は、「何の木の花とはしらず句哉」ですね。西行は、「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」だったわけです、伊勢での作品は。で、芭蕉の「何の木の花とはしらず句哉」っていう句、漢語をほとんど残しておりませんね。もう一つ見とどけたのは、芭蕉は僧形で行ったから、いま全国の子供たちが修学旅行で参拝する伊勢神宮の、あそこまでは行けてないわけです。僧形はもっと離れたところで、とどめられたんですね。

司馬　神道では浮屠は汚れとされているから。

赤尾　まあそのことは余談ですが、伊勢神宮の神域の花の匂い、僕はその花の匂いを実際に味わい、そして、この作品は見事な和人の俳句である、と痛感しました。だから、四十五歳の芭蕉というのは、ここらあたりまで、遂に俳句を追い込んでいた、という感じがしましたね。「かたじけなさに涙こぼるる」は、やっぱり和歌ですよ。俳句では、ここまでは出さなくていいわけです。西行をけなすわけじゃないんだけども、芭蕉は、それだけぶん沈黙、抑制していて、してるがゆえにまた俳句である、と僕は思うんですよ。

司馬　なるほどね。そこで、またさっきからの、僕のかかずらわっていることに戻るんだけれど、この漢語と俳句との間ですね。和歌の場合は、印刷されても全部ひらがなでいいわけですね。どういう漢字を二つ三つ使ってある、ということは、文献学的に重大かもしれないけども、全部ひらがなであることが、本来の姿だと思います。

ところが俳句の場合は、「つはもの」は、ひらがなでなくて、兵隊の「兵」と書いてある。「ども」は、共同通信の「共」と書いてある。で、「兵共（へいきょう）」というのは、漢字としての字づらがあまりきれいじゃない、と思うんですけどね。しかしやっぱりそれをきちっと押えておかないとあの句にならないのかしら。たとえば僕が大学入試にそれを書けって言われて、ひらがなばっかりで書くと、減点かしらんと思ったりする。つまり、その芭蕉が使った漢語をちゃんと使っておかないと、俳句という文芸が成立しないのか。芭蕉がそこにおったら、非常に怒るのかね、それとも、もう音だけで、表音文字であるひらがなばかりで書いておいても、芭蕉は、ああそれでいいんだ、

と寛容に言ってくれるのかね、どっちなのか……。

赤尾　たぶん言わないでしょうね。少なくとも八〇%ぐらいは、ちゃんとそのままにしてくれ、というでしょう。神経質ですから。

司馬　そこらへんがやっぱり、目の詩――目で読む詩なんだな。

赤尾　僕が思うには、あの十七音の短い詩型の中に、日本人のもつ詩心を、まとめるわけでしょう。その場合に、ひらがなで全部書かれると、音がつつと流れるけども、物としての裏付けが、すぐ伴ってゆかんところがありますね。「つはもの」と言えば、それは兵隊には違いないんだけれど、しかし、「兵共」という漢字が書いてあることによって、いまおっしゃった視覚的なイメージと、実際の「兵隊たち」という「物群」ですね、そのダブルが、一挙に、同じ瞬間に頭に入ってきます。

ここのところは、やっぱり俳句という短詩型の、一つのウイークポイントである、と芭蕉はおそらく譲らんと思いますね。

司馬　季語に「春光」と言いますわね。（と、季語集をとりあげて）ここに「春光の嬰児の脚を垂らし負ふ　翔」こういう俳句がありますね。……これは、どこの人かな。ああ「馬酔木（あしび）」のほうだな。（笑）どうも、たまたま持っていたのが、秋桜子さんの『季語集』だけど、この句を宙で唱えられると、「しゅんこうの」は私ども俳句に無知な人間にはよくわからない。春郊、春耕、竣工、竣功、いくつかあって、文字で書いて見せてくれないと、わからない。そういうことは、同じ語

族のモンゴルの詩からみると非常に異質な文芸だ、ということになるかしら。

まあ日本語そのものが同音異語の漢語をふんだんに抱えこんでしまっているから、俳句もその弊をまぬがれないといえばそうだけど。そうだ、これはね、何も兜子俳句への批判と違うわけです。(笑)兜子俳句は、一つの結晶体ができるときに、大変な物理化学的な緊張があって、そこで一つの緊張の結実というか、まあ音が鳴るようにして、結晶が誕生するんだと思うんです。それがまあ、その場合に、あらゆる言語をそこに追い込んでいっていいのだと、たたき込んでいいのだ、ということだろうと思うんですが……。だから、文芸論をしているのでなくて、いま俳句の起源論……といっても大げさなものじゃなくて、子供みたいな疑問を、兜子先生に、いろいろこう投げかけているわけです。(笑)

注　兜子俳句の中で、私のような俳句に無縁の者でも愛唱している句は、漢音がすくない。

音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢
数々のものに離れて額の花
山鳥の骨敲きうちし日父ありき

漢語の役割

赤尾　しかし、いまの問題はむつかしいですねえ。僕も日本語の中の、特に俳句表現における困

ったところ——僕の使う言葉で困ったところをふくめて、たとえば「春光」がね、そのまま「竣工」というような言葉と同音、そういう意味で、「困った部分」というのは、なかなか鋭い指摘。ちょっと困ったなあ。(笑)

司馬　鋭いのではなくて、子供の疑問には大人は答えにくい。(笑)もっとも、どの雑誌だったか、外国の文学者たちが対談をしている中に、おもしろい話があったな。イギリスで変人の文章家がおってね、絶対に借用語を使わない。たとえばフランス語からの古い借用語とか、ああいうようなものは使わない。つまり、土語であるアングロサクソン言葉で押しとおす、という、それは何というのかな、ちょっとコッケイ感を帯びた偏狭さですね。言語というのは大いに借用語で成り立っているものですから。ただ、言葉が人の心を打つという、そういうことでの非常に初歩的な段階では、やはり子供のときから使っていたことばでつくりあげるイメージが、一番いいですね。

よく言われる例ですが、「埴生(はにゅう)の宿」というのは、スコットランドか何かの民謡なんでしょうけども、その訳が、われわれの和語だから、僕らは岡山県の山里か、山形県の谷川べりの、百姓屋敷を思いだしますね。だけど埴生の宿をたとえば「簡素な農家」と二つの漢語でやると、知的なはからいが働いて、ああ、これはスコットランドのどこかの景色なんだな、と思って向こうのほうにいってしまう。いきなり心へゆかずに、頭のほうの操作で、拒否するんじゃなくて、区別したり分類したりする。だから、詩は二つの……つまり、どういうのかなあ。ここから向こうへゆくと大分ややこしくなって、子供の発想では追っつかない。だからここまでです、僕の発言は。

（笑）

赤尾　あのねえ、なるべく和語を使って、そして、一番ナイーブいうか、赤子が出てきたような言葉で、感動を与えるいうのは、これはやっぱり理想でしょう。ですが……。

司馬　いや、理想じゃなくて、言葉のイメージのごく初歩――自分がその言葉を吐いて、そして相手の胸に自分と同じ映像を結ばせるんだ、という意味での初歩の段階ですね。

赤尾　もう繰り返しませんけど、漢語が、詩歌文学に入って、そして珍しく十七音の形式が成立して、しかもあれでまず俳句が詩としての要件と付帯条件を備えたものになったわけです。その場合にもう一度むかしにひき戻して万葉集の持っておったような（正岡子規も言っている）、あの「ますらおぶり」の、ああいう言葉を持ち込んでくると、かなり張っている言葉ですから、和語表現の中に緊張感がかなり持続できるけれども、ごくやわらかい和語ばかりもってきますと……。

司馬　つまり、古今、新古今的なものですか、やわらかい、というのは。

赤尾　ええ、近いですね。古今、新古今的な、そればかり使いますと、たるんじゃうんです。この十七音が、たるんじゃって、どこかテンションが欠落する。つまり俳句としてあるべきものを失う、ということがある。

司馬　そやろね。それはそうだと思うんです。だから、俳句の成立の、まあわりあい重要な場所なんだ。俳句というのは、十七文字はタブローなんだから、そんなら、非常に古いかもしれませ

んけど、僕は芸術というのは、たとえば絵画でいうとやっぱり額（タブロー）から離れてはちょっと困ると思っています。

だから、俳句が発光する、つまり漢語を使うわけなんだけど、光を発する……のにはね、十七文字の枠（わく）の中に、その非常に重大なイメージを押し込めるから、発光してくる……光が発してくるわけであって、それは電子と電子がぶつかり合って、熱を発するような作業だと思うんですね。短歌の調べとは違うわけです。短歌の原形的ないのちは、調べだと思いますけども、俳句というのは、やっぱり電子と電子のぶつかり合いの、つまり発熱か発光か、何かだろうと思うんです。僕はまあ俳句論をしているんではなくて、俳句起源論みたいなものを兜子に質問しているわけなんだけど、もう切りがないから、この辺で話題を変えようか。

赤尾　いや。俳句形成に漢語イメージがヴィールスとして入ってきて発光したもうひとつは（これはまだよく僕の頭でまとまらないんですが）、やまとことばで抽象的なことをいいあらわす語根、語彙（ごい）が磨滅したこともあるんじゃないでしょうか。あくまで結果論ですがね。

たとえばイタというやまとことばは、もともと頂上とか極限とかを意味したらしいけれど、それは独立語になって、今日に残っていません。「頂上や殊に野菊の吹かれ居り」という原石鼎（はらせきてい）の句の頂上は、やまとことばならイタダキで、それをそのまま継承してないわけです。やまとことばはどうも漢字による造語にそうした抽象語をゆだねてしまった形跡がつよく、芭蕉は、むしろ直感的にそういう点をかぎつけていたんじゃないか。あなたが俳句は電子と電子のぶつかり合い

（短歌の調べでない）といわれるのは、その電気のボルトを高めるときに、漢語のエネルギーを借りてくるといいときがある。十七音の独立詩という形の俳句は、そのどこかに語根の絶壁のようなものを沈めることが多い。額縁入りですから。そこに「目で読む」詩になったかなり大きな理由があるんじゃないか。けれど、いまの実作者としては、俳句が「目で読む」文芸であるとだけきめてしまってはならない、あわせて詠うという要素も考えねばいけないでしょうね。

それと、少ししゃべりすぎますが、もう一点加えると、いま語っているのは発句ですわね。単独の一句です。しかしかつての芭蕉俳諧には片方に厳としてみごとな連句がありました。正岡子規が発句を非常にやかましく言って、あそこから発句中心の俳句界になってきているわけだけれども、僕はいつでもやや欲張りで叱られるんですが、あの芭蕉連句の持っていた連句の波——何人かの間を漂っていく言葉の転移、ないしはそれの持っている詩の波ですね。あの波をもかかえ込んで、現代俳句の一句は成立しなければいけない、という考え方を持っているんです。

司馬　ほう。

赤尾　だから僕の俳句が従来ぎくしゃくしまして、何を書いたのか、わけわからん、と一方ではつよい批判がありました。けれども子規が発句を強調したのは、あまりにも当時の俳句が堕落しているので、せめて発句だけでも、というあのけなげな精神が叫んだと思う。僕は、そういう大先輩の後をうけたもんだから、連句も巻き込む、その波を巻き込んだ発句でなければ、もう芭蕉でほぼ尽きているんじゃないか、できあがっているじゃないか、という考えがあるんです。

司馬　そうだろうなあ……。それをまあ一つ結論にしておくことにして。（笑）僕はほんとに、散文の世界が少しわかる程度で、詩の世界になると、どうも子供みたいになる。大変、迷惑やろな。

赤尾　いや、いやどういたしまして。（笑）

子規的リアリズム

司馬　散文の世界で、ちょっと僕の質問を聞いてもらいたいんだけどね。明治っていうのは文化大革命ですよね、全然、御破算になったんですから。文章も御破算になってますわね。だからまあ、山田美妙とか、二葉亭四迷とか出てくるんですけど。同時期に徳富蘇峰とか、北村透谷、山路愛山、まあそういうようないろんな文章――文体というほどでなくて――が出てくる。全部手織りなんですよね。それぞれが自分でつくって行ったわけです。大体、共通の文章日本語なら文章日本語が成立したのは、昭和三十年代以後だと、僕は思います。それまでは、新聞記者とか作家とか科学者とか、あるいは政論家とか評論家とか、みんな寄ってたかってね、自前の手織りでやってきた。泉鏡花の文章と、夏目漱石の文章と、これは同時代の同じ日本語だろうかと思うぐらいでしょう。泉鏡花はいいが、しかしあの文章では、ロッキード問題は論じられない。（笑）しかし夏目漱石の文章は、恋愛でも外交でも論じられるしルポルタージュでもやれるという、いわば万能性をもっているという点であの時代にはきわめてめずらしい。そういう文章を手づくりで

完成したところに、漱石の大きさの一つがあると思います。しかし子規もそうですね。子規も、みなが共用していい——いろんなことを表現できる——文章日本語をつくり上げたと思うんですが、そういう点を子規はあまり認めてもらっていない。

そこで、この話をちょっと向こうのほうに飛ばして言いますとね、漱石はあれだけの文章日本語の早い時期における完成という仕事をしたのに、その後なかなか続かないんですよ。続かなくて、昭和期になると——新感覚派の文章っていうのは、非常に晦渋ですね。あれはあれで手織りだし、手織り時代が続いているのです。まあ片岡鉄兵さんなんかが、新感覚派宣言文も書いているでしょう。見られた文章じゃないような悪文ですよ。つまり鉄兵さんの文章も鏡花と同じで万能の機能を持ってないわけで、つまりはせっかく漱石が完成させたものからまた後退したわけでしょう。というよりも、漱石がつくり上げた文章日本語が、まだ共通のものになってなかった、ということでもあると思います。非常に紆余曲折しつつ、大体明治で江戸期の文章が解体してから共通の文章日本語ができあがるのは、やはり百年かかるのかな。共通というのは、だれが書いても似た、たとえばここにおるだれが文章書いても、大体アメリカの大学の日本語科の試験問題になりうる、というような文章のことです。それができあがるのが、戦後か、もっと厳密にいえば昭和三十年代以後だと思うのですけど、それについては、まあもっといろいろのことを喋らなきゃいけないので、まあそういうことかと、とりあえずしておいてください。

ところでその面での一完成者である子規がね、あれは漱石の文章よりも非常に漢語が少ないで

しょう。

赤尾　そう、そう。

司馬　そして、漱石の文章よりもしなやかで、表現の万能性においては漱石の文章と遜色がない。蘇峰や愛山の文章では愚痴は書けないが、子規の文章では十分にそれが表現できる。たとえば、日常の、庭に陽が射して、鶏頭が……。

赤尾　……十四、五本もありぬべし。

司馬　そこはまあ、俳句につくっちゃうけども、その種のことはかれの散文でも十分に表現できるし、しているわけでしょう。

赤尾　書いています。

司馬　それからまた彼は、あまり政論なんかは論じなかったでしょうけども、それも論じることができると思うんですね、あの文章で。ただ、語尾の文語形にわずかに固執しているけどね、だけど文語意識は少なくて、きわめて平易な文章をつくりあげた。まあ僕は子規の業績の一つは散文だと思うんですけどね。なぜそうかっていうと、ここから向こうは俳句になってくるんだけど……。

　結局、彼はリアリズムに固執した人だから、リアリズムっていうのは、万人共有のものですからね。海のヒトデは星形をしているとか、これはもう確かにそうであるし、それから、石っころは多少丸いとか、トンボの羽根は透きとおっているとか、ということは万人共通のものですから、

しぜんとその散文まで、わかりやすい散文ができ上がってゆくという……リアリズムの精神というのは、評論でなく、実際に地でそれをやった人というのは、少ないと思うんです。子規は、その最大の一人じゃないか、と思いますね。

赤尾　それは僕も感じますよ。で、たまたま漢語との関係が出ましたが、子規が明治二十三年、二十三歳で文科大学国文学科に入学したときに、中国語について書いたものがあります。中国語は、平上去入の四声ありますね。で、子規は、「私はどっちかというと平声のほうが声が穏やかなり」、つまりすきだと書いています。ということから思うとね、中国語の四声の中で平声を、若い彼が生理的に好んだというのは、これはやっぱり、日本的リアリズムに通じるんじゃないか、と思うんですよ。

司馬　おもしろいね。伊予方言は上方語圏に入るでしょう。上方語は平声ですね。関東、東北弁は四声の中で……？

赤尾　あれは上か入です。

司馬　入声が多いな。松山なんていうのは、僕が使っている上方弁よりもひどい平声やな。平声ではどうも非常に矯激な、たけだけしい政治論ができないですな。

赤尾　青年子規が政治家志望を放棄したのとつながりますね。（笑）

司馬　あるいは、いまから池田屋に討ち入りするんだ、というような異常なことはできないんです。その、討ち入りしてもいいけれども、何人生き残って帰れるか、とかね、そういう議論にな

ってしまうわけです。ということは、リアリズム……赤尾君が言うように物とか事とかをとらえやすい姿勢というか、すくなくともそういう心理的姿勢がつくり出しやすいわけよね。もっとも子規が、おれは平声だ、と言ったのは、何だかこう象徴的な言い方なんでしょう。

赤尾　そうです。中国語はややこしいと言ってます。(笑)子規は明治十八年、十八歳のときに、「空気を抽象して」という題で、「今日の宇宙にして空気なき時は空中は果して何色を呈するや(但し太陽の光線を送る者は他にありて其者は無色透明と仮定して)」とも書いていますね。抽象ということについては、子規には、これぐらいのものしか、ちょっといま見つかりません。抽象という観念を捨てているんですね。

司馬　何て言うかなあ、実相観入という言葉ですかね。それから、近代に入ると心理とか、イデオロギーで、ものの本質を貫くような体系を、われわれは持つことができたけれども、実際は、その前に厳乎としたリアリズムを持った時期がなければ、ちょっと具合がわるいというものでしょう。いきなり真実のほうに行っては、じつに危うい。仮に事実と真実という言葉を、二つこう置くと、事実は千個並べても真実にはゆかない。だけど、千個並べないと、千個並べていくことによって、不意に真実が出てくるわけでしょう。これは、きわめて不意にだけど。

赤尾　そうです。不意に訪れる。

司馬　だけど、その事実のほうを、千個も並べることがごく可能なことなのに、めんどくさいから三つほど並べておいて、それで、いきなり真実をそこへぶち込んだって、爆発しますわね。そ

のことは、だから変な具合になる。

子規はその真実にまでゆくのは、自分の死後だれかがやればいいと思っていたのでしょう。それは清（虚子）さんがやれとか、これは秉五郎（碧梧桐）がやれとか、いうようなことがあって、かれらが学問（短詩型についての）をやってくれることにあれだけ執着したのはそれだと思います。子規のリアリズムはまことに平声で、友だちの家に上がったら、かまちの高さは何尺で板敷の材は杉であるとか、床の間に野の花が活けてある、と言わずに、露草が活けてある、と具体的にちゃんと言う。廊下を三十歩ゆくと、小座敷がある、その面積も書く、というような、子規の弟子たちが継承したリアリズムは、寸法リアリズムのみに矮小化したきらいはあるけれども、ともかくも大変なものだと思います。

日本で、リアリズムというものを実際にやって、多分にその行者のようにやって行ったのはこのグループしかないでしょう。そんなのあるかしら、ほかに。敗戦後はずいぶん状況が変わりましたけど、敗戦までの間、ほんとうのリアリズムの徒が多くいたかどうか。いなかったから、太平洋戦争みたいなものをやるわけでしょう。それから、昭和初年の左翼運動もぼしゃるわけでしょう。結局、リアリズムをきちっとしてないから、左翼もぼしゃるし、太平洋戦争もやる、ということになるわけでしょう。そして実際に、極端に言うと、いまでも子規的リアリズムがきちっと発展しなかったから——飛躍するようですけども——公害問題が起こるようなことになったりします。（笑）

『子規全集』のこと

赤尾　そこで伺いたいんですが、『子規全集』刊行の、ぬやま・ひろしさんの功績というのは……。

司馬　ぬやまさんという人は、どうも僕はこの世で一番好きな人の一人ということになるかな。仙台の高等学校を退学して、いわゆる革命運動をやって、牢屋に入れられて、十二年間、敗戦まで出てこなかった人でしょう。高等学校のときに、子規の死後養子の正岡忠三郎氏がいたんです。忠三郎というのは豪宕不羈な人で、そのくせすみずみまで面倒見のいい人で、近所の酒屋などで家をきいたりすると「あっ、忠さんの家ですか」と、それだけで昂奮している。昭和初年、ぬやまさんがそういう世界を走り回っているときに、たまたま忠三郎さんは何年もかかって大学にいる、銀座かどっかの街角でぬやまさんのお兄さんが忠三郎さんに出遭って、「弟も困ったもんだ」と言ったら、「いいじゃないですか、一人出家スレバ九族天ニ生クと言うじゃありませんか」。出家も共産主義者も同じようなものだとしているあたり、やっぱり子規の養子という面目がありますね。（笑）血縁的には母方のつながりで、子規のおいになって、加藤恒忠という外交官の息子さんです。

この人たちが若いころ、ぬやまさんが根岸の子規庵に行ってたんやな。若いからそれが子規庵だとも気づかずに、忠三郎さんがそこにいるから行っていたわけで、格子戸あけて、遊びに引き

出そうとしたらね、奥のほうで、子規のお母さんの八重さんだったか、妹さんの律さんだったかが、「忠三郎さん、勉強しなさいよ」という声が聞こえるんだって……。（笑）その後、時が経ってぬやまさんが独房にいる。お母さんに頼んで、「万葉集」と、子規全集を入れてもらって、はじめてあれが子規庵かと、（笑）他人の僕には測りがたいことだけど、ぬやまさんの十二年間を支えたのはこの二つだということらしいな。

赤尾　珍奇な人ですね。

司馬　僕が忠三郎氏を知りえたのは『坂の上の雲』という小説を書く前に子規のことを調べていた。そのころです。その後、忠三郎氏が、体を悪くされて——六十代のはじめかな——それで、子規全集が、戦前、アルス版と改造社版が出ているんですけど、どちらも不完全なんです。なものですから、忠三郎氏の生涯の仕事として、子規全集を出してやりたい、っていうのが、ぬやまさんの動機です。友情でもあるが、自分を十二年間支えてくれた文学であるということでしょう。文学という以上に子規の人間かな。

　というようなことですから、ある日、僕に出すべきじゃないかと言われるんです。しかし二人で出すったって、どちらも素人（しろうと）でしょう。造本するのも販売するのも、とても素人じゃできないです。やっぱり玄人の会社へ任さなけりゃいけない、というので、一、二話をしてみたんです。しかし持って行った出版社に断られた。よく考えてみますと、断られるはずかな。子規全集が出ても、必ずそれを買うという、固定の層というか需要家の組織がないんです。短歌はアララギ派

に、俳句はホトトギスに取られていますね。だから、高浜虚子先生の全集なら買うけれども……（笑）その向こうの、もとのお師匠さんとは、回線が切れているわけでしょう。極端にいうと虚子俳壇の成立には、子規を前面に出すことは邪魔だった、という見方もできるかもしれない。

ですから子規というのは、単に文芸史上に単独の個人で存在しているだけなんです。だから断られたんだと思うけど、そうしているうちに、講談社が引き受けてくれたんです。当初、売れるかしらと思って講談社に悪かったなと思ったけど、まったく杞憂でした。僕がやったのはそこまでであって、そのあと大岡昇平氏、正岡忠三郎氏、ぬやま・ひろし氏が、実際の綿密な監修作業をされているし、それ以上に編集の、愛媛大学の和田茂樹氏とか蒲池文雄氏、久保田正文氏、服部嘉香氏（進行中に逝去）が大変です。それに担当の編集者が大変ですね。

担当者の代表が講談社の松井勲氏です。あの人とずいぶん以前から知っているんですが、凝り屋のようには見えなかったな。ところがとんでもない鬼のような人でした。のめり込んで、いろんな校訂、そして進行の仕事だけでなくて……僕はびっくりしたけども、俳句の世界っていうのは、実にイヤなとこがあるんですね。子規のある生原稿を抱えていたら、なかなか出さないとか、そういうのがあるらしいんですね。僕はまあ、そういうことにまったく無知だったのですが、松井氏はそれを排除して、どぶ掃除みたいにやってゆく過程で、肝臓がぼろぼろになってしまいましてね。それでも仕事を中止しないんです。非常に大きな事業をやるときの、奈落で舞台を回している人間の凄みっていうのを、彼について感じたんだけど……。まあ、病気になってしまって

いるからいまぬけぬけとほめることができるんです。（註・松井翠氏は一九七六年七月に逝去）

もっとも、子規全集っていうのは、だれでもちょっと取りつかれるものがありますよ。正岡子規その人に何事かを感じ入ってしまう、ということでもありますけど。

赤尾　そういうものがたしかにありますね。

司馬　子規というのは、死期を感じてて、自分の生涯をそのまま三十何年なら三十何年と、こう見切ってしまった凄さがあるでしょう。そして、自分の生涯でやれることは半ばで、そのあとをやってくれるのは誰々だというふうに、後継者というものに異常に執着して……。

赤尾　後継者ね、僕が子規にとてもやさしさを感じるのは、高浜虚子にこう言ってますね。虚子の調子が悪くて、仕事がうまくゆかないときに、「虚子君、君の仕事が最近あまりよくないのは、食べ物が悪いからだ。あなたは牛を食べなさい」と。牛肉です。「牛がなければ豚でもよろしい。豚がなければ鶏でもよろしい。鶏がなければ魚にてもよろしい。坐っていて頭を使う人は、少量の食べ物からたくさんの滋養をとるべし。そのためには牛肉がもっともよいのである」と忠告している。明治という時代に、牛肉が一番よろしい、ということを盛んに言った子規ね、日記をずっと読んでみると刺し身を食べたことを非常にくわしく書いていて、このときに、子規の一か月分の出費が、家賃六円五十銭、それに対して刺し身六円十五銭です。だから、家賃とおんなしぐらいの額を、刺し身代に使っている。それによって自分の短い生涯のエネルギーを増してやろう、ということを思ってたんだ。僕はわりあい食好きなほうですから、このことにも興味あるんです。

食事のことは克明に書いています。食べ物のことまで忠告する親身な先生というのは、そうたくさんいないですよ。

子規のたおやめぶり、芭蕉のますらおぶり

司馬　とにかく、自分の短い生涯で背負い切れんようなテーマを、自分はやっているんだ、という場合にね、お前頼むから後継者になってくれ、といやがるのを追っかけ回してでも、ねじ伏せてでも、後継者にさせようとする、というのが大体そういう人の――僕は大変な人間というのは、たいていそうだろうと思います。大変の大を抜いても、変な人間というのはそんなものかもしれない。（笑）大きなテーマを背負い込んでる、っていうのはやっぱり変な人じゃないでしょうか。背負い込んでしまっている、という感じの。吉田松陰もそうでしょう。

赤尾　ええ。

司馬　まあ彼は刑死するんですけども、どうも若死を予感しているような雰囲気がありますね。それで結局、弟子にのしかかるように、自分の持ってる電池でもって弟子のお腹の中にも充電させようとするんですね。子規も松陰も、教育者といえば真の意味でそうですけど、せっぱ詰まっているでしょう、教育者というのは職業でもあるでしょうが、かれらの場合はせっぱ詰まってしまっている。

両人の間に共通点が多いですね。僕は別に吉田松陰が好きというわけじゃないんです。ただ松陰の紀行文が非常に好きなんです。あんなにイデオロギーの好きな人が、旅に出てあんなに現実をちゃんと把握している、というのは大変なことだと思います。だから、文章が晦渋でない、非常に平易なんですよ。よく考えてみると、正岡子規の散文と、実に酷似していますね。つき合わしたら、だれでも納得してくれると思う。

で、これは比較文学にもならないんですよね。気質と、それにプラス何かが似ていると、こうなるのかしらと思うのと、それからしなやかさ、というのがさっき出ましたね。しなやかさというのは日本の文化現象の一つの特徴だと思うんですけども、日本人の精神像の特徴というのも、そういうしなやかさよりも、もっと端的にいってたおやめぶりみたいなものがあるでしょう。

赤尾　たしかにそれがある。

司馬　何もそれは女々(めめ)しいという意味じゃなくて。女々しくもあります。王朝文学なんか見てたら、いい男が泣いてばっかりいるからね。(笑)さっき志の話が出たが、中国の士大夫の詩のますらおぶりと違ってね。

赤尾　杜甫あたりの、あの一生を生きてゆくとほうもない執着力……。

司馬　そうですね。あれとはちょっとまた違いますけども。執着力はやはり日本人でもあった人があるんですが、要するに吉田松陰もたおやめぶりの人ですわね。日本人はむしろたおやめぶりであるときに、かえって節操が強くてね、行蔵が非常に雄々しくなる、という変なとこがありま

すでしょう。

赤尾　そうですね。

司馬　子規も決して男性的……つまり、セックスアピールがある感じじゃない、そういう共通点もありますね。あるんですけども、――これはまあ、散文の話なんですがね。散文の話なんですけど、僕は子規の俳句に近づこうとして、なかなかこれ喋ってても近づけないんだけど……。

赤尾　たおやめぶりとおっしゃったが、こういう歌があります。これは、長塚節（たかし）が子規に栗をくれたのですね。かれは食べ物が好きだから……。「下総の節はよき子これの子は虫食ひの栗をわれにくれし子」と詠んだ。この虫食いというのは、怒っているのじゃないです。君のくれた栗はおいしかったが、虫食いの栗もまじっていた、ということを手紙に書いている。こういうところはいささかたおやめぶり……。

司馬　なのか、リアリズムなのか。たおやめぶりというのは、具体的にどうだ、というんじゃなくって、そういう感じをいっているわけで、ここに突如持ちだすのは妙だけど、芭蕉は、分類して言えばますらおの文芸でしょう。

赤尾　そう、構えていますね。

司馬　正岡子規の俳句っていうのは、どっか、しなやか過ぎるとこがありますね。だからそういう意味でたおやめぶりだと。

赤尾　結局子規の句で、よりいい句と言えば、「いくたびも雪の深さを尋ねけり」とか、「鶏頭の

十四五本もありぬべし」とかね。そこらでしょう、私の見るところでは。「いくたびも雪の深さを尋ねけり」の句、これなんか、いまおっしゃったことと、ぴったり合いますね。

司馬　ふむ。つまりね、芭蕉が持ってるますらおぶりってのは、芭蕉の性格にあると思うんですけど。数は少ないが、彼は漢籍をずいぶん読んでいる感じでしょう。漢文とか中国語っていうのは、まあ赤尾君は専門家だけども、レンガを積んだような、レンガを一つ外したら、意味が通じんようになるわけやからね。そこのおもしろさに、ぞっこん参ったとこあります。で、このレンガ一つ外したらだめになる、そういう意味での論理性というのは、中国語そのものがもつ論理性でしょう。日本語との違いですね。日本語とは「いまから銀座へゆき」までわからない、「ます」のか、「ません」のか。

だから、さっき言ったように非常にしなやかなものを表現するのには適しているんですね、言語そのものが。ところが芭蕉はね、そこを打ち切って、漢文的なレンガ積みの論理性というものを、自分の詩的緊張の中に、組み入れたんじゃないんでしょうか。

赤尾　入れましたね、テンションとして……。

司馬　子規の場合、漢詩にはわりあい若いころからつき合っているわけでしょう。当時の、つまり末期の江戸的教養が、子規あたりが下限になっているわけですから、子規が青年時代に漢詩がつくれたのは、まああたりまえであるとして、だけどあまり好きではないわけです。作りはするけれども。忠三郎氏のお父さんの加藤恒忠（拓川）が外国へ行くときに、松山の連中が東京で集

まって、送別の詩なんてつくっている。それが、最近忠三郎さんの家から出てきたんですけど、和歌でも俳句でもなくて、送別の詩は漢詩ですな。普通の初学者程度の漢詩のように思ったが、専門家に見てもらわないとわからない。ともかく子規のよさはその頃は（二十前後でしょうか）なかなか出てない。だから、子規はむしろ万葉の言葉のおもしろさ——万葉人の表現のおもしろさ、万葉の言葉がとらえてゆくその自然の美しさ、というものによって、やはり日本語を発見したんだろうと思いますね。

赤尾　それを裏返すと、万葉のますらおぶり。

司馬　それは、新古今との対比でのますらおぶりではあるけども、それよりも要するにテニヲハのついた膠着語としての、日本語の特徴とその可能性を知ったというようなこと。

赤尾　そう、もっと大きい把握。

司馬　言語で言えば、よく言語学者が、中国語は、英語は、孤立語だと言いますね。日本語や朝鮮語やモンゴル語は、膠着語であると言いますね。この膠着語の可能性というもの、ポエジーの可能性っていうのを、万葉集で、彼は何か自分自身を見きわめているみたいな感じがありますよね、古今集ではなくて。古今集は一つの文化概念である。だから、もうこれだけのものだとして、これに眼をつぶったとこがありますでしょう。万葉はひろびろと言語表現の世界があるから、もう一度、明治の短詩型改革のときに、これに西洋の美学を触媒として使って、それで子規的文芸ができ上がりますでしょう。そこはやはり日本語的なしなやかさが残ってて、子規の、たとえば

俳句に。で、そのあたりが芭蕉との違いになるだろうと。芭蕉は、万葉なんかあまり知らないわけで……。

赤尾　それと明治という時代人が持っていた、かっこづきの、いい意味でのナショナリズムがあるんじゃないですか。

司馬　まあそれはありますね。しかし、ナショナリズムなんてのは、漢語と一緒に出てくるんです。たとえば幕末の志士が非常に悲憤慷慨（ひふんこうがい）するときに、俳句はよみませんよ。

赤尾　短歌はよみましたね。

司馬　主流は漢詩ですね。

赤尾　辞世はたいてい短歌ですね。

司馬　辞世も、大体あらかじめ漢詩と和歌は用意してます。まあ和歌は定型になりますから、ですけど、たいていの志士はそれぞれに用意して、二つ三つ字句を入れればいいようにしてある。（笑）どうも漢詩の先生から、書いてもらってあるらしい感じもありますね。どうもそうだと僕はまあ思うんですけど、こんな人が、っていうのが、わりあいいい漢詩――辞世をよむんですよ。当時は、そういう慣例があったような感じがします。それは別として、悲憤慷慨するときは、やっぱり漢詩でしょう。それで、明治のナショナリズム、それから、悪しきあの昭和期の、右翼的な、あるいは軍人が喜びそうな、いろんな文章ありますね。あれは、きわめて漢語的でしょう。

赤尾　そうですね。

司馬　だから、明治以後におこったナショナリズムは、必ずしもね、和語でおこってない。それを和語にしたとこに、子規の偉大さがあるんじゃないか。

赤尾　なるほど。すばらしい着眼ですよ。

空海と子規——師承について

司馬　子規はよくやったなあという感じがしますね。子規の場合、大変心情としてナショナリズムのつよい所があります。強いのに、和語で——それも国学者風のものでなく——自分の詩情を定着させた、ということが凄いんじゃないかなあ。

赤尾　みごとな日本人てこと……。

司馬　このあたりをうまくちゃんと言えればいいんだけどな。どうも僕は頭の中が白っぽくて。そうだ、さっきの、芭蕉は万葉集なんか知らないんだ、といってしまったけど、何も芭蕉をけなしているんじゃないんです。子規にとってはそうじゃなかったが、芭蕉にとって、きらきらしたきらびやかなものは、中国の詩だったんですね。あるいは杜甫だった。

だから、たとえば旅というものを、一つの詩にし、文化としての型を創造したというのも……平安時代でもあれでしょう、白河の関へ行くということが、一つの大きな旅であって、だれもあんまり行かないのに、そのイメージをつくる。これは中国の詩から習ったわけですね。旅はきわ

めてロマンチックなものであると。何もロマンチックなことないんですね。平安時代の旅なんてのは、もう宿屋もほとんどありませんし、実際にどうなんでしょうね。京都から白河の関まで、よほどの、中程度の貴族でも、命あって途中の山賊、途中の宿のなさ、それから山道はいいんですけど、海岸道になると崖になって、磯づたいどころか、崖にしがみついて身を移してゆかなきゃいけないとこがありますよね。むろん、そういうとこを避けて、東山道を行ったのかもしれませんが、何にしても平安時代に漂泊の旅をするというのは、まあ不可能に近い。それでもなお平安の歌人たちが詩に仕上げたっていうのは、やっぱり漢詩——漢詩的なものからの移入でしょう。それが芭蕉の中ではもう実に……江戸期の旅行ブームのときですから、ちょうどその後に弥次喜多なんか「東海道中膝栗毛」が旅行案内書として出てくるぐらいで、もう芭蕉のころは日本のどこへ行ってもいいわけです。だから、芭蕉においては現実に旅ができるということと、旅のロマンチシズムというものとが一つになったということがあります。これもまたよく考えてみると、漢詩からの影響ですね。

ところが、子規の時代で漢詩というのは古いものの代表のようになってしまっている。もっとも漢詩は案外、明治期が一番——徳川時代よりも——いい漢詩人が出ているという逆な現象もあります。これはまた別な理由として見るべきものですが。

赤尾　ええ。日本人の漢詩としては、漱石ら明治期の漢詩とそれ以前、つまり五山文学のあたりはいいですね。

司馬　ところが英学時代ですから、やっぱりもう古くなっているというイメージがあって、子規は漢詩離れをしなきゃいけない、ということが真先にあったんでしょう。それにしてもおもしろいですね。和語の中で世界を定着させたということ。つまり、短詩型を古い民族遺産を洗い流すことによって新しくさせたということ……。

赤尾　飛躍したことをいいますけど、司馬さんが話しておられる途中でちょっと思いだしたのは、結局芭蕉が、漢詩の持っている一つの世界、それに幻惑されたことは事実でしょうね。で、僕はそういう点で、空海とちょっと関連させまして……（時代、年齢が違いますけど）。芭蕉は、五十歳で「閉関の説」を書いています。これは門弟の間のいざこざとか、老いの疲れとか、まあいろいろあったにしても、つまり、自分から門を閉める、ってことね。司馬さんが書かれた『空海の風景』に、随分いろんなことを教えられましたが、高雄山寺を密教の道場にしますね。

　空海が密教の道場にしたのは、それも閉鎖方針でしょうか。しかし、その閉鎖と、芭蕉の「閉関の説」とは、僕が勝手に想像するところ、空海の場合はそこで一つの自分の考える密教を打ち立ててゆく野心がありますが、芭蕉の閉関というのは……俳諧の先生だもの、閉門したら門弟は会えぬわけでしょう。あれは、芭蕉が自分の俳句観を門弟がよく吸収してくれなくて、わずらわしさに疲れきったんじゃないか、という気がするんです。

司馬　ああ、そうですか。

赤尾　そこがまた契機になって自身の境地を深めるという、芭蕉のまた一つの句風の変化にもな

っている……。

司馬　はあ。

赤尾　ともかくも、漢文学いうものは日本人にとって、大変ありがたいものであるけども、逆説的に言うと、何か苦しいところに追い込まれることでもありますね。漢語離れしてから後、真に芭蕉の俳諧が完成したように、僕は思うんですがね。（ちょっと極論かもしれませんが……）

司馬　いやいや、そうでしょう。そういうことは、そういう時期がなかったらおかしいですからね。

空海の真言密教というのはね、左道密教ともいうべきラマ教もそういう点は同じことなんですけど、自分を拝めってことなんです。師匠である自分を拝め、つまり自分が宇宙の普遍性なんです。普遍性になってしまう、だから師匠になる。ならなければ師匠になれないわけですから。だから、だれを拝むよりも、普遍性を拝もうとしたら、その師匠を拝むことでしょう。ラマ教の場合もそうなんです。密教はみなそうなんでしょうね。まあ空海の密教は、ラマ教とはあまりニュアンスが似てませんけども、今いったあたりの論理性――師匠を拝めという――はぴしゃっとしているわけやね。だから、みんな遍照金剛って、いまでも四国遍路して、お大師さん拝むわけやな。（笑）最澄は自分を拝まさない。いまでも人々が叡山に行っても最澄を拝まないけども、高野山へ行ってお大師さんを拝む、まあそうなるんだけど。これは、日本の学問と芸術を、きわめて悪くしたことでもある。

学問も芸術も、みんな空海以後、それにまねて師承のものになったといえます。空海は宗教だけでなくて、学芸の徒でもあるでしょう。だから、たとえば仏師の親方でもある。仏さん彫るための、いろんな取り決め——儀軌——がありますね。取り決めは全部長安から持ち帰ったものですから、彼自身が指導しなければならない。自分自身が彫らなくても仏師にそれを指示して、十一面観音はこういう相をなさっているんだと、足はこうだと、持ち物はこうだとか、何々の寸法はこうだ、左腕の角度はこうだって決まっている。実際彼は仏師の親方でもあったし、仏画の親方でもあったでしょう。そういうことから考えると、空海以後、仏師は仏師で、彫刻家は彫刻家、画家は画家で、自立しますわね。

赤尾　体系創始者なんですね。

司馬　で、彼等が自立して弟子を持ちますね。それはもう師承です、みんな。先生と違ったことをすると、破門されたりするでしょう。日本の明治以後の学問でも、いまだに似たようなとこあります。これは先生が立てた説だが、どうも間違いだとわかっても、異を立てない。避けて、分野を別にして、別のテーマで弟子はやる。結局は日本画の画壇なんてのも、他の日本画の弟子と話することもいけない、という雰囲気が京都あたりでは最近までありました。画壇のそれには最初はびっくりして、これは何だろうと思った。日本人の持っている矮小さ——これは相当なものです——かしらと思ったりしましたが、要するにそういうようにして日本の学芸の伝統がきたんですね。

これは真言密教以外に、そういうことは言わないんです。奈良仏教は、弟子はひたすら師匠の言うとおりにする、というそんなバカなことはないように思います。もっと口やかましいものだったようです。ところが、真言密教という一種の完全体系っていうのは、体系に行を含んでますしね。行を経なければ普遍性になれないんですから。だから、そういう師匠の呼吸、口まねまでしなきゃいけないみたいな雰囲気があるでしょう。

子規の場合はそういうことはないですね。彼はむしろ、「俳句は虚子のほうがうまいわ」と思ってるとこあるわけです。ただ短詩型を美学的にちゃんとするというかれの生涯の主題は、自分一代ではとてもやりとげられないので、学問の出来る弟子たち（虚子や碧梧桐）に、お前さんたち、いろんなものを集めてそれに新しい美学を注入して体系づけてくれ、ということを懸命に頼んでいる。もっとも虚子も碧梧桐も、学者より創作者になりたくて逃げてしまったけど。要するに、子規の場合は師承じゃないんです。子規というのは、すかっとした、何て言うか明治の市民社会の芽生えのころのもっともいい芽をもった市民だと思いますけれどね。

磁場としての座

赤尾　僕はとりわけ空海の書に非常に興味がありますね。書くための道具までつくる、ということね。あの狸の毛の筆までつくって、嵯峨帝——当時皇太子ですか、献上したという……大した

ことです。

司馬　そうやなあ。鳥海青児さんなんかは、キャンバスはむろん自分で張るんですけども、額縁まで彫刻して、自分でつくりましたですね。そういう基準でもって本物、あるいは非本物ということは言えないですけどね、画家っていうのはときどきそんなことをする人がいて、そんな人には何となく僕らは、何かこう確かさとか、まあ言ってみれば偉いという感じがします。空海が狸の毛で筆までつくるっていうのは、こういう書を書こう、と思うときに、毛の揃え方のバランスとか、いろいろ変えてやるでしょう。そこまでやらないと、やっぱり書家とは言えないんじゃないでしょうか。道具をまずつくらないと……。

赤尾　そう思います。飛白の書まで入れて空海の書は六体でしょう。僕の好きなのは、もちろん空海を先例とするんですけど、あとかなり気に入っているのは池大雅です。池大雅も飛白だけは書かなかったけど、五体は書きました。僕は大雅の漢字が特に好きなんですけど、ただしかし、日本人はときどき妙なことを言うんですねえ、犬養木堂が、「池大雅が出て日本の書道は崩れた」というようなことを言った。

司馬　うんうん。

赤尾　それは木堂個人の見識であって、大雅が出て日本の書はちっとも崩れてない。むしろ従来の書のパターン化した常識がいけないので、書というものは、別のいい方をすれば「散」でしょう。「散である」というその考え方が、芸術的に正しいと思います。それを空海は六体、自分の

散ずるように、気分のおもむくままに書いたわけですわね。書はそうあるべきだと、つねづね考えてるんです。

司馬　うんうん。

赤尾　ただ日常形式で書く書類その他は、池大雅だって人の求めで書いたものは、そのころの「お家流」で書いていますけどね。空海だって、書く相手によって変えたんでしょう。

司馬　そのようですね。ときどき一つの手紙の中に、いろんな書体がまじり込んでいるような感じがしますね。

赤尾　そのようですね。

司馬　これは感じであって、はっきりしたものじゃありませんけど、空海のちょっとしたメリハリ癖でしょうな。（笑）最澄に出す手紙が、どうもそんな感じがする。

赤尾　最澄にねえ。最澄の文字は大体女字でしょう。

司馬　女字です。どちらかというと僕は普通の常人ですから、文字は最澄のほうが好きですな。あれがやはり実用的で、よくわかって、そして、こう座右に置いといてもいやな感じがしなくて、圧迫感もない。空海の書は、そのへんにあったら圧迫感を感じて、もう掛けおろして、どこかへ、だれかにあげてしまいたいような感じがするんですよ。そういう、書の中にこもっている魔性みたいなもの、あるいは人格がこもり過ぎているというか、あるいは、あまりにも美でありすぎるとか、……まあ、空海の書などは僕に論じられない。僕は非常に普通の、たとえば理想としての

書は、活字――明朝活字ですから、どうも話にならない。(笑)

赤尾　明朝活字と言えば、会津八一さんは、あれから書を始めたんでしたね。

司馬　明朝活字をけいこしたそうですね。それも新聞の……。まあそれはいいとして、最澄と空海の違い、いうのはそこでしょうね。最澄には芸術性というのは才能としてあまりない。それから仮説をたてる能力がないですね。そういう、ひらめきいうものが。だから、最澄って人は、非常にまるい秀才だったんでしょうな。空海はもうほんとにどうしようもない天才で、あんまりそばにいてもらいたくない……。(笑)寄るとこう辟易(へきえき)するような感じ。もう、ひれ伏すか、逃げてゆくか、どっちかしかない感じです。書でもそうですね。

赤尾　これは、僕の方から司馬先生に一度たずねたいと思っていたのですがね。俳句は「座」の文学であり、「連衆の文学」といわれ、それがまた世界でも珍しいかけがえのない特色ですが、どうでしょう。蕉門の「座」を見ると、芭蕉という師がその座に加わることによって、その座の人たちの作がぐっとレベルアップしている。「七部集」を読むと、しきりにそう思うんですが……。

司馬　人間というものは、人間が好きでしょう。(笑)とくに精神がえきえきとして光っているような人間に出くわすと、どうしてもその人の磁場の中に月に一度でも入っていたい気がする。自分まで磁気を帯びてきて、意外な面を出してしまう。短歌もそうですが、俳句はその契機を作ってくれるわけで、それを介してその人のそばに寄ってゆくことができる。すぐれた俳人で個人作

家として終始される人もむろんなければなりませんが、師匠は磁場を作れる人であることが望ましいですな。芭蕉も子規も磁場を作りえた人で、弟子たちはもうその中にいてその座にいるときだけでも磁気を帯びている自分がうれしくて仕様がない。

短詩型というのはサロン芸術だといわれますが、僕もそうだと思います。しかし人格もしくは精神像として磁場を作れない人は、やはり師匠になってはいけませんな。其角なども芭蕉の磁場の中で磁気を帯びた人で、芭蕉の死後は磁気が去っている。そういう面が短詩型の世界には——よくわからんが——あるのと違うかしら。

赤尾　おっしゃるとおりです。いまの俳句の世界には、その〝座〟の指導者の一部に月並的退廃も出てきているようで、人ごとならず、心せねばならないと思います。(笑)

(「俳句」昭和五十一年五月号)

稲作文化と言葉

松原正毅
司馬遼太郎

揚子江下流域における稲作

司馬　この前ご一緒した中国の旅、実に気楽でしたね。

松原　はい。私は初めてだったんですが、司馬さんはこれまでに三回も行かれたでしょう、いつもあんなふうでしたか。もてなしのキメの細かさなどは……。

司馬　文明の特質というか、妙な国ですなあ。こんどは自費でゆこうというので、私ども、単なる観光客でしょう。むこうの受け入れも、招待の場合とちがって旅行社になる。それでも親切さの質はすこしも変わらないですね。政策ではなく文化だということを感じざるをえませんね。中国には、紀元前から人をもてなすということに礼儀の中心がありますでしょう。その上、こんにちの場合、中国には国を見てもらうというのが外交になっていますね。ああいうことを外交としてやっている国はないんじゃないでしょうか。

松原　こんどは蘇州から盧山、南昌そして広州と主に江南の地を訪ねたわけですが、江西省、浙江省あたりの地域で、ふるくから稲作が行われていたことが、だんだんはっきりしてきましたね。私たちの行った江蘇省の太湖近辺にも稲作の遺跡があります。最近は浙江省余姚県の河姆渡で、紀元前五千年前後といわれるこれまで一番大きい稲作の遺跡が発掘されてますし……。

司馬　そうすると、四、五千年前の中国を俯瞰的に見ますと、粟を中心とした農耕文化、つまり黄河流域の文化とは別に、紀元前、それもはるかな古代、淮河、揚子江付近にどうも違う文化が展開していた。違う言葉をしゃべり、稲を生産している民族がいたと考えられますね。

松原　中国の学者は、河姆渡遺跡の発掘で、世界で初めて稲作技術を成立させたのは、揚子江の下流地域だと主張しています。しかし、稲作の起源を江南地域とするには、栽培植物学的に説明つかない難点が多すぎるんです。最近、稲作の起源地を、アッサムから雲南にかけての山地とする仮説も出ています。これは京大の渡部忠世さんの説（渡部忠世『稲の道』NHKブックス、一九七七年）ですが……。

司馬　ややこしいですね、稲作の問題は。日本に稲を持ってやって来たのはどこの連中か、となると要するに海の向こうからとしか言いようがないでしょう。とにかく、その連中が日本列島に新しい歴史を起こしたわけですね。縄文から弥生時代を迎え、そしていまのわれわれの歴史に連続するんですが……。しかし、イネという二音節の言葉は、華南の仙頭方言にあるといいますね。普通語はタオですけれども。またコメという言葉も華南のどこかに、クメ、クミという音で存在しているといいますね。

松原　イネにつながる語頭にn音のくる言葉は、中国のふるい文献資料にもでています。たとえば、「説文」や「斉民要術」に記載されている秔は、ニまたはネと読まれ、脱粒性のつよい、野生にちかい稲、といわれています。古代朝鮮でも、稲をニとよんでいました。稲をn音系の言葉

でよぶのは、このほかインドシナ半島のモン・クメール語系の人びとです。タイ語系では、カウとかガウになります。東南アジア島嶼部を中心にみられるマラヨ・ポリネシア語系のなかでは、ブラスとかパライ系の言葉が稲に対してもちいられています。ブラスは、サンスクリットのヴリヒと関係があるのではないかという説もあります。稲をめぐる言葉の系統については、まだじゅうぶんに整理された定説はでていないようですね。

稲作に関する一つの仮説である渡部説でいくと、アッサム、雲南のインド北西部に原産地があって、それが一度山に登って、一つはメコンデルタ、メナムデルタ、サルウイン川沿いに東南アジア大陸部に流れ、一つは、中国大陸の揚子江沿いに流れていく。その大きな流れの一つが日本まで達したのではないか。特にそれはジャポニカという日本人が食べている粒の小さい米の流れなんです。もう一つのインディカという系統は、インドの海岸部から、ずっと海回りで東南アジアから中国のほうに入ってきたのではないかとされています。

いまのところ、稲作の流れと、稲に対する言葉の系統を重ねあわせる手だてはないのですが、ごく大ざっぱないい方をすると、ジャポニカ型にはn音系などの言葉が、インディカ型にはブラス系などの言葉が、それぞれ対応してひろまっていった、という説も考えられるかもしれません。歴史的な展開のなかで、栽培品種がいれかわり、言葉もさまざまに変化しているために、はっきりとした姿はつかみにくいのですが……。

一つの問題として、モチ種のことがあります。

司馬　そのモチというのは、われわれが言う完成品の餅ではなくて、糯米のことですね。

松原　はい。

司馬　モチ米を白い餅にするという日本とそっくりの習慣は、ミャオ（苗族）にありますね。

松原　ええ。今言った雲南山地から中国の揚子江沿岸部の地域には、ずっとあったと思います。餅の場合、ややこしいのは、それ以前に、米ではなしにイモで作る餅があることです。イモをつぶして、一度発酵させる場合が多いんですが、それを餅みたいに作る。現在の分布で言いますと、太平洋、ボルネオとか、東南アジアの島嶼部に、ずっと広がっています。餅を作る文化は、ヒマラヤから江南山地をへて日本にまで及ぶ照葉樹林帯から熱帯にかけて、ふるくからあったんではないでしょうか。照葉樹林帯では、キビ、アワ、コウリャン、ハトムギなどの雑穀のモチ種が大量に栽培化されています。ほかの地域では、このようなモチ種はほとんどみられませんね。

司馬　イモの餅は食べてうまいですか。

松原　特にうまいというものではないですね。私、ボルネオで食べたことがありますが……。

司馬　口の中の感触は、正月の餅と同じですか。

松原　あれほど粘っこくはないですけれども、よく似た感触が口のなかに残ります。ですから味覚の原点としてそういうものがあって、稲作地帯の東南アジアから江南中国にかけて栽培されていた稲の一番古い品種は、モチ米ではなかったかという説が有力になってきています。もともとモチ米であったのが、だんだんウルチ米に変わってきたというのです。

タイなどで日干し煉瓦の中のモミ跡を調べると、古い建物で使っている煉瓦ほどモチ米が出てきます。それが十二、三世紀ごろになると、どんどんウルチ米に変わっています。この間、私たちが行った江蘇省の村なんかでも、話を聞いてみますと、以前はモチ米を大分作っていたけれども、今は少なくなっていると言ってました。漢代では、稲という字はすべてモチ米を意味していたようです。

司馬　そうしますと、われわれの所に入ってきた最初はモチ米かも分からんですね。今の餅の形にして食べていたのかも知れない。

松原　初めから餅で食べていたかどうか、そこは確証がないわけですが、食べ方の変遷から言って、初めは強飯というか、蒸し器で作るおこわで、それがだんだんと今みたいにやわらかい食べ方、ひめいい（姫飯、糒糅、軟飯）になってきたことは、確実だろうと思います。日常的に餅を食っていたかどうかは分かりませんが、恐らくある特別な日、お祭りとか、そういうときに食べるものではないかと思います。イモの餅にしても、毎日食べるわけではないんです。

司馬　要するにハレの日に食べるわけですね。

松原　そうです。ハレの食物なんです。

司馬　まだ続いているわれわれの習慣とあまり変わらないわけですね。

松原　比率は昔のほうが、ひょっとすれば多かったかもしれません。

司馬　私の母親は百姓家の娘でしたから、餅というだけで気が晴れると言います。今日は餅をつ

いてるとなったら、きっといい日に違いないと思うわけです。全国各地に〝ウルチ〟という言葉がありますが、私らは子供のころ、それをワルと聞いていました。つまり餅で、普通の米でウルチを入れるときに、大和の人は〝ウルウ〟と言い、在所によってはなまってワルと発音します。平素、自分が食べている米なのに、非常に古い言葉で特別な名前をつけているわけです。あれはいつも不思議に思うんです。島原の人に聞きますと、同じですね。必ず二種類作る。大和も、餅をつくときには、必ず二種類作ります。あれは、何かの痕跡でしょうね。

松原　中国の江南で聞いた話でもそうでしたが、お餅を作るのに、特別に赤米のモチ米を本当に少しだけ植えて、作っているらしいです。やはりそれは、ハレの日に使うらしい。赤いお餅です。

司馬　対馬がそうですね。私は現物は見なかったんですが、対馬では北端に近い千俵蒔山のふもとの「延喜式」の古社が神社として赤米を作っていて、神饌と言うんですか、神様の食べ物として上げます。壱岐にはないんです。対馬の人が書いた本で、『赤米の対馬』という題の本を私は持っていますが、壱岐とは違うんだと、昂然とした感じが、その記述の中にあります。

松原　赤米の記録でもっとも古い例は、「正倉院文書」尾張国正税帳天平六年の条にあります。尾張から朝廷の大炊寮に赤米二百五十九石をおさめた、と記録されています。もっとも、この赤米は酒の原料としてもちいられていますが、柳田国男説によると、赤米の飯が、小豆をいれて炊く赤飯に変わったということですね。赤が神聖な意味をもつ色とされたわけです。

司馬　在日朝鮮人で八十ぐらいのおじいさん――慶尚北道の高霊の人ですが――子供のころ、ど

うしても赤米がまじるんだといっていました。日本に売る場合、赤米が入ると検査にとおらない。そのために赤米の苗は懸命に抜きすてたといいます。赤米は強いからどうしてもモミにまじって発芽してしまう。商品経済以前――つまりあの悪しき日韓合併以前――朝鮮では平気で赤米まじりのごはんをたべていたというんです。それと、対馬の赤米への神聖意識や本土――松原さんがおっしゃる「赤飯に変わってゆく」ということとなにかつながりがありそうな感じがしないでもない。もっとも対馬の場合、私の素人考えでは、稲作の伝来当時からの習慣ではなくて、鹿の骨、亀の甲の亀卜、鹿卜が伝わってきたときに、一緒にセットになって伝わってきたのかもしれませんね。神社が、皆卜部の神社ですから……。

松原　亀卜、鹿卜とも、中国大陸では、紀元前二千年から三千年前の竜山文化のなかで、主に山東省から遼東半島にかけての地域に始まります。河南省にも広がります。日本では、鹿卜が発見されるのは、古いもので弥生時代の中期ごろ……。

司馬　三世紀ぐらいですね。

松原　二世紀から紀元前後という年代です。伊豆半島とか、山陰でも出ています。それがいつごろ伝わってきたかということは、確定できません。それと、果たして稲の文化と鹿卜が重なっていたかどうか、少しずれていた可能性もあります。

司馬　イネの伝来より太占（鹿卜、亀卜）は新しいんじゃないでしょうか。「古事記」に、大和の何々の神様の前で鹿の肩骨を焼いてどうこうしたという記事が出てきますが、それが非常に新

鮮な記述なんです。いかにもサイエンスをやってる雰囲気なんですね。しかも奈良朝の卜部の出身地というのが、対馬と壱岐と伊豆ですね。伊豆はちょっと分かりませんが、対馬と壱岐から卜部を呼んでいるというのは、新しい思想を導入した人たちが、当然その辺にいるわけですから……。

松原　全体的な流れとしては、朝鮮半島を含めた北のほうから、鹿卜、亀卜の部分は来てるかもしれません。

司馬　鹿卜、亀卜というのは、東アジアの古代世界での、普通の天を祭って占う習慣で、漢民族だけが独占したものではなくて、いわゆる遊牧民、匈奴もやっていたわけですから、そういうものではなかったんでしょうか。

松原　東アジア世界では、相当広まったやり方だったと思います。

司馬　揚子江以南もしくは華南では、あまりやっていなかったわけですね。

松原　揚子江以南では、そんなに密度は高くないですね。それに文字が刻まれて、記録文書になってくるということになると、河南の殷王朝がその中心地になってくるわけです。他の地域では、あまり出てきません。

司馬　殷が、土俗の占いを非常に精密化した感じですね。それはお米とは関係なしに成立しているわけですね。

松原　恐らくお米とは、ちょっと別の系統で成立しているものだと思います。

司馬　私もそうだと思います。殷で亀卜が完成するとき、私の今のイメージの中には、半乾燥地帯を遊牧し、もしくは狩猟している人々がいるんです。その人たちもまた殷よりもあるいは古くから鹿卜をやっていた。卜によってその背後の遙かな大風景として、天の意志を問うわけですから、どうしても天の意識が必要なわけです。天と地しかない所で暮らしているのですから、天に意志があると思い込むのは当然です。天の意識というのは、稲と一緒に入ってくる系列の中にはあまりありませんね。

松原　恐らく天という概念自身は、稲作をやってる連中の中では芽生えなかったと思います。

司馬　雨が降るとか、日照りだとかいうようなことはあっても、観念としての天はなかったろうと思いますね。

松原　殷で使われている天の場合、遊牧民の連中がテングリとか、テンゲレとかと言ってる概念とは、恐らく違うんではないかと思います。というのは、天という言葉自身は、文字としては非常に例が少ないんです。

司馬　甲骨文字ですね。

松原　はい。天に近い言葉としてよく出てくるのは、「帝」という字です。神様のヒエラルヒーの中では、帝は一番上なんです。それの使いとしてその下に例えば、風神、方神――方角の神ですが――などがおって、そのほかに土神、岳神、河神、祖先神とかが、全部並列して祭られているわけです。帝の場合だけ、非常に重要な決定をするとき、例えばどこかから攻めてきた叛乱し

よった連中を征伐に行くのに、うまくいくだろうかとか、そういうときの卜占の対象として使います。そして帝という字は、大阪の澪標の印みたいなという字なんですが、帝として祭るとか、禘という祭の名として出てきます。一説では帝という文字の形は、神様のすわる座ではないかと言われています。別説では、帝を祭るときには、火をたいて、その上に犠牲を置いてにおいを天に昇らせるので、帝は、その薪の形をあらわしたのではないかという説もあります。しかし、いずれにしても帝には絶対的な天神という感じではないんです、少なくとも殷の時代では。

司馬　帝は、殷の時代でも、tiでしょうね。

松原　t音でしょうね。

司馬　天は、ティエン——tienですね。

松原　帝には、上帝などのように上に修飾語がつくこともあります。殷の連中が住んでいる所を商と言いますが、そこを天邑商と呼んでいます。天の用例の一つですが、大きな国といった感じの表現のようです。

ツングースは日本語の一源流

司馬　中央アジアから東北アジアにかけての乾燥地帯、漢民族が言うところの塞外の民が、草原と天しかない空間に住んでいて、天をテングリと言っています。テングリは、モンゴル語では、

十三世紀ぐらいしかさかのぼれない、資料としては。だけど、昔からテングリと言っていたと私は思います。

松原　トルコ語でもテングリですね。それも時代的にあまりさかのぼれません。せいぜい、八世紀の突厥碑文までさかのぼるくらいです。

司馬　もし資料的なことを配慮せずにさかのぼるとしたら、中国語の天とテングリとは、むしろテングリのほうが先にあって、殷の連中もしくは殷を支えた田舎の連中が、北方の連中が言ってるんだから……と、もしくは彼ら自身も北方から来たのかも分からないので、グリを取ってテンになったのかしらと。これは割合言う人がおりますね。しかし、この間、西田龍雄さんに聞くと、だんだん話がややこしくなって、私も混乱してしまいましたが、別のものだったろうというのが、彼の意見のようです。

　一つ困ったのは、私は今に日本語のことを思っているんですが、日本語の一源流を、うんと無理して、つまり天に竿竹を届かせるような無理な仕方をしますと、いわゆる旧満州のツングースを日本語の一派として考えることができますね。そのツングースも古くはさかのぼれないんですが、残念なことにテングリとは言わないんです。朝鮮語、朝鮮ヤマト言葉にも、テングリに相応するような語はないようです。対馬まで来ましても、天とは言っていなかったでしょう。対馬では最初に鹿卜、次に亀卜を習うわけですが、彼らが、技術上の必要があって、観念の天を作って、占って、天の意志を聞く。観念の天を思わざるを得ない状況が、初めてできてきたわけです。そ

のとき、当時の日本語としてアメかアマと言っていた。

彼らの卜部神話で作り上げた神々は、ほとんど天津神です、「古事記」に出てくるのは。天御中主命とか、高霊神とか、全部天上に住んでいる神々で、国津神ではないんです。それを「古事記」の作者は、天皇の先祖と称する神々に、記述の上で習合させているのではないか。「古事記」なんかは、真っ先に天津神が出てきますが、われわれ庶民に関係がある天津神というのはないわけです、対馬以外では。われわれが平素お参りしているのは、出雲神社であったり、賀茂神社であったり、八坂神社であったりします。せいぜい室町末期から庶民が行くようになった伊勢神宮だけが天津神です。あれは多分に伊勢神宮の宣伝で、信仰形態ができたんだろうと思います。極めて人工的なにおいのする神ですね、天照大御神というのは。そうすると、天津神たちというのは、ちょっと飛躍をさせてもらうと、卜部の神々だったんだろうという想像ができるわけです。

ということは、稲作を持ってきた人たちが、われわれの先祖の一派で、これは南から来ておるので、天の思想が観念化されていなかった。雨が降るか、曇りというようにしか思っていなかった。やがてその後に、別な系列として観念的な天がやってきて、具象化されて卜部という技術としてやってくるわけです。そういう形で、日本神話の一つのスタイル、むしろ柱ができてしまう。人工的にできた柱でしょうが、そんな感じが、最近対馬に行ってしみじみとしてしまったんです。

松原　モンゴルにしても、ツングースにしても、もともと持っているシャーマニズム的な信仰では、天を何層かに分けます。七層に分けたり、十二層に分けたり、三層に分けたりしますが、そ

の一番上の上天をテングリと言うか、天の観念みたいなものとしてとらえている。シャーマンの連中は、ある術を身に帯びることによって、神の世界を駆けのぼっては、見てきたことを報告して、予言したり、病気を治したりしていたわけです。ですから、中国において観念的に純粋化された天というものが出てくるのには、何かもう一つ媒介項があったかもしれないなと思うんです。モンゴルなどの天の観念が直接的にもちこまれたのではなくて、何かもう一つ仕掛けが、観念として成立させるのにはいるんではないか。

司馬　例えば、こしらえ話として、その仮説を作るとしたら……。

松原　それがよく分からないんですが、特に日本に入ってきているものを考えたときには……。例えば天命という言葉ですね。ああいう言葉は、周代から相当たくさん出てきます。中国の中の一つのイデオロギーとして……。それが純粋化されて出てくるのは、恐らく老荘の世界ではないかと思います。殷の連中が滅ぼされた後、宋の国が作られて、そこに遺民が入り、老荘の哲学みたいなものが、そこから出てくる。もともとシャーマン的なものをやっていた人々の系譜から、あの連中が出てきたのではないか。その中で天の観念化ということが起こったのではないか。これは一つの仮説ですが……。老荘の連中がやっていたかなり大きな仕事は、行き倒れや非業（ひごう）の死を遂げた人々の鎮魂をして回ることです。「荘子」の一番初めに出てくる「北冥に魚あり。其の名を鯤という。……化して鳥となるとき其の名を鵬という」という文句は、殷の甲骨文に出てくる帝を中心とした方神、風神をオリジンとしてできてきているのではないか。そういうのをベー

スにしながら、あの連中が天の観念化をしていったのではないか。そこで使われている言葉に「真知」というのがありますが、この「真」という言葉は、行き倒れの人か、行き倒れの死にざまを指すもので、それまでもずっと使われていた言葉らしい。ただそれまでは、文献的にはそういう縁起の悪い言葉は使わないということで、文書の中では使われなかったのが、老荘の連中が出てきて、「大道は真知なり」でしたか、真知とか、真人とかをさかんに使い出した。

司馬　真人とか真知とかというのは、のちの道教ではやかましいですね。

松原　そうです。それを盛んに言いだした。彼らの中で、居直った形でのイデオロギー化が起こってきているんではないか。

司馬　つまり文献的には、殷が滅びるのは紂王（ちゅう）の代で、滅ぼしたのは周の武王。あのころは、現代中国風の言い方で言うと、奴隷社会ですね。孔子で言うと、聖皇の世界になりますが、聖なる世界ですから祭祀を絶やさない。殷を滅ぼしても、完全に滅ぼすとたたるわけです。ですから殷の子孫に宋の国を作らせた。殷人の全員が集まれるほどの田畑はない。殷は、自分では商と言ってました。これは伝説ですが、彼らは散らばってアキナイをした。だから物を売る人のことを商人というようになったと。田畑がないから、マーチャントにならざるを得ない。宋に集まったのは、田地をもたない空身（からみ）の連中が多かったかもしれない。その空身の連中は何かと言ったら、祭祀集団だろうということから、その祭祀集団は老荘のにおいを持った連中で、それが純化されて、書物の「荘子」を生むに至るというのが、松原さんの今のお話ですね。

松原　一つの道筋としては、孔子なんかが、やはり天命を知るとかいう言葉を使っているように、天の観念化を儒教の連中がおこなっているだろうし、もう一つの道筋としては、道教の連中がそれをおこなっているんではないかと思います。儒教では、それが大きな帝国の理念とぴったり結びつくわけですが、それによって天ということが概念化されて、礼と並んで一つの文明の骨格みたいになっていくんじゃないか。そうすると、日本に入ってきているものには、これらの流れが幾分入っているんではないかということです。

司馬　今のお話を聞いて、私の頭の中で二つか三つのことが明滅したんですが、具象的なほうから言いますと、行き倒れを神聖視するというのは日本にもありますね。

松原　ええ、あります。

司馬　日本では、幕末ぐらいになりますと、ただ単なる行き倒れではなくて、恨みをのんで——行き倒れもその点おなじですが——死んだ人、残念だと言って死んだ人という残念信仰というのが幕末のぎりぎりまであります。例えば大阪の中之島に長州の蔵屋敷があって、長州征伐の前に、幕府がそれを取り壊す。残った侍が「残念だ」と言って死んだ。柳の木の下で死んだから、その柳を神聖視して、お参りする人が絶えなかったんで、奉行所がそれを禁じた。また大阪周辺で言いますと、幕末に非常にはやって、奉行所が何度も禁止するんですが、河内の若江堤村で戦死した木村重成のお墓参りが熱狂的に続くんです。それが夜参りでして、お城の東の玉造あたりから、何キロほどの道が人でふさがるぐらいの殺到ぶりであったといわれます。

松原　江戸期ですか。

司馬　江戸期の末期です。つまり開国したためにインフレになって暮らしにくくなる。世直しが叫ばれるようになることと重なるわけです。世直しの神は何だと言ったら、残念で死んだ人だと。最初は木村重成で、その次は長州の侍になるというような形で、土俗としてはずっと残っていくんですが、それがさっきお話しになった殷の時代の話と信仰思想として重なるかどうかは別として……。

それともう一つ頭に浮かんだのは、古代日本が文字を入れて制度化する。オオキミに天皇という不思議な漢語をかぶせるのは、道教の影響でしょうね。道教はもうすでにそのころには、天理教のように教団化されていた。あれは三国時代ぐらいに教団化されますね。極めて新興宗教になってしまっている。老荘の観念哲学的純粋性がややなくなって、幸福をもたらす信仰集団になってくる。そのさらに後に日本は、中国文明を入れることによって開明化する。そのときに天皇とつける。これは道教の言葉だというのを最初に言いだすのは、福永光司さんです。これは非常な卓見です。

そして道教では、禅宗で言えば悟りを開いた人を真人と言いますね。それも日本は道教とは関係なしに導入してくる。姓（かばね）の最上級の尊称としてつかう。宗教性も哲学性もなしで。……どういうつもりで真人と言ったのか、とにかく同じ字をあてたというのは大変面白い。なぜ面白いかというと、奈良朝日本は、意識して道教を入れなかったんです。しかし儒教の本を入れるときの荷

造りのほこりにまみれて入ってくる。どうしても入ってきますね。そういうところからできたのか。それとも陰陽師のグループが道教の本を読んでいて、彼らがそういう造語をしたのか知りませんが、ああいう形でわれわれのところに入っていますね。

日本語の源流探究は徒労？

松原　日本でも、柿本人麻呂一族というのは鎮魂集団というか、大体老荘の連中と似たようなことをやって、鎮魂して回っているんですね。もともとというか、そういうイデオロギー化する以前の原形みたいなものは、日本人も共有していたかもしれません。ただ、さきほどの天皇などの例のようにはっきりした形となってあらわれてくるのには、中国文明の影響がどこかにあったのではないかと思えます。というのは、「漢委奴国王」という志賀島の金印は紀元五七年、女王卑弥呼が魏に使いするのは二三七年、それから倭の五王の四〇〇年代まで、営々と中国へ行っては、帰ってきているわけです。その数が全部でどれくらいになるかはつかめないとしても、必ずそのときは、中国の人が来て書いているんだろうと思いますが、漢文で書いた奉書を持っていってるはずですね。

司馬　書式がととのっていないと、向こうは許しませんからね。

松原　そうすると、万葉仮名ができる推古朝くらい、六世紀後半くらいまで、五百年以上にわた

っています。楽浪郡への使いなどまで入れたら、もっとになるかもしれませんが、少なくとも五百年間以上、営々と行っては漢籍を持って帰り、漢文を習っている連中が、上層部には相当たまっていたのではないでしょうか。その後、空海みたいな天才が出てきますが、ああいう天才を生む土壌というものは、相当根深いものではなかったかと思います。

それともう一つの問題は、万葉仮名自身の推移です。初めは、たしか推古朝のときには一音を一字にあててやっていたけれども、だんだんと、人麻呂の歌なんかですと、相当漢文的な語法を……。

司馬　そうですね。漢文の語法を入れてますね。

松原　例えば、「ひむかしの　野に炎(かぎろひ)の　立つみえて　かへりみすれば　月かたぶきぬ」のかえりみすれば反所見、月かたぶきぬは、月西渡と書いてありますね。漢文そのものではないけれども、相当漢字を使いこなしていますね。そういう技法が人麻呂のときにはできているわけです。

司馬　相当古い年代までさかのぼれるわけですね。

松原　古くまでさかのぼれるだろうと思いますが、文献的には、そういうふうに漢文を自由にあやつることができるのは、推古朝が終わって以降らしいです。特に漢の鏡をまねして日本で作った仿製鏡なんかを見ますと、字がひっくり返っていたり、横になっていたりして、きちっとは読めていなかったことが分かるんです。ですから、相当時間がかかって読みこなせるようになった

と思うんです。

司馬　もともと自生していたかどうかは別として、稲と一緒に竹も入ってくる。すくなくともタケという言葉は中国語なんです。華南の中国語です。ｔｉｋですが、日本語は、母音を最後につけないと成立しないんでティケ、タケとなるわけです。これは漢字の導入以前、それもはるかな以前でしょうから、古代は測り知れぬものがありそうですね。ところで、稲と竹は植物としては似たようなものだそうです。

松原　そうらしいですね。

司馬　だから気候条件その他で、大体稲のあるところには竹がある。竹でもってニッパハウスを作るというようなことがあり得たわけですね。周りに水田もしくは陸稲があるという揚子江以南の雰囲気が、そのまま九州に入り得る感じもありますね。

松原　日本の物で、非常に日本的と言われている竹、漆、絹、茶、納豆、豆腐とか、そういうセットが、中尾佐助さんなんかが主唱している照葉樹林文化というか、江南の地を含めて、雲南までの華南の山地にずっと共通して見られます。稲作よりもう一つ古い、前の段階に、これらは日本へ流れこんできたのではないか、という仮説がだされています。

司馬　絹だって、キヌという日本語の成立はいつかというのは、竹よりもあいまいですが、初めはｋｅｎでしょうが、後ろに母音をつけないといけないので、ｋｅｎｕ、ｋｉｎｕになるわけでしょうね。ともかくも竹が漢字文化を受け入れる以前に成立していた言語だというところが、何

ともいえず奇妙な感じがしますね。豆腐、納豆などはもう奈良朝に入ってからだと思いますが……。

松原　漆なんかですと、縄文末期に、青森の是川遺跡から出ます。あんな北のほうまで籃胎漆器という編んだかごの上に漆をかける技法が行ってるわけですが、入ってきたのがいつかということはよくわからないんです。恐らく相当古くから、山住みを中心とした所で、そういう技術がセットになって入ってきているのではないかと想像しているわけです。日本へ流れこむ文化の波は、恐らく何波もあったんではないか。一回だけではないですね。

司馬　例えば日本語の原流はどこかというのは、むだみたいなところがありますね。

松原　わからないですねえ。

司馬　これぱかりは知的エネルギーの浪費みたいなところがありますが、やはり私どもこれを使っている以上は考えざるを得ない。どこの民族でも、ヨーロッパの民族だって、非常に古い時代は、単音節ぐらいで名詞ができ上がっているんですか。

松原　さあ、それは……。

司馬　それは難しいですか。

松原　やはり言語の構造によって違うんではないかと思うんです。中国語なんかは、はっきりと単音節で一語、書き文字になったときには、一字一音を表す、もとはそういう形であったろう、といわれてます。甲骨文字なんかですと、複合語は大変少ない。現代語の中国語になると、一字

で一音、一意味を表す言葉は大変少なくなって、複合語になっていますね。だから、中国語、チベット・ビルマ語などを含むシノ・チベッタン語系の言語では、歴史的に一字一音の時代があり得たかもしれないと思います。アルタイ語のような膠着語とか、インド・ヨーロッパ語系の屈折語では、一字一音では済まないんではないですか。

司馬　モンゴル語の場合は、「元朝秘史」にさかのぼるしかしようがない。あそこが上限ですが、言葉が長いですね。トルコ語も長いでしょう。ところが日本語は、メ、ミミ、ハナ、カオ、テ、アシ、ケ……これはほぼ古代と変わっていませんね。こんな短い言葉を言ってたのは、非常に雑な空想をしますと、中国の山岳地方の少数民族がそうだったんではないかなと思うんです。

中国の低地では、漢民族がいて農業をやっていた。漢民族も、単音節で、しかも特徴は、多分にオノマトペ、擬音から出ていることですね。鳥は、われわれの漢音で言うと何となくチョウと書いているみたいな感じなんです。けれども、非常に子音が多く、子音でものを表す。同じ単音節でも、子音が中心になっているのと、われわれの古代の単音節は母音が中心になっている。中心という言葉は変ですが、母音の響きで、感想及び認識をするということですから、やはりどこかにもとがあるとしたら、中国の少数民族の所に訪ねていかなければしようがないみたいな感じが、大ざっぱな空想としてあります。

松原　先ほど言いました中尾説の照葉樹林文化というのは、まさしく中国の少数民族が住んでいる地域になるわけです。それで、西田龍雄さんなんかの説ですと、チベット・ビルマ語系の言語

が日本語の基礎を形成しているのではないかということですね。

司馬　そうですね、西田さんは、さっきの天＝アメ、アマは、ビルマ語では、たしかモとか何とか言うんだとかおっしゃっていました。ビルマ語は、言葉の感覚としても、非常に母音の多い言葉で、聞いてますと、日本の古代語を聞いているような感じがないでもないですね。

松原　可能性としては、そういう流れと、タイ・カダイ語系、シノ・チベッタン語系と、それから南島語と言いますか、マラヨ・ポリネシア語系の言語を、日本語の祖語の候補にあげることができるでしょう。母音終わりということで言いますと、マラヨ・ポリネシア語系の言語とのつながりも無視するわけにはいきませんね。

それともう一つ、さっきから話に出ていますアルタイ語系の言語と日本語との関係をまったく考慮にいれないわけにはいきません。古代日本語で考えてみたときには母音調和的なものがありますし、語順の問題もありますし……。

司馬　母音調和は橋本進吉さんが発見したんですね。ちょっと例が少ないようですが。

松原　ええ、少ないです。

司馬　トルコ語やモンゴル語がやたらと母音調和するのに比べると、古代日本語は頻度が薄いですね。それからおっしゃった語順、文法はアルタイ語系から借りてますね、確かにわれわれの文法は……。

松原　私はモンゴル語はやっていませんが、トルコ語は、世界の言語の中で日本人に近づきやす

い言語の一つだと思います。

司馬　私もモンゴル語科の学生だったときに、これは頭のいいやつらなら、二週間でできるんじゃないかと思いました。文法を習う必要がないんです。持ってきて下さいの、「て」の使い方も、言葉を代えれば、そのままの文法でいけるんです。それから言語生理という言葉はありませんけれども、わざわざここで言語生理という言葉を使うとしたら、モンゴル語、ツングース語、朝鮮語とヤマト言葉としての日本語と似ているのは、ラリルレロから始まらないことですね。トルコ語もそうでしょう。

松原　そうです。トルコ語のラ行の言葉は、ほとんど外来語です。

司馬　ラッパとか、ロウソクというのは、漢語もしくはヨーロッパ語で、ヤマト言葉としてはないんです。もしそれを発見されたら、一億円の賞金を出すと言ってもいいぐらい、あり得ないわけです。ラリルレロから言葉を、関西風に言うと、よう始めないというのは何だろうと、例えば幕末に軍艦がやってきて、ロシアの船だというのが言えなくて、庶民レベルではオロシャと、オを付けなくてはいけない。モンゴル語も、ロシアをオロスと、オを付けています。モンゴル語は、現在でもロシア語からの借用語はわずかですから、なかなかラリルレロから始めません。トルコ語も、田舎へ行くと、ほとんどオロスに近いでしょ。

松原　トルコ語では、フランス語からの借用語であるルスを使いますが、方言によっては、ウルスときこえることもあります。

司馬　そのくせ、朝鮮語もモンゴル語も語尾に子音が頻繁に来るんですが、日本語はそうではない。私ども、最後に子音が来るとお手上げですね。英語を習うとき、皆これでだめになる。中国語を習うときも、これでだめになる。

松原　トルコ語で、日本人がお手上げなのは、接尾辞ですね。日本語の場合、私が持ツ、彼が持ツ、アナタが持ツと、持ツは変化しないけれども、トルコ語の場合は、人称に対応して持ツの部分が全部変化するわけです。あれが、日本人には一番難しいようです。

司馬　それは難しい。それと、繰り返し言いますけれども、子音の発音がうまく言えない。真ん中に二つ三つ来る子音というのは、モンゴル語にも、トルコ語にもあるはずですが……。

松原　ありますね。

司馬　朝鮮語にもありますが、日本人にはそれができない。そうすると、日本語との関係で、北方言語が遠くなってしまう。ポリネシアとかいう言葉をわざわざ用いなくても、南という雰囲気の言葉が、ベースとしては、縄文時代からあったんではないかと。

松原　そう考えるのが自然かもしれませんが、そこのところで、どういうふうにミックスすれば、こういう日本語みたいになるのかというと、そこがよくわからない。

司馬　言語生理で言いますと、アクセントが言語生理の中に入るかどうかは別として、子音がうまく言えないのは、特に関西弁の系統の人……。松原さんも伊予の育ちで、上方語圏ですね。私も上方語圏に属していますが、関東の人を見るときに、うまく子音が言えてるなと思う。例えば、

クスリ屋と言うkの発音が奥のほうでやっている。私らはkuスリ屋とuをはっきりさせています。東京の人は、kのすぐ後にsが付いてksriというに近い。

そうしますと、関東地方には、子音を平気で発音できていた連中が上代にいたと思うんです。というのは、「日本書紀」の記述で対応するんですが、百済（くだら）が滅びる以前から関東に入植させていますし、百済が滅んだら大量に入植させています。やがては関東八平氏とか、源平藤橘を名乗り出すんですが……。高松塚前後に、筋目の人は奈良盆地に置いて、役人か何かにさせているけれども、そうでない大量に来た人たちは、当時関東はフロンティアでしたから、その開拓に向けたわけです。これは朝鮮半島から来たとか、来ないとかいう、今の法務省の感覚でしゃべってはだめなんです。古代では行き来は自由なんですから……。

とにかく関東地方に、子音がうまくしゃべれる連中がたくさん来ていたんだなと。東京の人が比較的うまく子音を言えるのは、その残映かなと思ったわけです。私ら関西人は、それに極めて強い劣等感を持っていまして、しまいには開き直って、われわれのほうが縄文の正統だと思うところがあるわけです。（笑）

松原　それがほんまに縄文であるかどうかは、またわからない。（笑）

司馬　そう、わからない。

儒教が整理した〝骨の思想〟

松原　中国の山地から来てるかもしれません。

司馬　照葉樹方式でゆくと、そうなる。とにかく南方のにおいのする言語は、むしろ上方のほうにあるんではないか。上方弁でも、近畿地方とその周縁ということで言いますと、母音が多い言葉は南海道、和歌山から四国にかけての、つまり南海道の言葉です。逆にそれが京・大阪に反映していたかもしれません。室町時代ぐらいに大混乱期があって、知識人が大変な規模でミックスする時期です。特に京都を中心にして……。阿波の人間が、三好氏ですね、三好氏の以前は細川氏。いずれも阿波を中心とした勢力です。かれらが、室町末期にはほぼ京都を占領していましたから……。だから室町京都人は阿波人だと、私は見ているんです。南海道の言葉を上方人はしゃべっているらしい。

これからは、多分に空想と現実とが入りまじりますが、南海道というのは、若衆宿の世界なんです。関東にはないんですね。若衆宿というのは、やはり南を考えないと成立できない。関東がはっきりとわれわれの視野の中に出てくるのは平安末期で、殊に武士が出てきますが、父系社会ですね。非常に父権があって、北方のアルタイ語族の風習、父系絶対主義みたいな、もしくは父権絶対主義みたいなところがある。上方以西は、若衆宿を核にして人間ができ上がっていく。つ

まり生まれもするというところですから、母系もしくは母権のにおいが濃い。これは規律的に言うとだらしない。

松原　基本的には双系的なところなんです。だからどちらにもあまり重点を置かない。

司馬　頼朝が天下を取りましたら、九州に御家人が一杯行きまして、いきなり地頭になっていく。その後に九州に出てくる大名みたいなものは、関東から行ったのが多いんです。鹿児島なんかでは、勝手に伝説を島津家は作りまして、頼朝の落とし胤だと。大友家も、そう言ってます。つまりそういうようにして、土地の人をなだめる。それ以後、関東の姓が九州にふえる。児玉とか何とか、薩摩にもあります。今の長崎県、肥前の大小の豪族は、多く関東から来ています。それらのにおいは、非常に父系的です。頼朝体制の成立によって、そうやってくっきりしているのは記録で分かりますが、それ以前に、防人が逃亡して、山口組みたいになり、それでもって松浦氏なんかはできたんではないかという説もあります。松浦というのは、日本で一番古い大名ですね。平戸の殿様は、松浦半島をほとんど持っていました。太宰府の被官をしているのも、例えば後に対馬の王様になる宗氏も、宗というのは中国名みたいに見えますが、もともとは惟宗と言ってたんでしょうが、対外交渉の便利さから、惟を取って、宗一字の姓にしたんでしょう。みんな、おれのところは平氏だとか源氏だとか言ってるけれども、本当は防人の逃亡した連中かもしれない。かもしれないというだけで、こんなものは系図論ではないんです、ただ雰囲気論として……。とにかく関東的な要素が、非常に九州に多い。つまり関東と九州が気風としてどこか似ている。

戦国大名が成立しなかった熊野あたりの村へ行きますと、私らぐらいの年齢の人の感覚では、一村一族だと思っているところがある。だれの子かわからなくても、村のやつの子だということで安定する。無論、江戸時代の教育がありますから、父親を尊敬するということは、教育によってできているんですが、何となく母系のにおいというのが感じられないでしょうか。

松原　人類学的に厳密に言いだしたら、身もふたもないんですが、一般的な話をすると、東南アジア島嶼部で現在みられるのは、ほとんど現在の日本と同様な双系的な社会です。母系的社会もあることはあるんですが、あまり多くはない。

司馬　父系のにおいをアクセントにおいて理屈を立てますと、トルコもそうだと思いますが、子供が相続していくのは父親の骨だという思想がありますね。モンゴル人もそうですし、朝鮮人もそうです。朝鮮人は実に厳密です。ところがこの思想は、われわれは記録では、天皇家や公卿のことでしかなかなか見られない。庶民は記録を残さないものですから……。朝鮮人が「古事記」を読んで（朝鮮人自身が儒教的になるのは新しくて、せいぜい六、七百年なんですけれども、骨を相続するという原父系時代をふくめて）感覚としてびっくりするのは、いとこ結婚、きょうだい結婚が多いことです。これはモンゴル人には、少なくともあり得ない。今の朝鮮人の感覚で言うと、いとこ結婚というのは気味わるくて身震いするそうです。

私らの祖父ぐらいの代までは、田畑を分散させないように、いとこで結婚させるのは普通の常識ですね。天皇家の場合でも、それは極めてルーズで、一度も骨の思想は入らない。骨の思想と

いうのは、どうせ周辺の民族から来たものでしょうが、中国の儒教が整理したものですね。それが朝鮮半島に入ると、もとからある骨の思想と儒教とががちっとかみ合って、厳密なものになった。私の知り合いの朝鮮人、朝鮮南部に生まれまして、五十代ぐらいの女の方の話なんですが、日本人の校長先生が奥さんをなくされて、その妹さんを日本から呼んで結婚したとき、村中に異様なにおいが立ちこめて、百姓たちがくわを握って、校長官舎へじりじり近づいていく。それは校長を打ち殺す気勢なんでしょう。しかし打ち殺しは、当時は総督府治下ですからできないんですが、そうとでもしないと収まらない感情があって、人間として悪の中の悪を見たという感じ、そういう戦慄が村中に立ちこめましたというんです。われわれには「古事記」以来、そういうことはなかった。やはり母系にアクセントを置くべき社会――全国一色でないにしても――ではないかと思います。

松原　南方ですと、多くの場合、そういう族外婚というか、一つの集団の中での婚姻というものを排除することはあまりないですね。いろいろな変異をもつ社会があって、一概にはそうも言えないところもあるんですが、トルコ族などでは、確かに父系の集団というか、父系をたどってつながる連中だけを同じ集団のメンバーとする。だから、女性は、嫁入り先の集団のメンバーには属さないわけです。そういう社会原理がありながら、婚姻ということになると、トルコ族でも、アラブでも、遊牧的なにおいのする連中でもそうですが、いとこ婚というのは相当あるんです。やはり財産を分割させないためというのが、かなり大きな理由なんです。だから社会の編成原理

としては父系であって、族外婚をとらないシステムということもあり得るわけです。これは、南の連中だけでなく、北におった連中でもあり得たんではないかと思います。しかし、はっきりした確証は、どっちにしても難しい。

司馬　奈良朝の前後に姓（かばね）の制度を入れたことがありますね。朝鮮から渡来してきた連中が、おれたちはこういう習慣を持っているんだというので、かばねという言葉ができた。かばねは骨のことですから、非常に北方的な社会原理が……。

松原　その時点ではそうですね。

司馬　それがすぐ崩れますね。私らが上代史を読みまして一番よくわからなくて煩瑣（はんさ）なのは、姓の制度です。外国の資料でも読んでいるような感じが、実感としてします。そういう骨の相続思想がすぐ崩れてしまった。もとからいる住民が崩してしまったんだと思うんですが。

松原　基本的な社会原理が、そういう原理ではなかったということですね。それからそれと関係すると思うんですが、歌垣（かがい）というのがあります。

司馬　若い男女がパーティーをやる……。

松原　歌でかけ合いをして、踊りをまじえ、結婚の相手を見つける。あれが、さっき申しました照葉樹林文化地帯、江南山地の少数民族から東南アジアの一部にずっとつながります。モンゴルあたりにはないですね。

司馬　あり得ないです。父系的骨原理のひとびとですから。

松原　北のほうには歌垣的なものはあまり出てこないみたいですが、そういうつながり方からいくと、かなり基本的な原理というものは、やはり南的なものが強かったと思います。時代の取り方によって変わるかわかりますが……。日本語というのは、混合語なのかというと、それが、本当のところよくわからないんですね。一応、混合語というような考え方が強いと思うんです。南島語的なところに、アルタイ語的なものがかぶさり、また江南地方から来たものとか、いろいろかぶさってきた。それらの混合語だろうと、大体言われているんですが、その中でどれが強くて、何々系の言語だということがはっきり言えるかというと、残念ながら日本語の場合は、まだわからんのですよ。どこへも属してないというか、アルタイ語の中にも入ってないし……。

司馬　アルタイ語を主に勉強した人は、アルタイ語族の中に入れたい。ところが南方語を勉強した人は反対するわけです。たしか明治の初年にチェンバレンさんがロンドンから来て、日本の言語学を始めたわけですが、あっさりと北方説です。それから四、五十年たって、京都大学に言語を考える学者たちが出てきたころには、南方説になってきました。それが今では、どっちか主張することのほうが愚かだというほど複雑になって、要するに今は所属していないわけです。

松原　北方説というか、ツングース語系の言語とのつながりを、村山七郎さんなどが大分努力して追求したのですが、日本語と同源語ということはもうひとつ明確にならなかった。村山さん自身は、現在は南島語のほうに大分力を入れていますね。

司馬　村山七郎さんにはお会いしたことがないけどいい学者ですね。日本語を中心とした言語学

を新しく編成されたというか。面白いことに、言語学というのは、日本語の同言語内で勉強できない。あの方は西ドイツの言語学者のもとで勉強されて、結局、新しい言語学のシステムを持って帰られて、そしてもういっぺん日本語との突き合わせにおいて、朝鮮語及びアルタイ語族を洗い直された。しかし濃い血縁関係が出てこない。まったく、日本語というものは奇怪な言葉ですね。

松原　やはり言語学者で江実さんは、ここ数年ニューギニアの一部族の言語が日本語と全く構造とか、語順が同じだということで、そちらのほうに源があるんだという説を唱えております。

司馬　岡山大学の方でしたね。

松原　やはりモンゴルなどの言葉をやってる言語学者です。

司馬　ニューギニアの本島の奥のほうの一角のある部族内の小さいグループの中に発見された。これは安田徳太郎さんのレプチャ語とは違いまして、ちゃんとした方法論を用いて発見なさり、もうちょっと採集しようということです。文法から、単語の突き合わせまでできそうだという雰囲気なんです。それからさっきから私が勝手に言ってる言語生理も似ていると。それは、まあ偶然だろうということで、今のところは黙殺に近い形ですね。

松原　そうです。データ自身が非常に少なくて、そこまで言えるものではないと。

司馬　まあ漠然、原日本語には汎太平洋言語の強い影響があるということは言えそうですね。

松原　恐らくそれくらいまでは言えるんではないかと思います。西田さんはチベット・ビルマ語

で全部説明しようというわけですが、これもいろいろ反対説が出ていて、その評価は、専門家でないとちょっとわからないんですが、まだまだ固まらないようです。チベット・ビルマ語では、全部説明し切れないんではないかという気が漠然とします。

司馬　そういうことで言いますけど、大体明治以後百年、日本語を研究した人たちの中で、どこかの言語だと言ってすり寄らせた学者は、大抵袋だたきになっていると言えますね。（笑）

松原　そうですね。

司馬　例えば朝鮮語だと言ったら、みんな白い目になる。生粋（きっすい）の南方語だとか、あるいはニューギニアに特定して言い過ぎると、また学者たちの目が白くなる。大変難しい世界らしいですな。

松原　言語学の世界というのは難しいです。

司馬　言語学の世界は別として、雑談の関西弁とか、日常語とかの話になるんですが、われわれが日常使っている、例えばしょうゆとか、みそとか、みそは奈良朝にあったんだけれども、しょうゆは室町ですね。家を建てると玄関がある。あれも室町からですね。玄関は中国語ですけれども、特殊な中国語で、あれは禅宗の言葉です。

室町期には禅僧が、一時期日本の知識人がパリに行ったみたいに、中国へ行ったんです。割り合いに行きやすかったんですね。禅宗が入ってくると、禅の教義だけ入ってくるわけにはいかない。文化というのは面白いですね、生活様式も一緒に入ってきます。そして建築にまで影響して、玄関を作るようになる。吉野にある義経が隠れたという吉水院（よしみずいん）は、鎌倉時代の住居建築、館の遺

構とみていいんですが、玄関はないんです。ところが、今われわれは、玄関があるのは日本建築だと思ってしまっているところがありますね。

しょうゆは、室町以前のわれわれの先祖は、醤（ひしお）で塩味をつけていたと思うんです。ひしおというのは、みそを作るときのしたたり落ちる……。

松原　たまりですね。

司馬　ベトナム人は賢くて、これに魚を入れていますから、ニョクマムになるわけですが、われわれは魚を入れないで、生粋のみそのたまりだけで調味をしていた。そこにしょうゆが入ってくる。ところが入ってきたものだとは思わない。古来から日本にあったと思っている。お茶も、室町期からの普及ですね。

松原　栄西と伝わっていますが、問題は、柳田国男さんがおっしゃっている、山茶というものが、それ以前からあった可能性もあるんではないかということです。山茶の場合は、焼畑の後に生えるんです。そうしますと、さっきから話の出ている稲作以前の文化の流れのなかに、そういうものの利用法が、ひょっとするとあったかもしれないという可能性はあるんです。ただ、江南山地では、大体の場合、発酵させたり、団茶みたいな、固めたり、そういう使い方が多いみたいです。日本のもみ茶も、技術的にはもとは向こうなんですが、それが古くから日本にあったという確証は、文献的には一つもないですね。

司馬　柳田さんの山茶ですが、おもしろい体験をしました。能勢の山奥に松たけ場を持っている

微生物学者がいて、毎秋、何人かの仲間をよんでくれる。私もお相伴している。去年まで七、八年続いた習慣でしたが、土地の人がむしろを敷いたり、かんてきを持ってきて炭をおこしたりしてくれるんです。で、お茶はいつも大やかんに入れてくれるんです。そのお茶は野生のものです。その山の中に入っていく入り口ぐらいの所に、お堂のない露天の小さな地蔵さんがあって、その背中の斜面に野生の茶があって、村の人はそこに十円を置いて、山茶の枝を切ってくる。それは山行きのときにやるんですね。われわれも松たけ狩りとはいえ、山行きですから……。そしてむしろのそばの焚き火でパリパリッと焦がして、煮え立った大やかんが横にありますから、煙の立ったお茶の枝をジャブッとつけるわけです。濃い味の非常においしい番茶ができ上がる。村の人に十円はだれが取るんだと言ったら、そんなこと知るものか。(笑)とにかく神への感謝ですね。

そのころに、朝日新聞の学芸欄を読んでいたら、民族学者だろうと思うんですが——まだベトナム戦争の最中でした——その人は、インドシナ半島の山岳民族の所に入ってみたら、その方法でお茶をやっていた。これは極めて珍しくて、日本とは非常に違う方法だと書いてあった。この人を能勢に連れて行こうかしらと思ったことがあるんです。(笑)恐らく能勢の方は、古代以来、柳田さんの山茶で、しかも煎じ方はそういう形でしていて、インドシナ半島の山地と対応しているわけです。だからうかつに、われわれの身辺を見ますと、随分古代が入っているので、見逃してしまうと、よその土地で見たことが発見になってしまう。ややこしい国ですな。

松原　茶の系譜で言いましたら、世界中に広まっているのは、英語で言うティーと、ペルシャ語

なんかで言うチャイと、全部たどったら中国にさかのぼれる。チャイの方は、北の中国音から、ティーの方は、厦門（アモイ）方言か何かからきている。見てきたわけではないんですけれども、どうも江南山地なんかの茶には、本当に種々雑多な植物を使っているらしいです。

司馬　焙（ほう）じ方も、種々雑多らしいですね。

松原　それこそ、茶の葉の漬け物も作っているらしいです。

司馬　大阪の六十代の主婦ですが、上等のお茶で佃煮をつくっています。昔からあるのかどうか、知りませんが……。中国で茶が飲用に使われ始めたのは、三国時代ぐらいからでしょうね。もうちょっとさかのぼれますか。

松原　やはり盛んになるのは、唐代になるでしょう。「茶経」なんかができてきて……。

司馬　三国時代ぐらいに、少し物好きが茶を飲み始める……。それは、やはり少数民族の影響ではないでしょうか。

韻を踏まない日本の詩

松原　恐らくそうでしょう。初めは薬として飲んでいます。それから覚せい剤です。禅僧の所では、坐禅を組むときに目を覚ましておくために飲んだりしています。

一つだけ、文学者としての司馬さんにお伺いしたいことがあるんです。詩についてなんですが、

アルタイ語でも、中国語でも、アラビア語でも、ペルシャ語でもそうなんですが、詩の位置は大変高い。そして、すべて韻を踏みます。しかし日本語の場合、韻を踏む詩がどうして成立しなかったのかということなんです。

司馬　言語学の問題と関係があると思いますが、南方のにおいをまず想定しないと……。この場合の南方というのは、漠然と記号化して言ってるんですが、南方には韻がなかったんではないかという妄想が私にはあります。

松原　そこのところが、最終的にはわからないんですが、歌垣みたいなところで、かけ合いで歌を歌うのを見ていますと、やはり奇麗な韻が出てくるみたいなんです。

司馬　そうですか。ボルネオの場合ですか。

松原　ボルネオの歌なんか、大変奇麗です。七五調というふうな調子のものにも近いし、韻も踏んでるみたいなんです。だからマレー語系全部が、そういう韻を持っている詩を作るのか、そこのところは私もちょっと確かめたことはないんですが……。日本語の場合、七五調、五七調はできたけれども、韻を踏むことはできなかった。日本語の場合は、詩が成立しないということになるのか。

司馬　これは重要な問題ですね。私は、学生のとき、マレー語の先生に、マレー語には韻がありますかと聞いたことがあります。そのころ私は、モンゴル語の韻で困っていたわけです。頭韻・脚韻の詩を読ませられて、これで閉口していたわけです。つまり日本人は、韻の感覚のない民族

でしょう。そういう言語習慣の中から韻を習うというのは、非常に難しいんで、これはマレー語に行ったほうがよかったかなという感じで聞いてみたわけです。そしたらマレー語の先生は、そのときの記憶では、ないんだと。その後、確かめていないんですが……。

松原　確かに現代マレー語をみたら、どうもなさそうです。ただ、スカルノの演説、あれが韻を踏んでいるかどうか、詳しいことは知りませんが、調子は大変あります。演説できる調子なんです。

司馬　朝鮮語も、べつな意味で演説にいいですね、調子ですね、調子がうまく出てゆく。

松原　ところが日本語は、全然演説にもむいていない。

司馬　調子がだめですね。これは韻ではなくて、演説の調子の話ですが、モンゴル語の場合は、今でも頭韻・脚韻を即興で踏まなかったら、インテリじゃないんです。

松原　インテリだけでなしに、民衆もやりますね。

司馬　ええ。よく話をするんですが、モンゴルでは七月十一日の革命記念日のときに競馬があります。京都―大阪間か、東京―横浜間ぐらいの距離の少年・少女の競馬なんですが、馬の競走で、人間はどうでもいいんです。自動車のラリーみたいなもので、へとへとになった馬は全部だめなんです。途中で死ぬ馬もあります。最初にゴールに入ったやつがほめられるんですが、そのほめるのは、国家の主席に近い高官が委員長でして、その馬に対して、お前はどこそこ川に生まれ、だれそれを父とし、だれそれを母としと、長々と即興でやるんです。耳はこのようにそぎたって、

脚はカモシカのようだとか、そしてひづめをほめ、毛並みをほめ、細かくなっていくんですが、全部頭韻がついています。それができないと、民衆がばかにする。今でもそのまま詩が生きているわけです。今の人民共和国のモンゴルでも、さっき松原さんがおっしゃったように、詩人の評価は最高で、ノーベリストはその次ぐらい。しかもわれわれの民族の詩の位置ではなくて、いい詩人が詩を一つ作ると、みんなが節をつけて歌うんです。それぞれの節でいいわけです。だからノサクドルジュというもう死んだ大詩人がいるんですが、この人に対する尊敬心というのは、民族の魂そのものなんですね。

東欧でも、ナチがはびこっていたころに抵抗運動があって、ある詩人をかくまって回る映画がありましたが、劇中、ある人物がなぜその詩人をかくまって回るんだと言ったら、この人が死ねば、民族が滅びたのと同然だとひとびとが言う。つまり初めに言葉ありきということが、生きてくる話ですね。言葉というのは、この場合詩の形になって、神に近くなるわけです。

われわれの日本には七五調しかないわけで、調子は悪いし、韻もない。そして俳句になるわけです。俳句は、詩よりも知的な何事かでしょうか、もうちょっと違うもので、これはうたい上げられません。詩と言えば、私はいつも思うんですが、関東平野によく詩人が出るのは何だろうと。大きな大地と雲だけがあるという条件、これは関東平野とか、南部の盛岡周辺とかで、宮沢賢治とか、萩原朔太郎とか……。これは大きな所で空しか見えていないような所、山川がない所、錯綜した地形ではない所では、神は天だというイメージが、子供のときから育つわけで、微細な雲

の動きを見ては心を動かすわけです。

ところが山川草木が複雑な状態になっていると、谷川のくぼみを見ても、私らは神を思ってしまう。非常に汎神論的な、そういう風景の中で生まれ育ちますと、調子の高らかな詩なんかは浮かばずに、こまごまとした谷間で神聖感情を感じてしまって、結局はその感情がことばになるとき、つぶやきにしかならない。そういう所では、俳句は生まれても、西洋に近い詩は生まれない。もしくは萩原朔太郎、宮沢賢治は生まれないという感じがある。そうすると、この話は地形論になるんですが、しかし、同時に言語論でしょうね。この言語ではどうしようもない。

松原　どうしようもないのか、それがどこかきっかけがなかったためか、それがよくわからないですね。何かきっかけがあれば、そういうことができたんではないかなあという気もするんですけど……。

司馬　やはり子音の多い言葉を使っていると、韻が踏めるかもしれません。どうでしょうか、これはちょっと大胆過ぎるかしらん……。

松原　トルコ語なんかでも、まあ比べようですけれども、決して子音は多いほうではないです。しかし奇麗な韻を踏みます。アラブの世界なんかでは、最高に詩が発達しているというか、コーラン自身が詩みたいで、朗誦というのが、ずっと韻を踏んだ奇麗なものです。アラブの古代の戦争は、詩人が前にでて、詩を朗詠し合って、やっつけられたほうが負けということで、詩の合戦をやっています。子音の問題なのか、言語の構造なのか。よくわからないんですが、中国語でも、

奇麗な韻が踏めるわけです。

司馬　これは詩の問題と関係ないかもしれませんが、調子の問題で言いますと、イントネーションが豊かな言語というのは、過疎地帯に多いでしょう。東北地方なんかに行きますと、やはりあれはあれなりのイントネーションがあるような感じがします。山と山で、向こうの山で木こりが仕事をして、こっちがわの山で仕事をしていて、腹がすいたというのは、身ぶりと声の身ぶりで、弁当にしようかと。言語内容ではなくて、身ぶりと、腹がすいたような音響を発します。つまり調子ですね。人口の稠密（ちゅうみつ）な所では、ぺちゃくちゃ言葉になります。意味は、言葉の響きよりも、内容で決定する。中国で言いますと、広東、福建あたりの人口の稠密な所では、ぺちゃくちゃ言葉だそうです。北京周辺、華北は、大地があって、パラパラッと人間がいる。自然、非常に抑揚のある言葉ですね。それから見ると、ぺちゃくちゃ言葉が、大体日本語だと。人口が多かったですから……。鎌倉時代で八百万だという人がおります。この八百万も偏っていますから……。ほぼ都市生活は京都と鎌倉で成立していますから。そこには随分の人数がいる。そこでは抑揚をつけてものを言ったんでは、ちょっと調子が外れてしまい、ぺちゃんぺちゃんと内容を探り合うという内容中心の言語になると思うんです。そうすると詩が発生しにくくなる。発生しても、「古今集」になり、俳句になる。これは答えにはならないと思いますが……。

松原　答えは非常に難しいと思うんですが、本当に不思議な現象ですね。

司馬　言語として不思議ですね、韻のある詩を生まなかったというのは。

松原　和歌でもそうでしょうが、やはり歌うということが、日常的には絶えてしまうでしょう。流派として家元で残りますが……。例えば歌垣だと、ちゃんと節がついて、お互いにやりとりする。それこそどこの人かわからん庶民が、ちゃんと句を作りながら、ちゃんと節をつけてやれたわけですね。恐らく万葉時代はやってただろうと思うんですが、それがどこかで消えちゃった。

司馬　私は、よく朝鮮酒場に行くんです。これは金達寿さんの影響なんですが……。そこの大抵の女の子は歌がうまい。何の歌なのか、今のはやり歌だろうと思うんですが、「サラン、サラン、サラン、サラン……」という歌があるんです。長く同じ言葉を言うんですが、それだけを聞いているだけで、こっちがもう気持ちよくなってくるんです。決して内容は関係ないんです。サランというのは、朝鮮語で「人」だったですか。日本語で、ヒト、ヒト、ヒト、ヒトといっても韻律が出て来ない。要するにそれだけで、調子だけでも響きを楽しめる言葉の民族、そういう言語生活をしているのが朝鮮人。隣人だけれども、言語の響きを楽しむことができるらしい。松原さんがおっしゃったように、万葉に踏歌（とうか）というのがありますね。踏歌というのは、列をなして、言葉通り足を踏み鳴らしながら、行進をして歌うみたいな感じです。私は記憶が悪いからはっきりしませんが、何とかの女房が河内のどこそこの宮におったら、踏歌がやってきたというのがありますね。夜ですけれども、いかにも今の朝鮮のにおいを連想させるんですが、それもわれわれの中から消えましたね。盆踊りはそうじゃないんです。あれは、室町の念仏の踊りのにおいですから。

松原　トルコの村で、十五、六から十七、八の娘さんが結婚するときに、親に今までありがとう

ございましたというのから始まって、戸口で、私はこれから嫁に行きます、それから花婿方の家へ行って、これからお世話になりますと、全部詩を歌うんです。韻を踏んだもので、彼女らが即興で作るんです。村の娘ですから、特別に教養があるというわけではないんですが……。

司馬　ちょっとそれと似る話が日本にあります。七年前のことですが、私は大人のまねをしないのが主義でして、例えば仲人なんてしないんですけれども、私の後輩で東京にいるのがいまして、ある雑誌社のお嬢さんと結婚をするという電話がかかってきたんです。仲人をしろというんです。めでたい話だし、断る文句を失って、おまえのくにでやるなら、おれ、行ってやると言ったんです。まさかと思っていたら、それなら、よし、くにでやるというんです。くにというのは石見（いわみ）の山奥なんですよ。まさか、東京のお嬢さんをそこまで連れていくとは思わなかった。で、しようがなく、長い汽車旅行のすえに浜田に着いたら、彼の一族は、くたびれたろうと思ったんでしょうね。宿屋をとっておいてくれて、一時間ほど休ませてくれました。そして彼のおやじが出てきまして、私の顔を突き刺すように指さして、「今夜は寝かせませんぞ、あしたの朝も寝かせませんぞ、あさっても寝かせませんぞ、三日三晩ですぞ」と、これは室町礼式通りなんです。ごく最近まで、農山漁村の結婚式は三日三晩やるわけです。

　まあそれは覚悟したんです。そこの家は、江戸期から明治末年まで、砂鉄採取と製鉄で産をなしたんですが、いまは衰えている。式をする屋敷は浜田の町から小一時間、山の中に入るわけです。屋敷といっても、おやじさんも浜田の町に出てきていますので、畳もほとんど腐っているん

です。門には高張りちょうちんが掲げられています。そろそろ夕方になってきて、嫁がやってくる。嫁は東京から来ているんですが、その土地から来たことにしてあって、仮に嫁のさとを設定してあり、途中に中宿というのも設定してある。休憩する場所ですね。嫁の仮のさとから数町、その間、あぜ道を通り、小道を通って、そこまでたどり着くんですが、行列を組んでやってくる。嫁は日本式の完全武装をしていて、かわいそうだったですよ。土人のとりこになっている東京娘の感じがして……。(笑)

その行列は、半歩ずつ歩いては止まるんです。なぜかというと、先頭の人が歌を歌うものですから……。今、生まれたお家を出た、父母の恩は山よりも高く……と。しばらく進むと、家が遠くなった、嫁は振り返って涙をこぼしていると。さらに中宿ぐらいまで来ますと、非常に家が遠くなったと。それから婚家に近づきますと、どうこうと。その間、数町で二時間ほどだったかな。お嫁さんにとっては、たえられないほどの労働だったでしょう。後で同情して、えらい目に遭ったなと言ったら、「ほんとに結婚したという感じがした」と言って、喜んでいました。(笑)

松原　それは先導する人が歌うんですね。

司馬　ええ。私は、帰ってから、室町礼式を調べてみたら、歌のことは出てません。その家は御館とよばれている。その下には目代という番頭みたいな職の人もいる。鎌倉時代に戻ったような所なんです。相当室町礼式に拠って婚礼を運んでいるようでしたが、その歌うやつは土俗のにおいでした。

松原　それは即興ではないんですか。

司馬　即興ではないんです、残念なことに、決まった歌を歌うんです。もっとも、歌っている人は野良着を着ていました。あれはどういうわけかな。みんな礼服を着ているのに、その人だけ野良着なんです。

松原　それは、やっぱり芸人の服装なんでしょうか。

司馬　芸人ではなくて、村で芸のできる人なんです。ですけれども、彼は、結婚式に黒子（くろこ）として参加しているんで、正規によばれたんではないんだということで、嫁の代わりに歌っているつもりかしら……。

松原　やはり俳優（わざおぎ）の役割でしょうね。

司馬　わざと正規の婚礼参加者じゃないということで、野良着をきているのかな。そういう感じでした。だから、日本文化はややこしいなあ。（笑）その歌というのは、御詠歌調でした。聞いて、気持ちのいいものではないです。ただ嫁の悲しみをいやらしいほどに調子づけているだけです。あれがトルコの頭韻・脚韻を踏んだ響きのいい詩でやると、恐らく奇麗なものになるでしょうね。

松原　やはり私らは、韻を踏んだ詩を作るということ自体、能力がないものですから、トルコで花嫁の即興詩を聞いた時は、これはもうあかんなあと思いました。（笑）

（昭和五十一年七月二十五日、東京で対談）

『日本語と日本人　司馬遼太郎対談集』
昭和五十三年十月　読売新聞社刊



中公文庫

日本語と日本人

定価はカバーに表示してあります。

1984年8月10日初版
1996年3月30日8版

著者　司馬遼太郎

発行者　嶋中鵬二

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1984 CHUOKORON-SHA,INC. / Midori Fukuda

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 本州製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-201150-7　C1195　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ノンフィクション　II

イスラーム生誕　井筒俊彦
イスラーム思想史　井筒俊彦
ロシアの人間　井筒俊彦
シリア　東西文明の十字路　P・K・ヒッティ　小玉新次郎訳
アラビアに魅せられた人びと　前嶋信次
論語　貝塚茂樹訳注
養生訓　貝原益軒　松田道雄訳
老子　小川環樹訳注
荘子（内篇・外篇・雑篇）　森三樹三郎訳注
中国の神話　白川静
中国の古代文学（一）（二）　白川静
孔子伝　白川静
宦官　側近政治の構造　三田村泰助
アジア史概説　宮崎市定
水滸伝　宮崎市定
科挙　宮崎市定
西アジア遊記　宮崎市定
中国に学ぶ　宮崎市定
隋の煬帝　宮崎市定
大唐帝国　宮崎市定
中国政治論集　宮崎市定
謎の七支刀　宮崎市定
李陵　護雅夫
中国文人詩選　入矢義高
日本文人詩選　入矢義高
陶淵明伝　吉川幸次郎
馮道　乱世の宰相　礪波護
張作霖　白雲荘主人
張学良　忘れられた貴公子　松本一男
楠木正成　神武天皇　植村清二
万里の長城　中国小史　植村清二
諸葛孔明　植村清二
中国史十話　植村清二
アジアの帝王たち　植村清二
論語の世界　加地伸行編
孫子の世界　加地伸行編
易の世界　加地伸行編
韓非子（上下）　町田三郎訳注
孫子　町田三郎訳注
中国の知嚢（上下）　村山吉廣
アヘン戦争と香港　矢野仁一
歴史の暮方　林達夫
共産主義的人間　林達夫
思想の運命　林達夫
蒐集物語　様式の背後を探る　柳宗悦
桂離宮　和辻哲郎
自叙伝の試み　和辻哲郎
自伝抄　谷川徹三
人生について　小林秀雄
私の文章作法　清水幾太郎
ペルシアの陶器　ウィリアム・モリス　小野二郎
三上次男

一九九六年三月

肉眼の思想　大岡　信
若山牧水―流浪する魂の歌
詩人の旅　大岡　信
こしかたの記（正続）　田村隆一
ニコライの塔　鏑木清方
牛のあゆみ　川又一英
モンマルトルの空の月
裸の字　奥村土牛
うちの宿六　中川一政
群青の海へ―わが青春譜
平山郁夫画文集　福島慶子
西から東にかけて
独身者　平山郁夫
福永武彦画文集　福永武彦
玩草亭百花譜（上中下）
画文集ゆふ　加山又造　前本ゆふ
板極道　棟方志功
津軽三味線ひとり旅　高橋竹山
母の蛍　寺山修司の　寺山はつ
いる風景
本とその周辺　武井武雄
新編帯をとくフクスケ
職人　荒俣　宏
竹田米吉

アンリ・ルソー　楽園の謎　岡谷公二
名曲決定盤（上下）　あらえびす
グスタフ・マーラー　A・マーラー　石井　宏訳
―愛と苦悩の回想
レコードのモーツァルト　吉田秀和
音楽の旅・絵の旅　吉田秀和
ヨーロッパの響、ヨーロッパの姿　吉田秀和
音楽の光と翳　吉田秀和
音楽紀行　吉田秀和
チャイコフスキー・コンクール
楽は堂に満ちて　中村紘子
反劇的人間　朝比奈隆
内なる辺境　安部公房
榎本武揚　改版　安部公房
わたしの好きなレコード　ドナルド・キーン　中矢一義訳
日本人の西洋発見　ドナルド・キーン　芳賀　徹訳
日本の作家　ドナルド・キーン
日本の文学　ドナルド・キーン　吉田健一訳
日本との出会い　ドナルド・キーン　篠田一士訳
日本細見　ドナルド・キーン　中矢一義訳
音楽の出会いとよろこび　ドナルド・キーン　中矢一義訳

胡堂百話　野村胡堂
東京焼盡　内田百閒
ノラや　内田百閒
城の中　入江相政
侍従とパイプ　入江相政
濠端随筆　入江相政
味のぐるり　入江相政
花づとめ　季節のうた百三章　安東次男
日常茶飯事　山本夏彦
茶の間の正義　山本夏彦
変痴気論　山本夏彦
毒言独語　山本夏彦
編集兼発行人　山本夏彦
かいつまんで言う　山本夏彦
つかぬことを言う　山本夏彦
おじゃま虫　山本夏彦
笑わぬでもなし　山本夏彦
ダメの人　山本夏彦
二流の愉しみ　山本夏彦
意地悪は死なず　山本夏彦　山本七平

夏彦・七平の十八番づくし
わたしの大阪　山本夏彦　山本七平

池辺三山　池辺一郎　永健一郎
やまとのふみくら　天理図書館
日本の埋蔵金　富永健一

露店市・縁日市　秦孝治郎　坂本武人編　三田村鳶魚編
江戸年中行事

雑誌記者　池島信平

江戸たべもの歳時記
味覚三昧　浜田義一郎

料理のお手本　辻嘉一

滋味風味　辻嘉一

辻留・料理のコツ　辻嘉一

包丁余話　辻嘉一

五味六味　辻嘉一

山菜歳時記　柳原敏雄

料理歳時記　辰巳浜子

野草の料理　甘糟幸子

洋食や　茂出木心護

パンの百科　締木信太郎

ブドウ畑と食卓のあいだ　ワイン文化のエコロジー
麻井宇介

食は広州に在り　邱永漢

象牙の箸　邱永漢

食前食後　漢方の話　邱永漢

食指が動く　世界の美味食べ歩き　邱永漢

奥様はお料理がお好き　邱永漢

中国人と日本人　邱永漢

美味方丈記　陳舜臣　錦敏

御馳走帖　内田百閒

魯山人陶説　北大路魯山人　平野雅章編

魯山人味道　改版　北大路魯山人　平野雅章編

味覚法楽　魚谷常吉　平野雅章編

日本の食文化　平野雅章

羊飼の食卓　太田愛人

歴史はグルメ　荻昌弘

たべもの嗜好学入門　河野友美

まちがいの食品学　河野友美

食味往来　食べもの道　河野友美

百魚歳時記（正続第三）　岩満重孝

百魚百味　岩満重孝

魚味礼讃　関谷文吉

奇食珍食　小泉武夫

食物の生態誌　西丸震哉

山歩き山暮し　西丸震哉

イバルナ人間　西丸震哉

山の博物誌　西丸震哉

山とお化けと自然界　西丸震哉

動物紳士録　西丸震哉

山小舎を造ろうヨ　西丸震哉

手作りログハウス　木下威

森で暮らそう　木下威

山―随想―　大島亮吉

山と雪の日記　板倉勝宣

渓（たに）　冠松次郎

雪・岩・アルプス　藤木九三

わが山山　深田久弥

雪山・藪山　穂高を愛して二十年　川崎精雄

新編　山靴の音　小山義治

初登攀行　芳野満彦

松本竜雄

垂直に挑む　吉尾　弘
マッターホルン北壁
グランドジョラス北壁
ヒマラヤに挑戦して

バルン氷河紀行　小西政継
雪煙をめざして　小西政継
岩壁よ　おはよう　小西政継
K12峰遠征記　P・バウアー　伊藤　愿訳
果てしなき山行　福田宏年

山国隊　仲村　研
エリュトゥラー海案内記　村川堅太郎
中世ヨーロッパの説話　松原秀一
―東と西の出会い

地中海の誘惑　樺山紘一
西洋学事始　樺山紘一
カタロニアへの眼　樺山紘一
日本ふーど記　玉村豊男
軽井沢うまいもの暮らし　玉村豊男
東京おろおろ歩き　玉村豊男
森羅万食たべものがたり　玉村豊男
旅する人　玉村豊男
人生おこがま指南　玉村豊男
グルメの食法　玉村豊男
養蜂記　杉浦明平

若いヨーロッパ　阿部良雄
風景は生きた書物　木村尚三郎
―体験的ヨーロッパ論
東西文明の焦点トルコ　並河萬里
パレスチナ　並河萬里
カッパドキヤの夏　柳　宗玄

岩壁よ　おはよう　小西政継
K12峰遠征記　P・バウアー　伊藤　愿訳
果てしなき山行　福田宏年

雪煙をめざして　加藤保男
岩壁よ　おはよう　長谷川恒男
K12峰遠征記　岩坪五郎編

バルン氷河紀行　小西政継
ヒマラヤに挑戦して　P・バウアー　伊藤　愿訳

垂直に挑む　吉尾　弘
マッターホルン北壁
グランドジョラス北壁

漱石のロンドン風景　出口保夫
サフランの花香る大地ラ・マンチャ　A・ウット編著
スペイングルメ紀行（上）　太田尚樹

南島の神歌　外間守善
南島の抒情　琉歌　外間守善
旅のあとさき　岡田喜秋
英国生活誌II　出口保夫

中勘助の手紙　稲森道三郎
―一座建立
不吉な黄昏　ノエル・バーバー　原田榮一訳
―シンガポール陥落の記録

京都インクライン物語　田村喜子
グッドラック　山際淳司
―幸福の時を求めるスポーツマンへ
みんな山が大好きだった　山際淳司

南島の神歌　外間守善
南島の抒情　琉歌　外間守善
旅のあとさき　岡田喜秋
英国生活誌II　出口保夫

僕は森へ家出します　荒川じんぺい
大震災から家族を守る　荒川じんぺい
アウトドアのグッズと知恵

犬と山暮らし　波多野　鷹
釣魚道楽　盛川　宏
釣魚しゅんの味　盛川　宏

わたし、牧場を始めますやまざきようこ
養蜂記　杉浦明平

グルメの食法　玉村豊男
人生おこがま指南　玉村豊男
旅する人　玉村豊男

森羅万食たべものがたり　玉村豊男
東京おろおろ歩き　玉村豊男
軽井沢うまいもの暮らし　玉村豊男
日本ふーど記　玉村豊男

中世ヨーロッパの説話　松原秀一
―東と西の出会い
エリュトゥラー海案内記　村川堅太郎

地中海の誘惑　樺山紘一
西洋学事始　樺山紘一
カタロニアへの眼　樺山紘一

山国隊　仲村　研

中国の「野人」　周　正
―類人怪獣の謎
ショスタコーヴィチの証言　S・ヴォルコフ　水野忠夫訳編
ソ連がイスラム化する日　V・モンテイユ　森安達也訳
スペイン戦争　斉藤　孝
―ファシズムと人民戦線

インカ帝国探検記　増田義郎
太陽と月の神殿―古代アメリカ文明の発見　増田義郎
知的な冒険の旅へ　矢島文夫
曠野から　アフリカで考える　川田順造
グランド・ツアー　本城靖久
国際版路地裏の経済学　竹内　宏
ユーラシア大陸思索行　色川大吉
ある昭和史　色川大吉
ユーラシア文明の旅　加藤九祚
シルクロード文明の旅　加藤九祚

風景は生きた書物　木村尚三郎
―体験的ヨーロッパ論
東西文明の焦点トルコ　並河萬里
パレスチナ　並河萬里
カッパドキヤの夏　柳　宗玄

風景は生きた書物　木村尚三郎
―体験的ヨーロッパ論
東西文明の焦点トルコ　並河萬里
パレスチナ　並河萬里
カッパドキヤの夏　柳　宗玄

隣の国で考えたこと　岡崎久彦
中国の「野人」　周　正
―類人怪獣の謎
ショスタコーヴィチの証言　S・ヴォルコフ　水野忠夫訳編
ソ連がイスラム化する日　V・モンテイユ　森安達也訳
スペイン戦争　斉藤　孝
―ファシズムと人民戦線

インカ帝国探検記　増田義郎
太陽と月の神殿―古代アメリカ文明の発見　増田義郎
知的な冒険の旅へ　矢島文夫
曠野から　アフリカで考える　川田順造
グランド・ツアー　本城靖久
国際版路地裏の経済学　竹内　宏
ユーラシア大陸思索行　色川大吉
ある昭和史　色川大吉
ユーラシア文明の旅　加藤九祚
シルクロード文明の旅　加藤九祚

西域・シベリア
タイガと草原の世界
加藤九祚

火の島 ジャワ・バリ島の記
秘密の国
阿部知二

チベット遠征
西蔵遊記
S・ヘディン
金子民雄訳
青木文教

中央アジアに入った日本人
金子民雄

宮沢賢治と西域幻想
私たちのシルクロード
金子民雄

青蔵紀行
秘境西域八年の潜行（上中下）
平山美知子

チベット潜行十年
チベットわが祖国
―ダライ・ラマ自叙伝
ダライ・ラマ
木村肥佐生訳
松原正毅

チベットの娘
R・D・タリン
浦順子訳
西川一三

チベット 旅の百日
河の民（オランスンガイ）
北ボルネオ紀行
李 韓美奈
津訳
木村肥佐生

敦煌ものがたり
里村欣三

韃靼
衛藤利夫

蒙古学問寺
改版 維摩経
長尾雅人訳注

入唐求法巡礼行記
圓仁
深谷憲一訳
長尾雅人

密教 インドから日本への伝承
松長有慶

理趣教
密教とはなにか
松長有慶

マンダラ探険
―チベット仏教踏査
サンスクリット原典全訳
佐藤 健

ガンジー自伝
―過剰栄養の時代
ガンジー
蠟山芳郎訳
J・ゴンダ
鎧 淳訳
渡瀬信之訳

インド思想史
インドの光―聖ラーマクリシュナの生涯
大聖ラーマクリシュナ不滅の言葉
田中嫺玉
奈良 毅訳
田中嫺玉

現代インドの社会と政治
荒 松雄（新谷 識）

インドとまじわる
旅は道づれ
タゴンカーメン
高峰秀子
松山善三
荒 松雄

私たちのインド
写真集 ガンガー生々
未開の顔・文明の顔
辛島貴子

インド・東南アジア紀行
宗谷真爾
安藤 亨

ボロブドゥル
中根千枝

イタイの僧院にて
青木 保

極北のインディアン
原 ひろ子

ニューギニア紀行
N・M・マクライ
畑中／田村訳
井尻 進

東南アジアから見た日本
三浦朱門

文明の生態史観
梅棹忠夫

東南アジア紀行（上下）
梅棹忠夫

回想のモンゴル
キムチとお新香
日韓比較文化考
肉食文化と米食文化
―過剰栄養の時代
金 両基
鯖田豊之
梅棹忠夫

暮しの思想
米国さらりーまん事情
加藤秀俊

経済倫理学序説
松浦秀明

新憲法の誕生
西部 邁

散るアメリカ
シングル・ライフ
―女と男の解放学
テネシーワルツは僕の子守歌
古関彰一

海老坂 武

井上治子

女と男のニューヨーク
ジャーナリストはなぜ疑り深いか
宮本美智子

めありか記者修業
R・サイモン
横山和子訳
吉岡 忍

太平洋戦争航空史話（上下）
秦 郁彦

日本海軍の戦略発想
鳥越俊太郎

騎馬民族国家
千早正隆

新中間大衆の時代
江上波夫

組織の自己改革法
村上泰亮

長谷川慶太郎

物語批判序説　蓮實重彦
柔らかい個人主義の誕生
演技する精神　山崎正和
戦争私書　室伏高信
顔の本　香原志勢
神・墓・学者（上下）　山崎正和
考古学の物語
謎の古代遺跡を歩く
幻想の古代文明　服部研二
FBI―独裁者　サリバン／ブラウン
フーバー長官　土屋政雄訳
女弁護士の事件簿　渥美雅子
女の法廷　渥美雅子
法医学ノート　古畑種基
法医学のミステリー
法医学の現場から　渡辺孚
交通裁判の科学　須藤武雄
検事の現場検証　江守一郎
日本人の犯罪意識　村上久
検事の控室　青柳文雄
特捜検事ノート　河井信太郎
法歯学の出番です　出射義夫
―事件捜査の最前線
女興行師 吉本せい　矢野誠一
淀川長治自伝（上下）　淀川長治
映画のおしゃべり箱　鈴木和男

鑑識捜査三十五年　岩田政義
犯罪の通路　中野並助
いなか巡査の事件手帳
仕立屋銀次　深沢敬次郎
精神科の待合室　本田一郎
モラトリアム人間の時代　斎藤茂太
モラトリアム人間を考える　小此木啓吾
日本人の阿闍世コンプレックス　小此木啓吾
ものぐさ精神分析（正続）改版　岸田秀
エイズのなにが恐いのか　水野肇
心身症のカルテ　鈴木仁一
医の心　榊原仟
精神科の診察室　平井富雄
病める心のカルテ　平井富雄
心のトラブル　平井富雄
問いつめられたパパとママの本　伊丹十三
還らぬ息子　泉へ　朝倉和泉
女興行師 吉本せい　矢野誠一
淀川長治自伝（上下）　淀川長治
映画のおしゃべり箱　淀川長治

映画館（こや）がはねて　山田洋次
森繁自伝　森繁久彌
見て来た・こんな・ヨーロッパ　森繁久彌
一泊二食三千円　永六輔
終りのない旅　永六輔
オレとボク　戦地にて　池部良
煮たり焼いたり喋ったり　池部良
逢えばほのぼの　対談集　檀ふみ
旅は俗悪がいい　宮脇檀
ド・レミの歌　平野レミ
僕らがポルシェを愛する理由　山川健一
不思議旅行　水木しげる
比島投降記
ある新聞記者の見た敗戦
雑想小舎便り　遠藤ケイ
ヨーロピアン・ハイライフ　斎藤澪奈子
「あしたのジョー」心理学概論　SUPER STRINGS
―"矢吹丈"―その心の病　サーフライダー21G
ベルー遥かな道―フジモリ大統領の母
―フジモリ大統領の母　千野境子
ロンドンの馬・パリの馬
―海外阿房競馬　旋丸巴
日本の古代1 倭人の登場　森浩一編
日本の古代2 列島の地域文化　森浩一編

日本の古代3 海をこえての交流 大林太良編
日本の古代4 縄文・弥生の生活 森浩一編
日本の古代5 前方後円墳の世紀 森浩一編

ビジュアル版

新家庭料理（正続） 丸元淑生
洋食大好き 茂出木雅章
カレー自慢 暮しの設計編集部編
鉄人のおかず指南 道場六三郎
鉄人の機転のおかず 道場六三郎
達人の四川料理 陳建民
鉄人の中国健康料理 陳建一
鉄人の父子が教える中国の味 陳建一・陳建民
鉄人父子のおいしい飲茶 陳建一・陳建民
失敗しない洋菓子づくり 桑原清次
パスタ自慢 暮しの設計編集部編
鉄人のサンドイッチ読本 坂井宏行
作って贈るチョコレート 吉田菊次郎
くつろいで鍋料理 暮しの設計編集部編
おべんとうを考える —楽しく作るおかず200選 村上昭子
家庭で作れる京料理 中村文治
珈琲をおいしく飲もう 暮しの設計編集部編
英国式午後の紅茶 暮しの設計編集部編
鉄人のフランス家庭料理 石鍋裕
野の花山の花 秋をいける 岡田広山
夕御飯はイタリア料理 海鋒勇
京のおばんざい 大村しげ
ヘルシーな京の精進料理 西川玄房・大村しげ
帝国ホテル総料理長のおいしい家庭料理 上下 村上信夫
世界のサラダ50選 西川浩子・木村治
家族のための健康メニュー 東畑朝子
檀流エスニック料理 檀太郎
ワインに親しむ 中公文庫編集部編
ワインに凝る 中公文庫編集部編
英国家庭の食卓 大原照子
漬けもの風土記 東日本篇 柳原敏雄
漬けもの風土記 西日本篇 柳原敏雄
10分で作れる酒の肴120種 ふるさとの記憶 木造校舎（上下） 野口日出子
文房具の研究 万年筆と鉛筆 武田信夫
辻留の和食器入門 辻嘉一

新刊

芥川龍之介「歯車」殺人事件 斎藤栄
神の代理人 改版 塩野七生
パエリャの故郷バレンシア スペイングルメ紀行（下） 太田尚樹
10フランの恋人 池田満寿夫
風霜の中で 私の絵筆日記 佐多芳郎
金子光晴と森三千代 牧羊子
マラーを殺した女 暗殺の天使シャルロット・コルデ 安達正勝
外交官日記 武田龍夫
秘境釣行記 今野保
園芸家12カ月 改版 カレル・チャペック 小松太郎訳
彩色江戸物売図絵 三谷一馬
窯変源氏物語7 胡蝶・蛍・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴 橋本治
日本の古代6 王権をめぐる戦い 岸俊男編
悦楽的男の食卓 西川治
野の花山の花 春をいける 岡田広山
ファラオの墓③④ 竹宮恵子
ドロロンえん魔くん①② 永井豪
新忍者ハットリくん②④ 藤子不二雄Ⓐ